

一般財団法人日本アジア振興財団（JAPF）

2018 年夏インターンシップ論文集

期間：ベトナム及びカンボジア 2018 年 8 月 19 日（日）～8 月 30 日（木）

カンボジア 2018 年 9 月 2 日（日）～9 月 9 日（日）

対象国：ベトナム社会主義共和国及びカンボジア王国

参加人数：72 名

男女割合：男 19 名、女 53 名

日本国籍者：72 名

参加大学：尚絅学院大学、茨城大学、宇都宮大学、獨協大学、学習院大学、学習院女子大学、お茶の水女子大学、国土舘大学、東京農業大学、慶応義塾大学、早稲田大学、津田塾大学、常葉大学、金沢大学、福井大学、仁愛大学、愛知大学、名古屋市立大学、名古屋経営短期大学、梅花女子大学、同志社大学、立命館大学、京都女子大学、京都産業大学、京都外国語大学、京都学園大学、摂南大学、関西外国語大学、関西学院大学、甲南女子大学、流通科学大学、島根県立大学、広島女学院大学、山口大学、山口県立大学、下関市立大学、高知大学、徳島文理大学、福岡女子大学、北九州市立大学、九州大学、宮崎大学、大分大学、熊本大学、長崎国際大学

帰国後の活動：（関西での修了式）

日時：9 月 26 日（火）14：00～15：00

場所：大阪 在大阪カンボジア王国名誉領事館

（関西での事後研修会）

日時：9 月 26 日（火）16：00～17：00

場所：大阪 日本アジア振興財団事務所

（関東での修了式及び事後研修会）

日時：10 月 6 日（土）14：00～18：00

場所：東京 JICA 地球ひろば

（福岡での修了式及び事後研修会）

日時：9 月 23 日（日）14：00～18：00

場所：博多 リファレンス 駅東ビル



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

発行：一般財団法人 日本アジア振興財団 学生委員会

【発展途上国から学ぶこと】

高知大学 人文社会科学部 2年生

私はこのスタディーツアーに参加するまで発展途上国には支援が必要で先進国が進んで行く必要があると考えていた。しかし、スタディーツアーで様々な所へ研修に行くにつれてその考えは少しずつ変わっていった。確かにカンボジアの教育やインフラ設備には日本の支援によって成り立っていたものもあったが、必ずしも先進国の支援が発展途上国を豊かにするというわけではないと農村へ研修に行ったときに感じた。彼らの住む場所に水道やガスは通ってなく、一年前に電気が通ったばかりで完全な自給自足の生活を送っていた。そのため仕事はほとんどしておらず、金銭的に見るととても貧しい暮らしであるが食には全く困っていないという観点から彼らは自分の暮らしに満足していた。それゆえ、将来就きたい職業や夢や希望はないそうだ。私たち日本人は、人生設計をしてそこで描いた人生のゴールに向けて逆算して考える傾向にある。そして、大学入試に失敗したり、希望した会社に就職できなかつたりと、どこかでその人生設計が崩れると途端に絶望に苛まれる。また、やっとの思いで就職した会社で過酷な労働を強いられて命を絶つ者までいる。そんな日本人の暮らしをカンボジアの農村の人々が聞いたら驚くだろう。彼らは私たちと違い、将来から逆算するのではなく、今日一日の生活を大切にしているようであった。ゆえに、彼らはその日の食料が確保できていれば、豊かな生活を送ることができているという認識を得ることができる。

そんな彼らに対して先進国は支援をしようとしているが、一体どのような支援が有効なのだろうか。手に職を付けるために技術を教え、都市部で働けるような支援は彼らにとって金銭の重要性は低いため、手に職を付けることの価値はあまりないと感じているのではないかと考える。また、教育の支援をするにしても、彼らは将来の夢もない状態で教育を受けることの必要性を感じることができるだろうか。そのように考えると、もしかしたら私たちが彼らの暮らしを豊かにするために行う支援は、支援を受ける側からすると必要ないものと感じるのかもしれない。「足るを知る者は富む」という言葉があるように、農村の人々の必要不可欠な食料が確保されていればそれでいいという考えは、生きていく上で何がどれほどあればいいかを知っており、その結果彼らは金銭のゆとりはないが、彼らにとって金銭の必要性は低いため問題はない上に、それで幸せに生活できている。そういった考え方ができる彼らの思考は私たち日本人よりよっぽど豊かに感じる。そうした考え方は希望を見失ったり働きすぎなどによる自殺が後を絶たない日本人は見習う必要があると考える。

【本当の支援とは？】

山口大学 経済学部 3年生

国際協力や支援を考えると、私たちは物資や金銭面での支援、または学校建設など形のある目に見える支援を思い描く。しかし、それらの支援は短期的なものにすぎない。

私にとって今回のスタディーツアーは、支援の在り方を考え直すきっかけになった。なぜなら、先進国の支援によってカンボジアが海外に依存し、その結果途上国から抜け出せなくなるという悪循環が起きていると感じたからである。

そのような悪循環を最も感じたのはゴミ山での研修である。実際に訪れるまで人々はここでしか生きていくことが出来ず、抜け出すことが出来ない為、やむなくここで生活していると私は考えていた。しかし、実際に訪れてみると自宅は別にあり普通に家族でお出かけのように、ごみを拾いに来ていること・実際には学校に通えている事などを知り衝撃を受けた。「本当は都市に出て働くこともできるが、宿泊代・ガソリン代等の生活費を考えたらここでその日暮らしの生活を送った方が楽。」実際はこのような考えを持つ人々が集まり、今の生活から抜け出したいとは思っていないという現実を知った。

しかし、このような負のループを生み出しているものは何なのだろうか。そう考えたとき元凶は私たち支援する側にあると感じた。私たちがゴミ山の存在を知り、足を運び、異様な光景を目の当たりにし同情から、モノを渡す。そのモノを売ってお金を手にする。こうすることでそれほどの肉体労働をせずともお金を稼ぐことができる。この一連の流れが繰り返されていく中で今の生活から抜け出したいという思いが薄れていったのではないだろうか。

また、アキ・ラーさんのお話の中に「カンボジアは地雷があることで海外からお金が入ってくる。だから地雷撤去をあまりさせたくないと考える人もいる。」という言葉があり、私はやり切れない気持ちになった。本当に自国の未来を考え、自ら行動を起こそうとしている人がいる中、先進国からの支援で私腹を肥やす人々によってその行動や思いが妨げられては意味がない。地雷問題にだけ関して言えば国にお金を送るのではなく、地雷撤去団体にお金が直接行くようにするため、その活動を多くの人に知ってもらえる機会を作ることの方が大事であると私は考える。支援したいという気持ちだけで行動するよりも実際に足を運び、本当に支援すべき部分はどこなのかしっかりと見極める必要があると強く感じた。

カンボジアの人々はみんな目が合うだけで笑いかけてくれたり、声をかけてくれたり、笑顔が素敵で明るく思いやりに溢れていた。その一方で、道端で物乞いをする子供の姿、障害のある人を道に寝かせてお金を集めようとする人々、このような光景も私は一生忘れることが出来ないだろう。そんな人々の未来を守るためにも、子供たちが教師や医者という限られた夢だけでなく自分の未来の為に希望に溢れた夢を持つことが出来るようにするためにも、同情から始まる支援ではなく、本当に必要なこと、必要な場所、意識の面からも自立していけるよう、カンボジアの人達と力を合わせて変えていきたい。



【幸せとは何か】

早稲田大学 法学部 4年生

今回、ベトナムとカンボジアの研修ツアーを通して、「幸せ」という抽象的な概念について深く考える時間を沢山頂いた。普段は、「幸せ」について考えることがあったとしても、個々人によって思考や価値観は異なるのだから「幸せ」の尺度も人それぞれで一般化できないと主張してきた。そして、その考えは月並みなものではあるにせよ、基本的に間違っただけとは思わない。しかし、実際にいわゆる発展途上国を訪れてみると、「幸せ」という概念をその月並みな考え方で安易に片付けて良いものかという疑問を抱く自分がいた。おそらく私は、一般化できない概念であると定義付けてしまうことによって、どうすれば各々の異なる「幸せ」を実現できるかという問題から目を背けていたのだと思う。「幸せ」の意味を思案することに加え、「幸せ」をどう実現するかを考えるきっかけを得たという点で、今回の研修ツアーは大変意味のあるものであったと感じる。ここでは、研修を通して五感で感じた経験を踏まえて、改めて「幸せ」がどういう概念であるかについて私見を述べたい。

「幸せ」を国語辞典で引いてみると「運が良いこと」や「巡り合わせ」などと定義されている。また、「幸福」を引いてみると「満ち足りていること」や「不平不満がなく楽しいこと・さま」と定義されている。「運が良いこと」や「巡り合わせ」を幸せであるとするならば、幸せが偶然の産物で我々がそれを獲得するために働きかけることは無意味であると解さざるをえない。しかしながら、「満ち足りていること」や「不平不満がなく楽しいこと」であるとするならば、能動的に獲得していける概念であると捉えることが可能ではないか。また「満ち足りている」といっても、物理的な充足感と精神的充足感がある。カンボジアで孤児院や農村の子供達と触れ合う前までは、その物理的な充足感ばかりに目を向けていた。道路は整備されておらず、水を飲むにも注意しなければならない。内戦の影響で多くの子供が基礎教育さえも受けられない。そのような状況下では当然「満ち足りている」状態にありえないと考えていた。しかしながら、孤児院の子供たちや農村の子供達と話してみると私の考えは一変した。ほとんどの子供達が屈託ない純粋な笑顔で我々を歓迎してくれ、そこには特に不平不満が見えなかった。現状の皮相しか見ていないと言われればそれまでであるが、少なくとも彼女ら・彼らの笑顔に嘘はなかったと夜の議論でも他の参加者と意見が一致した。ここから私は精神的充足感が物理的充足感を内包しているという結論に至った。すなわち物理的充足感を得ても幸せであるとは言えず、精神的充足感を得て初めて幸せであるとみなすことができるのである。そこで思い出したのが、JETROで話をさせていただいた日本の支援形態である。中国が大量の物資と資金を投入しハード面でカンボジアの開発を進めている一方で、日本は教育や人材育成に力を使いソフト面の支援を軸にしているという。幸せを実現するという観点からみれば、中国の支援形態では物



理的な充足感しか与えられないだろうが、日本の支援はカンボジア人の心を満たすような支援であるといえる。国連の2018年世界幸福度調査によれば、カンボジアは156カ国中120位と低位に位置している。ちなみにラオスは110位、ミャンマーは130位、ベトナム95位、タイ46位、日本53位となっている。この調査は、所得・健康と寿命・社会支援・自由等の要素を基準として順位付けされたものであり、やはりASEANの中でもタイが突出していることがわかる。とはいえ、これも一つの指標に過ぎず、直ちに悲観的になるべきではない。ここからカンボジアが成長するために何が必要なのか、幸せになるために何ができるのかを引き続き考えていくことが求められているのだ。

【豊かさを目指して】

関西学院大学 社会学部 3年生

発展途上国に住む人々を表す言葉としてよく「心が豊か」という表現が用いられる。たとえば、物質的な豊かさ、所謂金銭的な豊かさを得られていないとしても、そこで暮らす人々は愛や幸せ、優しさを知っていて、大きく豊かな心を持っているなどということを端的に表したものである。私が12日間過ごした中でもこの言葉はよく耳にしたし、ディスカッションではテーマにもされた。その場においても、ほぼ全員一致でカンボジアの人々の心は豊かだという認識がされていた。

しかし、本当にそうなのだろうか。また仮にそうだとすると、物質的に貧しくても人々が豊かな心を持ち、自身の境遇を嘆いているばかりではない場合、そこに支援は必要ないのだろうか。

ありきたりな言葉になってしまうが、本当に言葉通り、カンボジアの子供たちの笑顔はきらきらしていたし、ゴミ山や農村を訪問した際も私たちよそ者を快く迎えてくれた。実際、私自身も出会ったカンボジアの方々はずごく温かく、何かに追われているように生きる日本人にはない、なにか大事なものを持っているなどかんじた。しかし、そんな豊かな心を持つことのできる人々は過酷な経験や生活を強いられてきた人々の中でほんの一握りなのではないかという想いがすてきれない。ナイトマーケットを訪れた際、川にかかる短い橋のぬぐい切れない負の雰囲気は一瞬言葉を失ってしまった。そこには7、8人ほどが地べたに座り、ただ黙って手をあわせて歩く私たちの方を向いて物乞いをしていた。赤子を抱えた14歳ほどの少女もいれば、手を失った老人、人とは思えないほどやせこけた女性、その人達の目に笑みなど少しもなく、どこか社会を憎んでいるような、すべてを諦めたような目を感じた。そしてこのような人々は私が思うよりもたくさんいるのではないかと感じ、同時に自身がどれだけ無力で無知なのか思い知らされた。

我々は言われたこと、授業や研修、本などから学んだこと、訪れた場所を鵜呑みにしてしまいがちだが、暗い社会の影からさえも隠れている人々や実態にも明かりをあてていかなければ、結論をだしてはならないのではないだろうか。

上で述べたように、途上国で物質的に貧しいとしても人によって精神的に安定しているか、周りに頼れる人がいるかなどは様々である。物質的にも精神的にも貧しい人にたいして支援、援助が必要であることはある程度理解されやすいだろう。では、お金がなくても学校にいけなくても、障害をもっている、職場がゴミ山だとしても、人生に光を持ち誰かと助け合い笑いながら、生きている人々に外部からの支援は必要なのだろうか。都市部で目覚ましい経済発展を遂げている東南アジアの国々において、本人が幸せで満足しているからと地方や農村部に対して全くアプローチをしなければ、将来その格差はどんどん広がり農村部に住む人々が生きてゆけなくなるのは社会の流れとして目に見えている。だからとい



って、政府や先進国が国際競争参入のために次々に農村部の生活や仕組みを変えることで現在保たれている幸せや平穏を壊すことにはならないだろうか。本当にその人々自身は外からの支援を望んでいるのだろうか。

この問いかけに対してたった 12 日間の研修のみでは知識不足で、自分の考えを持つにも至らなかったが、このことは国際協力をするにあたって非常に重要なポイントになるだろう。「豊かさとはなにか」永遠のテーマではあるだろうが、いつの日か世界中の人々がこの豊かさを得られる社会になることを願うばかりだ。

【2018年長期研修を終えて】

同志社大学 政策学部 3年生

私は、この研修を終えベトナムそしてカンボジアのこと、詳しくはそれらの国が抱える現代の問題について理解することができた。まず、初めにベトナムについてだが、ベトナムという国は、ベトナム戦争という大きな過去の傷跡があり、今がある国だ。戦争証跡博物館では、それが顕著に表されていた。ドクさんたちとの会食では、直接枯葉剤の怖さを知り、2度あってはならないことだと感じた。だが、私が感じたことはこれだけではない。最も私が感銘を受けたことは、そういった立場に立たされた人が、人一倍に人間でいることだ。足が片方ないという現実が自分に襲いかかれば、私はどうするだろうか。5体満足であり、裕福な暮らしまでも送ることが出来ている。物事は客観的に見ることに価値があると私は思う。だが、その時は主観的に物事を見てしまった。生きることに何の意味があるのか、自分に生きている価値を見いだすことができるのか、多くの悲観的な考えが私の感情と結びついたのだ。私は自分に対するこの質疑に解を出すことが出来なかった。次に、CHAでの研修だが、男尊女卑社会の風潮が取れきれていないカンボジアで、女性の雇用機会は小さくある。その中でも、クメールルージュや地雷被害、その他ポリオなどで生活に難がある女性の雇用を広げることを目的とする企業がNHAだ。事前学習では素晴らしい綺麗話だと思い、とても興味が湧いた。会長の話、そしてまたそこで実際働く方の話を聞くと、その企業の魅力に惹かれ、改めて素晴らしい所だと思う。だが、一方でその日のディスカッションでは、私が思ったことと反対の意見が多く上がった。企業というものは0の状態から成長し、100ではなくそれ以上を目指すことに価値がある。だが、NHAにはそれが感じられなかったのだ。確かに、株式会社ではなくNPOを母体としている。だが、企業には変わりなく、自分たちが物を作り、売り、それが利益となる。そうすることで、雇用を新たに作るができる。私たちがNHAに抱いた印象は、成長を目指す企業より、現状を維持する企業といったことだ。こういった少し厳しい意見を持つと、物事は大きな視野で見ることができる。NHA以外にも多くの企業や学校、その他研修で回ったところでは、内戦であるクメールルージュや地雷被害のことが多く話され、過去にあった大きな傷跡を背負った国であることは話を聞くたびに痛感する。しかし、カンボジアという国にとって今大事なことは、将来性が見える発展だ。今日より明日、明日より1年後という考えが欠如しているように私には見えた。上記で述べた、過去の被害もカンボジアの将来を作る上で忘れてはいけないことだ。しかし、様々な訪問先で話を聞くと、過去の被害の話をよく耳にするが、それからの先の見通し、将来設計の話はあまり耳にしなかった。話は少しそれるが、カンボジアで大きく力がいれられている産業の一つとして観光業がある。カンボジア王国観光省で貴重な話を聞くことが出来、とても満足だが、そこに問いを投げかけることが最も大切なことだ。そこで私が唱えた疑問は、カンボジアの産業発展は他にどうい

うものがあるのか、だ。その疑問を自分の大きな念頭に置き、話を聞くと、『観光業以外の他産業は大きく国の力とはなっていない。農産業、いわゆる第一次産業に関しては国の大きな GDP を占めており（約 30 パーセント??）機能しているが、その他、第 2 次産業に関しては実際厳しいところがある。その例に、電力は国内生産があまり出来ておらず、電気代も周りの国と比べ、非常に高く、日本とあまり変わらないということがカンボジアの現状である』といったものがあった。私はそこを大きな問題と考え、解決することがこの先、カンボジアの経済の底上げを図る第一歩であると感じた。少し厳しい意見になってしまったが、現在のカンボジアが抱える諸問題についてと、それを解決しなければならぬ理由について、この JAPF の 2 カ国インターン研修で学んだ自分なりの意見を書いてみた。まだまだ、このツアーについて書きたいこと、自分の中の心情の変化など多くあるが、話が少しそれてしまうため、ここで論文を終える。



【発展途上国支援の意味を考える】

同志社大学 法学部 3年生

私は、バングラデシュにある孤児院に関わるサークルがきっかけで発展途上国の支援に興味を持った。一度、ボランティアではなく学びに行くという形でアジアの途上国を訪れたいと思っていて、今回カンボジアでのスタディツアーに参加したが、そこでの経験は途上国支援の意味を考えさせられるきっかけになった。前々から感じていたことでもあり、JICAの職員の方にも言われた言葉だが、なぜ日本国内でなく海外を支援するのか、ということである。なぜ日本でなくカンボジアなのか。

まず、発展途上国とはどういう国なのか。カンボジアの渡航前の印象は、東南アジアの中では経済発展が遅れている国、だった。実際に訪れてみると、想像よりも綺麗で発展している都市の中心部と、その周りや農村部との格差が大きく、景色が全然違っていることに驚いた。そして研修先での学びから、国の発展が遅れている要因として、ポルポトの時代が教育、医療、インフラなど様々な面で影響していると感じた。フランスから独立して、20年ほどでポルポト政権により文明を破壊されて、その後から続いている現政権も国民が信頼できるものではないという、カンボジアという国を知って、発展途上にある国がどういうものなのか理解が深まった気がした。

では、どうして発展途上国を支援するのか。私は、世界の格差を少しでもなくしていくことが平和につながるからだと思う。農村で、ポルポトの時代を経験した方が、ポルポトは農村と都市部の格差をなくそうとしていた、この格差が大きいままだといつかまたポルポトのように恨みを持ち、同じことが繰り返されるかもしれない、と話されていた。実際に、農村で見た人々の暮らしは都市部で見ていた人々とは全く違う貧しいもので、時間の流れも違うようだった。そんな格差をなくす努力をするのは先進国にとって必要なことなのではないかと思った。

しかし、ちょうど今、日本が相次ぐ自然災害の被害を受けているときに、どうして日本でなく海外を支援するのか。ツアー中に考えていて思ったのは、発展途上国だからといって一方的な支援になるとは限らないな、ということだった。Sui-johの方のお話ではカンボジアの経済はだんだんと発展してきているようだったし、TAYAMA 日本語学校を訪問したときには、カンボジアの学生の学ぶ意欲や能力の高さに驚いた。また、孤児院や農村で子どもたちと触れ合ったときには、日本人の同じ年の子どもたちよりも英語が話せる子が多いと感じた。今回のツアーを通して、カンボジアはとてもおもしろい、魅力や可能性のつまった国だと思った。そんな国と、助け合う、という感覚を持つことが、ボランティアする側にとって必要なのではないかと思う。

どこの国にもある良い面と悪い面、カンボジアで両方を見てきた。支援することが必要なのか正しいのか、何度も考えさせられた。ツアー中に感じたことを忘れずに、これからも



考え続けていきたい。

【私たちはどういった支援をするべきか】

金沢大学 国際学類 2 年年

私が今回このスタディーツアーに参加したのは、ベトナムやカンボジアといった発展途上国の現状を自分の目で見てみたいという思いからだった。もともと発展途上国の開発や、途上国への支援、ボランティアに興味があり、なかでも東南アジアにとくに行ってみたいと思っていた。

ベトナムもカンボジアも初めて行ったが、都市部は思っていた以上に発展していた。様々な店が建ち並び、人々で賑わっていた。しかし道、特に歩道は十分に整備されておらず、かなり歩きにくそうだった。また、信号機が少なく私のような外国人には道を横断するのも一苦勞で、ガイドの方がいなければいつまでたっても道を渡れなかった。カンボジアには鉄道があるが、JETROの方によると時速30kmで線路は曲がっており、便利な代物とは言えないとのことだった。よって鉄道を利用する人は少なく、また高速道路もないため、普通道路の交通量が多く、渋滞が慢性的に起こっている。カンボジアのGDP成長率は年々上がっており、著しい成長を遂げてはいるが、インフラの整備という点では、まだまだ課題が山積みのように感じた。私はJICAの支援によって建設されたつばさ橋のように、日本がインフラ整備に関してカンボジアをもっと支援することができればいいのではないか、と思っていた。しかしそれはハードウェア面の支援であり、JETROやCIESFが行っているソフトウェア面の支援とは異なるものであることを知り、大変興味深いと感じた。JETROで聞かせていただいたお話によると、建設業のようなハードウェア面の支援に関しては中国が主に行っており、JETROではソフトウェア面の支援として人材育成を行っているということだった。CIESFでも、学校を建てるといったハードウェア面の支援よりも、より持続可能性の高いソフトウェア面の支援をしたい、という思いから教員の育成を行っていた。今まで私が発展途上国への支援として想像していたものはハードウェアに関するものが多かったが、それだけでは不十分だということを思い知らされた。

どういった支援を行うのがその国にとって最も効果的なのかを考えることは私が思っていた以上に難しいことだった。発展している都市部にもまだ様々な課題があるが、都市部と農村など、国内の格差も大きな問題である。国内の経済格差はよく耳にする問題であるが、実際農村やゴミ山を目にすると都市部とのギャップの大きさに愕然とした。農村での暮らしは私には到底無理だと感じたし、ゴミ山に至っては別世界のことのように感じられた。私が一番驚いたのは、そこで生活している人々の多くが彼らの生活に満足していることだった。農村での自給自足を基本とした生活は、ものが少ないとはいえ、充実しているように見えたし、ゴミ山で生活している人々は、定職につくことよりもゴミ山で気楽に生活し、お金を稼ぐことを選ぶことが多いと聞いた。私にとっての幸せな生活と彼らにとっての幸せな生活はまったく違うのだと思った。途上国への支援を考える時、自分たちの尺



度で考えるのではなく、そこに住む人たちの幸せに寄り添った支援とは何なのかをもっと考える必要があると感じた。

【1日の大切さについて】

仁愛大学 人間生活学部 2年生

私は、今回の研修で1日の大切さに気づかされた。この12日間の研修は1日1日の密度が濃くて、1日がこんなにも短いということを思い知った。たった1日でも、いろいろな人のいろいろな考えを知って、自分の考えを深めて、多くの事を学べることに気がついた。

まず、ベトナムでもカンボジアでも、現地で戦争を体験した人達の話聞いて、死を間近に感じて生きてきた人達の「これからの若い人達が戦争や世界のことについてもっと勉強して、平和な世界にしてほしい」という願いを全身で感じた。彼らは、死と隣り合わせの生活をして、やりたくないけど自分が生き延びるために仕方ないから戦って、きっと生きた心地がしなかっただろうと思った。でも、ベトナム戦争を戦ったベトナム兵達は、厳しい戦いの中でも娯楽を大切にしていたことを知り、戦争が終わってから楽しいことをするという考えではなく、1日を消費的に生きるのではなく、1日を充実させて後悔しないように生きていたのかなと思った。また、カンボジアでは、これから良い世の中になると思っていたのに、ポルポト政権によってそれが一変してしまったという事を知り、世界はいつどうなってしまうのか誰にも分からないのだと思った。さらに、そのポルポト政権で教育制度が崩壊されたことによってカンボジアの教育不足や医療不足、経済力不足など、現在の社会的問題に繋がっていることも知り、教育の大切さを感じた。そのことから、今まで私が勉強できていたことがどれだけ貴重なことなのかに気づくことができ、これからも勉強できることに感謝して学び続けたいと思った。

SUI-JHOでは、浅野さんの話を聞いて行動力の重要性を感じた。日本では助かる命もカンボジアでは助からないことも多く、人はいつ死ぬか分からないから、今やりたいと思うことを諦めずに行動に移していくことが大事だと、その結果失敗してもそれはいい経験になるのだと、経験者の話だからこそ伝わってくる説得力を感じた。浅野さんは、夢を語っても実現できる人は少ないとも言っていて、私自身がそうになってしまうのではないかと考えてしまった。夢は大きい方が良いと聞いて、すぐに出てきた夢は私からしたら本当に大きくて、それを叶えるためには並々ならぬ努力が必要だと改めて思い、勉強も様々な人との関わりもやっておくべきことがたくさん見つかったので、「明日やろうではなく、今日やろう」という考えを大事にしたいと思った。

また、私を含めた参加者の何人かが今回の研修中に体調を少し崩してしまっていたことから、環境の変化が体に及ぼす影響の大きさを実感した。そして、しっかり食べて、適度に運動して、しっかり寝ることが毎日を健康に生きるために必要な要素だということを再確認できた。特に、今食べているものが自分の体をつくっていると考えると、栄養バランスの整った食事は非常に大切だと改めて思った。さらに、ベトナムやカンボジアのトイレを使用して、日本のトイレは本当に清潔で使いやすいのだと改めて感じた。また、食事に関し

ては、生野菜や青果物、生水を口にできなくて、日本が衛生管理をしっかり行なっている証拠だと思った。この研修を通して、日本では当たり前に出ていたことをそこでは出来なくて、今当たり前に出ていた事を明日も当たり前に出て来る保証は無いのだと思った。

今回の研修での出会いを大切に、これからの人生の糧にしていきたいと思うとともに、今後も新しいことに積極的に取り組み、1日1日を後悔なく過ごしていきたいというのが理想だと思った。でも、私は、何1つ後悔の無い1日を過ごしたことはないで、それはとても難しいことだと思うし、これからも後悔することは多いと思う。だから、後悔しない生活は無理だけど、それらの後悔を生きてきた証だと思えるような日々の過ごし方をしたいと思った。

【急成長する発展途上国の課題】

関西外国語大学 外国語学部 2 年生

私が今回 JAPF に参加したきっかけとして、1 方向からだけではなく様々な方向から考えることができるという点が 1 番の決め手だった。その様々な方向から、知らなかったことを学んで吸収し、今の課題とは一体何なのかを考えた。

まず初めに、インフラ整備が整っていないことを入国してすごく感じた。道路はガタガタでほとんど舗装されておらず、都市部でさえ最近になって信号機がだんだん増えてきたが、信号や交通道路のルールを守らない人が多すぎる。そういった道路の規制やルールをしっかりと国民に理解してもらわなければ、救急車など緊急時通りたい時に通ることができないと、本当なら助かる命も助からなくなってしまう可能性は大きくなるだろう。また、道のいたるところにゴミがあることや、宿泊先のホテルの水が濁っていること、外国人観光客のための言語の表示をもっと増やすべきだとも感じた。そして、今は SNS の時代でたくさん様々な情報を得られる時代なので、有名人やスターたちが及ぼす影響力はとても大きく、同じ場所に行って同じものを見たいという気持ちを起こさせることで、観光客が増え、そこでお金を遣ってもらうことで国自体の経済も良くなるだろう。SNS をもっと有効活用し、Wi-Fi スポットを増やすことで、また訪れたいと思ってもらい再来訪者を獲得することはとても大事だと考えた。

次に、教育の欠如と人材不足である。およそ 40 年前、ポルポト政権の時代に 4 分の 1 の国民が大量虐殺されていたという事実があり、そのほとんどがポルポト政権に刃向ってきそうな知識層の人たちであった。そのため、カンボジアの教育や医療などが 1 度ストップしてしまい、その影響が現在も残っていて少し上の世代の識字率は低い。また、都市部の月の平均月収が 200 ドル以下で以前よりは上がっているが、小学校に入ることはできても卒業するまでに辞めてしまう子たちも少なくなく、学年が上がっていくにつれてその数は減少していき、大学にいたってはほとんどいないのが現状である。このような現状を解決するためには、CIESF のように学校をただ建てて終わりではなく、授業内容や教師たちを育てること、バランスを考えて未来のリーダーを育てていくというソフトウェアが大切だと感じた。

そして、孤児院の現在の課題である。私はツアーの仲間と訪問した孤児院について話した。その孤児院はとても設備が整っていて、将来のことまで面倒を見てくれていてすごく環境がよく、私たちが想像していた孤児院とは違って驚いた。一方で、支援が届いておらず衣食住の環境も整っていない孤児院もまだまだ存在しており、政府やボランティアの援助が行き届いていないので、必要などころに手を差し伸べるべきだと思う反面、外からの支援に頼りすぎな部分も見え、自分たちで補っていける力も必要だと感じた。幸せや豊かさの感じ方や、どう思われるかは人それぞれで誰かに決めつけられることは決してあってはならないと強く感じた。



今回のツアーで感じたことは、急成長することによって課題が山積みになっていて一気に全てを解決することは難しく、時間がかかることは避けられないことだと気付いた。しかし、課題が分かり必要としていることも知ることができ、これからどのように行動するか考えるきっかけになったので、もっと積極的に行動し色々な世界を見てみたい。



【幸せのあり方】

京都外国語大学 外国語学部 3年生

私は、今回このベトナム・カンボジア2カ国研修に参加して、いろんな考えを持つ人達と出会い、様々な視点から物事を見ることの大切さを学んだ。このツアーに行く前は、発展途上国では人々が貧しく苦しい生活をしているというイメージが強かったけれど、実際に足を運んでみると想像と違って、そこにはたくさんの笑顔と人の温もりがあった。そこで彼らの「幸せのあり方」とは何かについて考えた。

第一に、私がカンボジアに行き何を感じたか聞かれれば、はっきり言えるのは、「人の暖かさ」だ。貧富の格差や教育の問題、政治的問題や経済的問題、環境問題やインフラの問題など、様々な問題を抱えている国ではあるが、そんな事を感じさせない程の心からの笑顔で迎えてくれる現地の人々。そんな人たちと出会う中で私は自分のちっぽけさを感じた。私たちの住む日本にはなんでもあるが、それでも人々は足りないという。カンボジアに行って心から感じたのは、自分がどれほど満ち足りた世界で過ごしていて、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前ではないということだった。カンボジアの現状を知り、贅沢を言って過ごしていた自分が本当に恥ずかしく思えた。

カンボジアの子どもたちは、皆が皆学校に通えるわけではない。学校があっても教師の不足や十分な教育体制が整っていないなどの問題が挙げられた。そこで最も印象的だったのが、1975年から1979年までカンボジアを支配したポルポト政権の悲惨な虐殺があったこと、そしてその犠牲者は皆知識人であり、知識人がいないことが今現在のカンボジアに多大な影響を及ぼしているということである。カンボジアには未だに至る所で存在するポルポト信者の力を恐れ自国の歴史を語り継ぐこともなく、言葉すら読むことのできない大人がたくさんいるのが現状だ。その事実を変えることは容易ではない。自分の無力さを感じた。しかし、アキラーさんのように、悲惨な過去を経験したにもかかわらず自分の信念のままに地雷を撤去し続け平和を目指す人や、チア・ノルさんのように、幼くしてポルポト時代に父を亡くし、逃げるように日本へやってきてJSTに所属し、カンボジアの農村の活性化や教育支援をする人がいる。そして彼らは悲惨な過去を繰り返したくないと、ポルポト時代の事実を子どもたちに語り継ぐ。私は、彼らのような平和を願う人々がもっと声をあげていける、そんな社会を築きあげてほしいと願う。

では、カンボジアに住む人たちは果たして「幸せ」なのか？その答えはきっと誰にもわからないが、少なくとも私が現地で感じたのは、たとえ住むところが都市部だろうと、農村部だろうと、ごみ山だろうと、彼らは今の生活に満足しているということだった。今回のツアーで訪れた孤児院やフリースクールでは、多くの子どもたちに出会ったが、そこは無邪気で屈託のない子どもたちの笑顔で溢れていた。彼らの無垢な笑顔は紛れもなく、ひとつの「幸せのあり方」だと感じた。カンボジアの未来を担う子どもたちの笑顔をどうか



絶やさないでほしい。自分にできることは何か、平和な世界を築くためにはどうすればよいか、これから日々考えていきたいと思った。



【先進国に生きる私から見たカンボジア・ベトナム】

立命館大学 政策科学部 2年生

私はこのスタディツアーを通して特に思うことがあった、支援のあり方について述べる。カンボジアは世界各国の支援によって、急速な発達を遂げている。しかし、このままで本当にいいのか疑問に感じられた場面いくつか遭遇した。

はじめに感じられたのはカンボジアの都市、プノンペンを散策した時、支援が必要とされるこの国で特に中国、日本を先頭に各国が支援競争をしてはいないか？と疑問に感じられた。大きい日本国旗のついた建物の横には韓国の国旗がついたこれまた大きな建物。日本が建てた橋の横には中国のたてた大きな橋。そしてまた日本国内の中でも、カンボジアの大きなハードウェアな支援をするに当たって企業が競争をしていることを知り、これがもし田舎の農村などの小さな支援だったらこのようなことが起こるのか、と疑問に思った。そして、それが都市と農村への支援の行き届き方にやはり現れているような気がした。

教育面では、日本が多く支援をしており、誇らしさを感じる一方で違和感を感じることも多かった。例えば強く日本式を推す教育支援。日本の教育を受けて来たからこそ本当に日本の教育方式をそのままカンボジアの子供たちに押し付けるのはどうなのかと疑問に思った。特に TAYAMA 日本語学校の忘れ物をした際に、「僕は忘れ物をしました」というふだを下げているのを見て、忘れ物したら廊下に立たせる時代、つまりある一つの問題には、一つの正解があり、規律を守ることを教える古き日本の教育をそのまま反映しており、多様を尊重する教育が、日本教育に求められている時代であるからこそこの大きなギャップを感じた出来事だった。

平和面では、未だ言論の自由がなく自国の国の歴史についてあまり知らない、知っていても話すことができないカンボジア、戦争に貢献した人々を称え続けるベトナム、これらの事実にはかなり驚いた。その激闘の時代を経験している人が沢山生きている2カ国だからこそいまある平和を保つためにできることが沢山あるのではないかと感じた。ベトナムの高齢者施設で出会った戦争に生き抜いたおばあちゃんの「戦争は本当に怖い」という言葉の重さ、カンボジアで地雷撤去活動を続けられているアキ・ラーさんの「沢山平和を勉強して、広めてください。そして恵まれている人は恵みを与えてください。」これらの言葉は本当に胸に刺さるものがあった。「戦争を知らない方がいいのか」「戦争を学んだ方がいいのか」これは永遠のテーマではあるが、終戦から73年もの月日がたつ国で生活する日本人は絶対この言葉を受け継いでいかなければならないと思う。いまだからこそ、日本も平和について改めて見直す必要があるのではないかと。

また、自給自足で豊かに見える生活をする農村の子供達を見て「本当に教育は必要なのか？」と疑問に思うことがあった。もちろん先進国に生きる私たちの常識を当てはめると答えはYESなのだが、無理矢理に教育を進め、都市化を進めることは彼らの経済面を支える一方で、日本のように東京集中型、過密化過疎化が将来的に問題になるのであろうし、今豊か

な生活を送る彼らにとって教育は必ずしも必要なのだろうかという疑問に思った。ゴミ山で、生活する人々を雇用しようと起業した会社があるが彼らは自由に生きられるゴミ山の生活を望み雇用を拒んだ、という話を聞いたときは驚き、そこにニーズがない支援は成立しないのだと考えられた。そして、子供たちと話すときに感じたことは、私たちが支援することで自分たちが貧困であることを再認識し、それが彼らを苦しめるのではないかということ。これは孤児院でも同世代くらいの子達が周りの小さい子供達に比べて私たち、いわゆる孤児院観光客の受け入れを少し拒んでるように感じたこと、そして日本語学校の子供達にキラキラした目で言われた「何か国行ったことがあるの?」「日本はどんな国?」「日本で働くことが私の夢なの。」そして、「世界は不平等だね。」という言葉。私たちにとって教養を深め、世界を知ることが夢を広げることでもあり、大切なことのように感じる。しかし、その世界を知ったときに、その夢を叶えられるチャンスの違いを彼らはきっと感じており、私たちが支援することで、よりその事実を突きつけられているのではないかと不安になった。

実際にカンボジアに行き勉強したから言えることは、ゴミ、電気、水、インフラなどまだまだカンボジアに不足していることは沢山あるが、カンボジアが他国に頼らず、自立していくことが大切であるということ。また、カンボジアブランドを高める、という新しいビジネスとしての支援のあり方も存在するのだという新しい発見。そして、先進国日本で暮らしてきた私たちだからわかるその国の現在の課題や将来に考えられる課題を彼らの目線にあわせて上手く伝えていくことが私たちができる、必要な支援のあり方なのではないだろうか。

【カンボジアは貧しい国なのか】

高知大学 人文社会科学部 2年生

カンボジアと聞いてほとんどの日本人が思い描くのは「発展途上国である」や「貧しい」などのマイナスのイメージである。実際に、この研修に参加する前に私がカンボジアに行くと伝えると「地雷は大丈夫なのか」「子供の貧困がやばそう」「貧しい」「発展途上国だから自分は行きたくない」などみなマイナスのことばかりを口々にそろえた。「いたいそんな貧しい国にわざわざ何をしにいくのか」とさえ聞かれた記憶がある。私も最初にはカンボジアに対して「貧しい国」であるという認識を強くもっていた。研修に行くことに対して不安な気持ちが大きかったことに嘘はない。実際に、ベトナムからカンボジアの国境を越えた時に道路が舗装されていないため砂ぼこりがひどく環境が悪そうというのがカンボジアに抱いた第一印象である。だが、研修を終えた今はカンボジアのイメージは大きく変わっている。そして、カンボジアは貧しい国なのかを考え直す必要があり、日本人が抱いているマイナスイメージを改善すべきであることを主張したい。

まず1つ目に、カンボジア王国観光省を訪れたとき、カンボジアが観光業で成り立っている国と知ってびっくりした。特にエコツーリズムの取り組みやカンボジアを売りに出す仕事に力を入れインバウンドを強化している。これは日本ではあまり知られていないと思った。発展途上国というイメージが染みついているため、観光地という認識が低いように思われる。次に、カンボジアの人は「貧しい」ではなく「豊か」であると思った。それは、他人と比べず、他人の価値観に左右されない人生のとらえ方が日本とは違うと感じたからだ。社会的地位が高ければいいというのが日本で、他人と比べて自分は劣っている、不幸な人だと思いがちである。そして上的人是は下を見て笑う。だからこそ、「発展途上国になんていかない」と言う人もいる。私がカンボジアのお土産を渡すと「発展途上国のお土産は怖い」とまで言われた。もちろん包装もきちんとされているお土産である。そこにカンボジアに対する偏見が感じられた。だが、カンボジアの人はその真逆である。他人と比べて自分が不幸だとは思っていないし、弱いものいじめをしない。農村の中学校では、弱いものをいじめるより強いものと戦いなさいという教育さえされている。さらに孤児院でも、日本だと親がいなくてかわいそうなど勝手に不幸なイメージをつける人が多いが、カンボジアでは国全体で身寄りのない子供たちを受け入れようとするあたたかさが感じられた。そして決してその子供たちが不幸だなんて思っていない。

たしかに、衣食住などは日本に比べると貧しいかもしれないが、笑いあって助け合って生きているところや、自分の生活を不幸だなんて思わない心の豊かさをカンボジアでは感じられた。そしてそれを日本人も見習うべきであり、日本人の下のものを見る偏見を改善しなければいけないと思った。

【日本がカンボジアにできる支援とは】

徳島文理大学 短期大学部 1年生

私は発展途上国や海外ボランティアに興味があり、自分の目で途上国の現状を見てきたかったので、今回の2か国スタディツアーに参加した。けれどカンボジアの都市部は貧困な印象はなく、農村部は思っていた通り貧しくて支援が必要な状態であるようだった。同じ国のあまり離れていないような地域でもこのような格差があることを初めて知った。

正直、都市部だけを見ると発展途上国のように見えない。なぜこのような格差ができるのか。カンボジアは観光業が国の収入の割合を多く占めていると学んだ。カンボジアはアンコールワットのような歴史的遺産がたくさんある国だ。それに今回私たちが訪れたように、トゥールスレン収容所やキリングフィールド、アキラー地雷博物館など、戦争や平和、歴史について学べる場所もたくさんある。おかげで世界中から観光客や見学に来る学生が毎年たくさんいる。都市部はこれらの観光客のために作られた街のように思えた。

日本はカンボジアに様々な支援をしていると思うが、もっとやるべきことがあるのではないかと少し感じた。世界の中でも人気の観光地の裏には、まだまだ多くの問題が残っている。現地の農村部の人々は働き口も多くはないし、ゴミ山でゴミを拾ってお金にしている人もいるし、子どもたちはどのような職業があるのかも知らず、教育もまともに受けられていない状態にあったりする。また、親が育てられなく、孤児院や施設に預けられる子どもたちもいる。

日本はカンボジアに日本語教育や日本企業の進出を促したり、観光や都市の発展の支援をする以前に、本当に困っている人々や地域のための支援の方にもっと力を入れるべきだと思った。日本が、発展していない地域に対して行っている支援もたくさんあることは分かっているが、私はどうしても都市部と農村部の格差に反感を抱いてしまったため、このような考えがまとまった。

私は将来、青年海外協力隊に参加しようと思っている。今回のスタディツアーで学んだこと、自分が現地の人々のためにできる一番大切なことをしっかり考え、行動に移していきたい。自分にできることは限られたことしかないかもしれないが、可能性を信じてなんでも挑戦していこうと思う。

今回のツアーで発展途上国について多面的に学ぶことができ、自分の視野を広げることができた。自分の思いや、見てきたことを自分の中で留めておくのではもったいないと思えるくらいの経験ができた。だから私はもっとこのような経験を深めていきたいし、発展途上国やボランティアについて学べる機会があればもっと学びを深めていきたい。また、多くの人にこのような学びにふれてもらいたい。ひとりでは限られているが、積み重ねていくと大きな力になるし、皆が協力するともっと大きな力になると思う。だから私は継続と協力を大事にして世界の途上国の助けになりたい。

【理想と現実のその先は】

同志社大学 経済学部 1年生

“途上国とは、貧しい人々がその日一日の暮らしを送るのに必死になっている国のことである。”研修前まで、私は“途上国”に対して、この程度の印象しか持ちあわせていなかったし、自分とは関係のない世界のことについて知ろうともしなかった。

“途上国で生きるには。”ツアーでは、この問いについて考える機会が多くあった。これは、全ての研修先で共通して、与えられた問いだったように思う。まず、この問いを考えるにあたって、先進国の人々が途上国に対して、漠然と抱いている印象はおそらく、“途上国はお金がなくて、教育を受けられないから、負の連鎖から抜け出せないから、お金と学校が必要なのだ。”というものだと思う。私も最初はそうだと思っていたし、先進国の多くの支援団体は途上国に学校建設を、というフレーズを掲げて活動している気がする。しかし、実情は先進国側が考える理想の支援の方法とはかけ離れたものだった。例えば、教育面に着目しただけでも、実情は大きく異なるものだということが分かる。お金や学校というハード面ではなく、モノというソフト面が不足しているのだ。CIESEFで“中身の支援が足りていない。”という話を聞いた。先生や学校という存在自体はあるが、教育指導要領が曖昧であったり、先生自体の経験が乏しいため、生徒の指導力に欠けるということだ。

また途上国では、富裕層と貧困層の格差が大きい。CIESEFの方によると、富裕層の家庭では、親が子供に対する教育を選択できる。CIESEFはこのような富裕層向けによりよい教育を受けられるように支援をしており、未来のための教師を育成するため、時間をかけて人材育成のための教育を支援している。その一方で、未だに貧困層の子供は、貧困により、親の教育への理解を得ることができないため、初等教育しか受けることができず、やむなく働きに出る子もいると聞いた。このようなCIESEFの支援の方法を聞いたとき、先進国側が考える途上国の理想と現実が途上国の実情と当てはまっていないなという確信した。生まれた家庭に関係なく、一人でも教育を受けることができているのなら、その子のために、社会がある程度平等でなければならないと感じた。

途上国に生きるということ、それは子供が将来の生活を諦める場所になってはいけない。みんながある程度平等に生活することができる場所であってほしい。そのために私達ができることは何があるだろう。そして、私達先進国側の人間が描く理想と現実のその先には、何があるのだろうか。よくある金銭面での支援や途上国支援のためのボランティア活動を続けても意味がない。きっと富裕層と貧困層分け隔てなく、途上国の人々が個々で自立できるような形の長期的な支援にしないといけない。この先、そのような支援を確立するのに、どのくらいの時間がかかるのだろうか。大人になるまでに、あらゆる分野について視野を広げ、将来途上国がみんなが平等に教育を受けることができるそんな平和な場所になるように貢献したい。

【それは本当に「事実」なのか？】

同志社大学 政策学部 1年生

「アキラ氏、地雷や銃器、手榴弾を違法に所持していたという理由で逮捕」。今回のスタディーツアーから帰国して数日後のある日、そのような記事が私の目に飛び込んできた。アキラ氏といえば、今回のツアーで訪れた地雷博物館の館長であり、これまで地雷を撤去し続けてきた人である。ネット上には同氏が「大きな犯行」を企てていたと書かれた記事もあった。だがその報道は果たして事実なのだろうか。

私が今回のスタディーツアーを通して得たものはここには列挙できないほど多くあるが、その中でもとりわけ出来事を色々な角度から見て、自らの目で確かめる重要性を学んだ。その根拠は以下の二点である。

第一に、個人による考え方の違いである。カンボジアで1970年代に行われたポル・ポトによる「原始共産主義」を目指す政策については、私は高校時代に世界史の授業で習っており、無慈悲な虐殺者という印象だけであった。このイメージは現地に着き、旧トゥールスレン収容所やキリングフィールドを視察した際にはより鮮明になった。しかしながら農村部を視察した際、住民は必ずしもポル・ポトを強く非難してはいなかった。ポル・ポトは確かに残虐な方法で強制的に政策を実行したが、その根底には農民と都市の格差をなくしたいという農村出身の彼の強い意志があったのであり、至極真つ当な政策を実現しようとしていたのである。また、ツアー中にごみ山を視察した際、そこで生活するスカベンジャーの方の話も興味深い。彼らのごみの中から資源を見つけ販売して生計を立てており、生活基盤は不安定である。しかしながら彼は、今後もこの生活を続けたいか否かを私が質問した際、ほかの職にはつかずこのままの暮らしがしたいと答えていた。彼は、この仕事が他より楽だというのである。私たちは、汚染物質の多いごみ山は危険であり、焼却施設を設置して現地で暮らす人々を解放したいと考えてしまうが、このような考えは現地の人々との間に大きな隔たりを設けてしまう。

第二に、支援の格差である。カンボジアはいわゆる発展途上国であり、世界各国から支援されている。しかし、その規模は背後にある団体の大小に左右される。今回訪れた孤児院や中学校は、日本やイギリスによって比較的多くの支援を受けており、設備も充実していた。しかし、カンボジアには支援が行き届いていない施設も数多く存在する。また、政府高官は一部の支援を私利私欲に費やし、カンボジアの発展による支援の停止を危惧しているという声も聞いた。アキラさんも今回の騒動が起こる前、政府により一度、地雷博物館が閉館に追い込まれたことがあるが、その原因はアキラさんの活動を快く思わない高官のためともいわれる。支援をして満足するのではなく、必要な場所に必要な支援が行き届いているかどうかを確かめる必要がある。

今回の騒動についても、ツアー開始前の私なら報道を鵜呑みにしていたかもしれない。だ



が、ツアーを終えたからこそ一歩退いて考えることができた。ツアー中のディスカッションの話題にも挙げたが、メディアによる情報操作が行われている現在、情報リテラシー能力は以前よりも重要性を増している。物事を多面的に見て、可能なら自分の足で現地に赴き、本当に「事実」なのか。他の考え方はないのか、今後の生活で常に意識していきたい。



【「良い教育」とは】

関西外国語大学 外国語学部 2 年生

私は教育について興味があり、このスタディーツアーでは発展途上国の様々な教育機関を訪れることができるという点に魅力を感じ参加を決めた。私は今まで私達が日本で受けてきた教育は「良い教育」とであると信じてきた。しかし、カンボジアの教育機関や教育現場を訪れてみて、日本の教育との明確な違いを感じ、日本の教育本当に「良い教育」であるのか疑問になった。このツアーは私にとって「良い教育」とは何かを考えるいい機会になった。

まず歴史教育についてである。カンボジアは 1975 年から 1979 年までポルポト政権によって支配され、医者や教師など知識のある人を含む百万人以上の犠牲者を出した。トゥールスレン収容所やキリングフィールド、アキラー地雷博物館の見学を通じて歴史の伝え方に日本との違いを感じることができた。具体的に言えば、日本では必ず自国の文化を学ぶ機会がある一方で、カンボジアではあまり自国の歴史を学ぶ機会がないこと。また博物館や資料館では、日本では絵や文章による説明などが多く残酷な写真や展示物を避ける傾向にある一方でカンボジアでは当時の場所に当時使っていたものや写真などを包み隠さず展示していた。実際に犠牲になった人の遺骨や本物の地雷など日本では考えられないような展示物が数多くあった。ディスカッションでは日本は自国の歴史を学ぶ機会があるが、そのほとんどが受験や定期テストのためであることや残酷な写真や展示物を避けるため歴史を表面的にしか学ぶことができないことやカンボジアでは当時に近い状態で歴史に触れることができるが、学校などで歴史を学ぶ機会がないなど両国のデメリットも話題になった。歴史の本質は歴史を学んだ上でどのように平和を作るか、この歴史を風化させないためにできることは何かなどであると私は考える。私個人の意見としては歴史を当時に近い状態で感じるということは非常に重要なことであり、歴史の本質を考える上で欠かせないことだと思う。

次に障がい者教育についてである。カンボジアの障がい者教育施設である CHA では、日本の障がい者教育と大きく異なっていた。私が特に CHA で衝撃を受けたのは明確な目標とそれに向けた段階的な教育を行うのではなく、自分で目標達成できたかを判断することができ、ある程度放任されていることである。CHA の最終目標は生きる力を身につけるということであり、その達成度を測るものは自分の判断のみであるというのは日本と大きく異なる所であると思った。日本ではマニュアル化された教育を専門的な知識を持ったスタッフが行うことで障がい者の社会復帰を目指している。カンボジアの障がい者教育では、精神的な自立すること、つまり自分に自信を持つことや自主性を重んじているという良い点がある一方で、社会保障制度などが不十分であり、政府がきちんと障がい者に対する支援ができていないという問題点も見つかった。また、ディスカッション時にカンボジアの障がい者教育を日本に導入してみてもどうかという問いに対しては、社会保障制度が充実していて、政府による障がい者に対する支援が行われている日本の障がい者はカンボジアの障がい者と比較

して向上心が乏しく、卒業しても戻って来れるという点から居心地が良く甘えてしまいそうであるという意見があった。確かに社会保障制度が充実することは良いことであるが、それにより生活が保障されることで現状に満足し、向上心を失うことにつながるのかもしれないと思った。また、社会全体に障がいを持っているという意識を無くすことが出来るような社会づくりをしていくことがこれからの障がい者教育の課題であると思った。

今回のツアーでは、日本のような先進国で行われる教育全てが「良い教育」ではないということに気づくことができ、本当に「良い教育」とは何なのか考えるととても良い機会になった。また、ディスカッションを通して私の意見とは違う角度からの意見や気づくことのできなかった事などに気づかせてくれる意見などがあり、このツアーは私にとってとても有意義なものであった。今後、このツアーでの体験を思い出で終わらせるのではなく、この経験を活かし、どのように生きていくかなど自分の将来に繋げていきたい。

【盛りだくさんの気づき】

同志社大学 法学部 2年生

私は2ヶ国研修に参加し、多くの人と出会い、いろんな価値観や考えや文化に触れた。そして、私自身変わった。では、どのように変わったのか？これから、私を変えたものの中から印象的なものを2つ挙げる。

まず1つ目は、当たり前だと思っていたことが当たり前ではないと気付いた点だ。一番印象に残っているのは、アキ・ラー地雷博物館で聞いたアキ・ラーさんの話だ。アキ・ラーさんは「幼い頃から教育を受けてこなかったため、人を殺してはいけないということや戦争を起こしてはいけないということが分からなかった」と言っていた。私はこの言葉を聞いたとき、唾然とした。なぜなら、「人を殺してはいけない」、「戦争を起こしてはいけない」ということは、私にとって当然のことだと思っていたからだ。でも、アキ・ラーさんの言葉を聞いて、私の当たり前が当たり前ではないということに気付かされた。これまで私が抱いていた教育のイメージといえば、国語で漢字を覚えたり、算数で計算のやり方を学んだりといった知識を増やすものだった。しかし、教育はそれだけでなく、私がつもつ価値観や考え方といった私自身を形成している部分にも影響していた。だから、教育のもたらす影響はとても大きいと私は強く実感した。

当たり前が当たり前ではないということは、教育の面だけでなく様々な面においてもいえる。カンボジアは、私の当たり前だと思っていたことを何度も覆した。カンボジアでの交通ルールやトイレの使い方などは、日本と大きく異なり私を驚かせた。こうして、当たり前が当たり前ではないと気付いたことは、私自身や私を取り巻く世界を見つめ直すきっかけとなった。

次に2つ目は、物事を多面的に捉えることの面白さに気付いた点だ。これは、一緒に参加したみんなから教えてもらったことだ。最初に私が衝撃を受けたのは、戦争証跡博物館に行った後の帰りのバスの中で、それぞれが感じたことをシェアしていた時だ。私自身、戦争証跡博物館に行って感じたのは、ベトナム戦争による被害はとても大きかったということだった。銃や戦闘機の被害だけでなく、地雷や枯葉剤による被害もあり、ベトナム戦争の悲惨さを私は身に染みて感じた。しかし、ある子は「他の国々も戦争に参加しているにも関わらず、アメリカがベトナムに与えた被害が重点的に取り上げられているように感じた」とメディアによる情報操作の観点から意見を述べていた。また、博物館に訪れている観光客に注目している子もいた。この時、私は「同じものを見ていても、ひとりひとり感じることは違うんだ！」ということに気づき、私の世界が広がったように感じた。この2ヶ国研修に参加する前の私は、主観的に1つの視点から物事を捉えることが多かったように思う。しかし、研修先での質問や、バス内での感想のシェアや、夜のディスカッションを通して、自分にはなかった視点からの考えを私は知ることができた。そして、私自身も1歩下がって客観的にい

ろんな視点から物事を捉えることができるようになった。また、みんなで話し合うことで自分の世界が広がることの楽しさを感じたのと同時に、自分のもっている知識の少なさも痛感した。知識を増やすことでもっと自分の世界を広げることができるから、これからはいろんな分野の世界をのぞきこんでみようと思った。

この2ヶ国研修を通して、私は多くのことを学び、感じ、考えた。そして、少し成長したように私は感じる。でも、このまま現状に満足してはいけない。2ヶ国研修を終えて日本に帰ってきてからも、2ヶ国研修で得たことを忘れずに、さらに前に進み、成長していきたい。

【私たちができる支援とは何か？】

京都外国語大学 外国語学部 3年生

私は、今回のカンボジアスタディツアーに参加して、現地の人々が本当に必要としている支援は何なのか、そして私たちのような学生にできる支援とは何かを知るために参加した。実際に現地に行って感じたことは、都市部と農村部の教育の格差が歴然としていること、戦争によって今もまだ教育面で環境が整っておらず、勉強をまともに受けられない子供が多くいることである。その現状を目の当たりにして、今できる支援を考える。

そもそもなぜこんなにも支援が必要なのか。それは、1970年代のポルポトによる原子共産主義による独裁的な政権が原因である。階級や格差のない社会を目指し、質素で堅実な農村生活を行うべきだとして、学校の先生や医者などの知識人と呼ばれる人々を拘束して虐殺していった。そのため、ポルポト政権が終わった今でも、先生や医者の数が足りず多くの国が医療面や教育面で支援をしている。実際に医療の面で高齢者施設と日本の支援でできた sunrise japan hospital を訪問して、2つの施設での多くの違いを感じた。高齢者施設は国立の施設で sunrise japan hospital と比べると設備が整っておらず、衛生面でも不安を感じた。それに比べて sunrise japan hospital は日本の設備をそのままカンボジアに持っていったような程整っていた。また衛生面でもしっかりと対策されていた。そして、医療従事者を育てるための環境が整っていた。

また、都市部では設備が整っている施設で教育や医療が受けれるが、都市部から少し離れた農村部では、教師が極端に少ないため、午前と午後に分かれて授業をしていたり、設備が整っていない施設で授業を受けたりするなどはっきりとした違いがあった。これらのことを踏まえて、もっとも必要な支援は教育面にあると感じた。クロサトメイ孤児院に行かせいて頂いたときに、学校に行かない子供が働いたお金で薬物を買ったり、孤児院に連れてきても元の生活のほうが楽だと戻ってしまう子供がいたりすることに驚きを感じた。私はその原因は親にあると感じた。なぜなら、その子たちの親も教育を受けいてないため、子供たちに正しいことを教えることができないからだ。多くの子供たちに教育を受けさせるため、そして都市部と農村部での教育の格差を少しでも縮めるためには、教師を増やすことや勉強する環境を整えることが重要だと感じたが、私たちのできることは限られてしまう。私たちにでもできることは、その事実を多くの人に伝えて、カンボジアの現状を知ってもらうことが私たちに出来ることだと感じた。

カンボジアとベトナムで過ごした2週間は、一緒に過ごした仲間から多くの刺激を感じ、今までで一番濃い日々を過ごせた。また、これからも私ができる支援を考えて実行出来たらなと思った。



【普通の支援とは】

島根県立大学 総合政策学部 2年生

私は今回のカンボジアのスタディーツアーに参加して物事は実際に自分の目で見ないとわからないことがたくさんあると感じた。ツアーでたくさん場所を訪れる中で、インターネットや文献の情報だけが正しいのではないとはっきり認識した。そして今、カンボジアを含め多くの発展途上国が本当に必要としているものは何か、当たり前や普通とは何かを改めて考えていく必要があると感じた。

まず私がツアーに参加する前に抱いていたカンボジアのイメージとしては、町は汚く、住んでいる人はお金がなく衣服も十分に買えず、みんな悲しい顔をして生活しているんじゃないかというイメージだった。しかし、実際カンボジアの地に一歩足を踏み入れた時から、自分の中で抱いていたイメージと全然違う景色が広がっていた。カンボジアの人はとても優しく、笑顔が溢れていて楽しそうに生活をしていた。都市部では大きなビルやきれいな建物が並んでいて想像をはるかに超える都市であった。しかし、都市から離れた農村などでは私たちが想像していたような暮らしをしている人たちもたくさんいた。普段日本で便利な生活をしてる私にとってすべてが衝撃的だった。発展途上の最中であるのは重々承知の上だが都市部と農村部ではかなり格差があると感じられた。さらに医療、教育など多くの面での整備がまだまだ不足していると感じられた。

ツアー中に訪れた Sunrise Japan Hospital ではカンボジアでは医師の数も看護師の数も少なく、医療教育が欠如していると言っておられ、日本にいて治せる病気でもカンボジアでは治せないのであればいくら国が表面上発展してもカンボジアの国民は発展していかないのではないかと感じた。また医療は教育とも直接かかわってくる問題だとわかった。

教育の面では CIESF を訪れた際に日本式の教育を取り入れて国のリーダーを育てていく支援をされていると聞いて国が発展していくにはまずリーダーを作っていくことが大切だなと感じた。しかし、一部の人間だけに高水準な教育をしていたらここでまた大きな格差が生まれてくるのではないかと感じた。今のカンボジアに必要なことは一部に高水準の教育を受けさせるより全体に基礎的な教育を徹底させ、全体の教育の底上げを図ることだと感じた。

今回のツアーで私は初めての海外で、普段日本で生活している当たり前がカンボジアでは通用しない。「当たり前って何？」と感じることが多くあった。それは支援も同じことであって、私たち支援する側が発展途上国なら普通これが必要でしょ。と一方的に支援をするのではなく、発展途上国の人たちが本当に必要だとしているものを届けることが普通の支援であり本来の支援なのだと肌で感じた。

【カンボジアにおける支援】

大分大学 経済学部 2年生

私は、今回カンボジアについて知りたい、と思いこのツアーに参加したが、ツアーを通じて様々な施設を訪れカンボジアの様々な面を知るうちにどんどん分からなくなったことがある。それはカンボジアという国がどこへ向かうべきなのか、そしてそのために私たちにできることは何なのかということだ。カンボジアは様々な国から支援を受けている。その中でも、日本は様々な方面で支援をしており、それが親日と言われる所以でもあるだろう。今回は、カンボジアの教育を支援している CIESF や高い医療の提供を目指す Sunrise Japan Hospital を訪れた。

私は、この研修を進めていくうちに「支援」という言葉の意味を考えるようになり、ほとんどの日本人が、先進国の日本が、何もかも持っていない発展途上国のカンボジアに分け与えている、そのような感覚なのではないかと思い始めた。私自身、発展途上国の今を知り、自分たちにできることを考えたい、といういささか傲慢な気持ちでここを訪れたかもしれない。農村の中学を訪れた時に、海外からの支援に頼り切ったカンボジアの実態を知った。他の職業を探さずに、支援が入っているゴミ山での仕事を続ける人たちの姿や、どのようにすれば海外からの支援を多くもらえるかを考える政府の姿だ。日本は何のためにカンボジアを支援しているのか疑問に思ったし、自分の国がやっている支援の内容を、ましてや支援していることすら知らない自分達の無責任さに腹が立った。また、支援が進む中での疑問も浮かび上がった。例えば、高度な医療を提供できる病院ができたとして、その病院で高度な医療を受けられる人は果たしてどれほどいるのだろうかということだ。都市に住む、富裕層だけがお金を払って高い医療を受けられる、そんな風に医療格差が生まれるのではないか。日本の支援によって、日本の高い医療技術や、教育をカンボジアに持ち込むことがカンボジアの発展につながるのだろうか。それがカンボジアを豊かな国にすることにつながるのだろうかと考えさせられた。

この研修中「豊かさ」についてよく議題に上がった。日本が豊かな国で、カンボジアが物理的、金銭的に劣っているから、豊かさの面でも日本より劣っていると考えるのはあまりにも安直だと気付かされた。他国と比べて、物理的、金銭的に優れているから、豊かだろうと、他国と比べることで「豊かさ」を感じている私たちの心の方が貧しいのではないかと思い始めた。金銭的なものや物理的なものを求め続けることはキリのないことであり、それらを求め続けることが「豊かさ」に直接的に繋がる訳ではないのかもしれないと思い始めた。

カンボジアが豊かで幸せな国に近づくために何をすればいいか私にはまだ分からないが、カンボジアについて分かったふりをせず、知りたいという気持ちを常に持ち続けたいと思うし、同時に日本が豊かで幸せな国に近づくために、豊かで幸せな国になろうとする不断の努力をし続けなければならないと思った。この研修で自分の目で見えて感じたことを大切



にして、これからの行動に移していきたい。

【支援とは】

京都女子大学 現代社会学部 2年生

カンボジア・ベトナムでのインターンシップを通して学んだことは「支援」という言葉の難しさ複雑さである。「支援」という言葉を考えるうえで印象に残っている言葉がある。「カンボジアは他国に依存している。原因は先進国からのドネーションだ。」Sui-Joh という会社を運営する浅野佑介さんの言葉だ。私はこの言葉の重要性を研修を通して痛感した。まず、今回訪問した多くの施設で他国からの支援がないと運営は難しい、政府からのお金はないという声が聞かれた。また、印象的だったのは観光客に近づいていく多くの子供たちだ。少しぐらいお金をあげてもいいのではと思っていたが、現地ガイドの方は絶対に与えてはいけないという。それはなぜか。もしお金を与えればその子供たちはそれ以上進歩しようとしなない。彼らは観光客によって行けばお金がもらえ生活できると思ってしまう。教育を受けず働きにもいなくなる。

一時の情に流され短絡的な支援をしてはかえってその国、人の可能性を狭めてしまう。それだけ支援は慎重に行わなければいけないものだ。「支援」と口で言うのは簡単だ。しかし、リスクをはらんでおり支援するからには責任を持たなければならない。その支援を相手は本当に必要としているのか、自分の自己満足におわっていないか慎重に考えなければいけない。形だけ表面だけの支援は本当の支えとはならない。

今回の研修で私は自分の無力さと無知を実感した。支援の難しさ複雑さを語ることはできても、どんな支援なら良いのか聞かれれば答えに困る。

持続的に被支援者、被支援国の可能性を広げるそのような支援はあるのか。

本当の「豊さ」を築くための「支援」とは何かこれから私が考えるべき課題だ。研修を通して学んだこと感じたことをそのままにするのではなく、深く掘り下げ考えを発展させることでカンボジア・ベトナムインターンシップへ行った価値をより見出すことができるだろう。

【カンボジアのイメージと実態】

学習院大学 法学部 3年生

今回ベトナム・カンボジアのツアーを終えて今なお強く印象に残っていることがある。

それは日本で定着しているカンボジアへのイメージが実際のカンボジアと乖離してしまっているということだ。筆者自身カンボジアを想像したとき思い浮かんだのは、「貧しい」「危ない」といったマイナスなワードであったし、カンボジアに行くと言ったときには友人や両親からかなり心配され、「なんでよりもよってカンボジアなのか」と聞かれた。その問いに何の違和感も持たず「発展途上国の現状をこの目で見たいから」と簡単に言えば「どのくらい貧しいのか知りたい」という答えを返した。今思えば新しいものを得ようとしていたにも関わらず、情報を鵜呑みにして自分の価値観からカンボジアを「貧しい」と定義しカンボジアに足を踏み入れたのだった。カンボジアの人や文化に触れて初めてその事実が付いた。明るく陽気な性質を持つ人が多く、口に合うか懸念していた料理も美味で、目には見えないが観光省で拝見したプロモーションビデオでは美しい海が紹介されており、唯一の観光名所だと多くの人が思っているであろうアンコール遺跡群の他にもカンボジアには様々な魅力があった。それが日本に伝わっていないことを痛感した。しかし、それにも理由があることを知った。

まず発展途上国として支援金を受け取れるようにする力が動いているということが挙げられる。筆者の聞いた話では、支援を求める映像で、わずかな食事でも家族と楽しんでいるシーンにおいて、音声を変えて悲しげないかにも貧困で苦しんでいる様子にしたものが存在するらしく、また訪問先であったアキ・ラー地雷博物館は政府からの圧力で一度閉館したようだ。そういったものからイメージは改善されずにいるのだと感じた。そして、もう1つ理由として考えられるのは私たちが持つ価値観や先入観が、不便で物的に豊かでなく賃金も安いという要素から、すぐに「貧しい」「不幸」と決めつけてしまいがちであるということである。実際に収入がほとんどない農村を訪れてみると、自給自足をして自由気ままに生活をしており、その生活は決して貧しいわけではなく不幸でもなかった。緩やかな時間が流れ自然と共存するというのも、日本にはなかなか無い魅力の1つであろう。

こういったことからくる負のイメージは支援が貰えるというように一時的にはカンボジアの利益にはなるが、長期的な視点で見ればカンボジアの自立や発展の障害になるだろう。カンボジア政府はカンボジアのイメージ改善に努めるべきであるし、支援する側もカンボジアを自らの足で見に行き、そこで得た知識をもとに支援をすべきである。

そのように考えることができたのは筆者自身が自分の目で見て自分の耳で聞いたからであると断言できる。以前から情報を容易に信用せず多面的に物事を判断しようと心がけていたのにも関わらず、簡単にマイナスのイメージを持ってしまっていたのだ。それを本当に反映させるためには実際に足を運ぶ必要がある。それが難しいとしても、友人の経験談など



のナマの情報に敏感になり、自分の意見にもバイアスが存在することを加味するということが大切だ。私たちがこれからたくさんの選択をしていくなかで重要となってくることであるし、そうすることで本当の意味で自分の見解が持てるのだと筆者は考える。

【2か国研修を経て】

常葉大学 外国語学部 2年生

私は高校生の頃から発展途上国、およびその地域への支援やボランティアをすることに興味があり、今回のスタディーツアーへの参加を決めた。事前学習として研修先のことをある程度調べまとめたものの、実際に足を踏み入れ耳を傾け、そして目の当たりにすることで多くの衝撃を受けた。

研修前に自分が胸に抱いていたベトナムとカンボジアの印象は、戦争や内戦の爪痕が今も深く残っていて、都心部と農村部の貧富の差が激しいといったものだった。その差を埋めるために、私たちには何が出来るのか。何をすべきなのか。ただ知識として吸収するだけでなく、自分なりに咀嚼をし考え、研修を終えた後に両国に関して発信していくことを目標に掲げ研修に臨んだ。

結論から述べると、私たちは無力であることを痛感した。まず第一の理由として、両国での人々との出会いにある。物乞いをしている子供に会った時も、ゴミ山の不衛生な環境の中で生活する人々にも、路上生活をしている人にも、何も出来なかった。「お腹が空いた」「助けて」「お金を恵んで」言語は通じなくても、身振りや表情から必死さが痛いほど伝わってきたのにも関わらず、唯一出来たことが、彼らから目を背け、その場から立ち去ることだった。孤児院や農村での交流の機会の際に、彼らと遊び、彼らを抱きしめ、ただ愛情が伝わるように願うことしか出来ない自分がとても無念だった。

第二の理由として、戦争や内戦の歴史を学べる研修先を訪れた際にある。ベトナムの戦争証跡博物館、クチトンネル、カンボジアのトゥールスレン収容所、キリングフィールド…そういった負の歴史を学べる施設には、目を背けたくなるような資料が沢山あった。枯葉剤により奇形として産まれてきた人の写真や、拷問器具、生気を失った目をした人々の写真。当時もしこの場所で生きていたら、私は社会の風潮に反し平和維持活動のための声を上げることが出来ただろうか。ポルポト支配下の中で、どれだけ惨い拷問を受けても、自分の信念や忠誠に真正面に向き合い続けられたらだろうか。きっと出来なかつただろう。

話は逸れるが、負の歴史を学べる上記の施設の見学者に多かったのは、欧米の人々であったように見受けられた。欧米の人々は、彼らの祖先が侵した過ちを二度と繰り返してしまわないように、学び、後世へと伝えようとする意識が多く国民に根付いているように感じた。「過去の過ちを見るからこそ現在の平和がある」ポルポト時代の生還者の方の言葉を胸に、我々日本人も歴史を表面的に学ぶのではなく、事の発端なども学ぶ必要性とともに、先祖がしてしまったことも学んでいくべきだと感じた。

私は戦争を経験していないし、身内から当時の話を聞いた経験もあまりない。そのため、当時を想像することは自分にとって非常に困難である。また、毎日衛生環境の整った中で生活することが出来ていて、大学で夢を叶えるための勉強もさせてもらっている。こんなに恵

まれているにも関わらず、私は自身に常にフラストレーションを抱いている。だが両国の人たちは、金銭的に豊かだとは言えなくても、皆が笑顔で温かい人たちで、過去の悲しみを感じさせない雰囲気があった。私たち日本人はお金があってもどこかいつも寂しそうで、冷たい目をしている。戦後の急速な経済発展とともに、私たちは何か大切なものを失ってしまったのではないだろうか。そして、「豊かさ」とはGDPなどの数値でも、第三者によっても測れるものではないのではないだろうか。

最後に、昨今の複雑化した国際情勢を生きる一人の若者として、今回のツアーに参加したことで過去の悲惨な歴史を自分の目で確かめるとともに、平和構築への思いをより堅くすることが出来たことを誇りに思う。熱を帯びたディスカッションも、引率の御二方の助言も、自分の見識や価値観を広めてくれた。この縁を大切に、そして、出会えたことに感謝して、これからは自分の身の回りの人に両国についての発信に努めていきたい。



【カンボジアの医療事情】

お茶の水女子大学 理学部 1年生

カンボジアの著しい経済発展に比べて、ポル・ポト時代の影響で信頼を失墜した医療は未だ発展の兆しが見られていない。カンボジアが抱える医療の問題は、医療施設不足、インフラ未整備、貧困、公的な保険制度が整っていないことなど多様であり、これらを解決するのは困難である。今回のスタディーツアーで訪れたサンライズジャパンホスピタルは、日本の医療を丸ごと他国に送り込むという医療の輸出産業化を目指しており、従来のメディカルツーリズムとは違った方法で医療ビジネスを展開している。医療施設、医療機器を現地へ持ち込むといったハード面での支援だけでなく、カンボジア人医師の教育を行うなどのソフト面での支援、またカンボジアで得た新たな医療知識・技術を日本へ逆輸入するというように両国に利益を期待することができる。医療をビジネスとして捉えることに若干の抵抗を覚えたが、高度な日本の医療知識・技術が受け継がれることでカンボジアの医療の発展が望めるはずであるし、日本の産業の国際化や医療の発展も見込まれるため、産業再興と国際展開を目指す日本にとっては理想的な支援の在り方なのではないかと感じた。しかし、未だ解決が容易ではないのが貧困による医療格差である。サンライズジャパンホスピタルでは公平な医療を提供するために会員制を取り入れているが、それでも貧困に喘ぐ人々が治療を受けることができるというわけではない。医療格差を是正するためには支援を均一化し、人々が平等に治療を受けられるような医療のあり方を提案していかなければならない。また最終的にはカンボジア人によるカンボジア人のための医療が行われるような、医療におけるカンボジアの自立を目指すべきである。我々は、そのための道標としての支援を行っていかなければならない。

先進国が発展途上国の自立のために本当に必要な支援を行うには、その国の現状を知り、国民の声に耳を傾け、政府と話し合った上で、どのようにして協力すべきかを検討し、支援機構同士が時には国際単位で技術や情報を共有し協力し合うことが必要である。また先進国の我々は自国の発展が、他国の繁栄と犠牲の上に成り立っていることを忘れてはいけない。自国の繁栄のみに満足するのではなく、その土台を担ってきた発展途上国の発展と自立のために自ら国際社会の一員としてより良い支援のあり方を考えていきたい。

【研修として行った意味】

尚絅学院大学 総合人間科学部 1年生

JAPF の研修としてベトナムカンボジアに行くことができて本当によかった。私はボランティアとして行くか迷ったが、研修として行ったことに意味があったと思っている。もしボランティアとして行っていたならこんなにも多分野にわたって研修先に行けなかつただろうし、ある程度肯定的なイメージを持って行っていただろう。けれど研修として行った私は客観的に見ることで、良い面だけでなく、悪い面や問題点も見ることができた。

例えば1つ目は、CIESF ではカンボジアの子どもたちが日本式教育を受けることについて考えさせられた。日本の教育は世界の中でもトップクラスだと言われているし、日本の良さである感謝の気持ちや、マナーを学ぶことができるだろう。それに日本に興味を持って日本の企業に将来就職する子もいるかもしれない。ボランティアで行っていたなら私はこれらの良い面だけを見て終わってしまっていただろう。そこで終わらないのがこの研修だ。私が注目したのは CIESF のカンボジアの未来のリーダーを育成するという最終目標である。そもそもカンボジアの未来のリーダーを育成するために日本式教育を小さいうちから受けさせる意味はあるのか？という疑問を持った。確かに日本の教育の質は高い。しかし母国語ですらままならないカンボジア人に日本語や、日本のマナーを教えるのは違うと思った。カンボジアの未来のリーダーを育成するという目標があるのならまずは自国の言語や文化から徹底してやってから、日本ないし他国の教育を受けるべきだと思った。

2つ目は孤児院の子ども達についてである。子ども達が想像していたより元気で楽しかった。という思いだけで終わらせたくない。ここもまた研修だからこそだ。孤児院の子ども達は幸せなのだろうか。確かに孤児院では短い期間ではあるが、教育を受けることができるし、ストリートチルドレンだったら見てくれる人はいないけれど、孤児院なら観光客などの大人に甘えることができる。一方で、3ヶ月から6ヶ月という期間が短く、教育を受けたところで中途半端に終わってしまうし、親と離れたときのようにまた寂しい思いをしなければならなくなる。孤児院は子どもを引き受けたからには期間を作らず、責任を持って最後まで見るべきなのではないかと思った。

このように各研修先にて、物事をあらゆる方面から客観的に見るようになるようになった。そして、何よりも自分の意見をしっかり持てるようになった。それだけの収穫でこの研修を締めくくりたくない。自分がカンボジアにできる本当の意味での支援を考えていかなければならない。“やらなかったら0、やったらプラスかマイナス。0はなにをかけ算しても0だけど、挑戦してマイナスをかけ算したらプラスになる。”これは研修中に航さんに書いてもらった印象的な言葉だ。自分の中でカンボジアに対する支援の形がまとまったらこの言葉の通りすぐ行動に移す。

現地で現状を肌で感じ、良い面だけでなく、問題点や悪い面をしれたからこそ、しっかり考



えて今後の自分の土台にしていきたい。

【幸せとは】

国士舘大学 建築学部 2 学年

私は、今回のベトナム・カンボジアスタディーツアーに参加して、自分の目で耳で心でそれぞれの国の今を学ぶことができた。日本と言う国では考えられないような事ばかりだった。日本で暮らすことが当たり前で、いざ2か国に行って12日間ほんの少しの間学び、日本に帰って来てなぜか悲しかった。自分にできることはなんだろう、もっとたくさんの国を知りたい。こんな気持ちは日本にいたら絶対に感じられることは無かったと思う。

幸せとはなにか。日本にいる時もよく考える事だった。当たり前のように帰る場所があり、食べ物があり、携帯で連絡を取ったり、大学に通ったり、電車に乗ったり、バイトをしたりそんな毎日をすごしているのに幸せなのかわからなかった。だが、この12日間を通してカンボジアとベトナムに住んでいる人たちは笑顔が絶えず心が豊かな人たちばかりに出会った。幸せというキーワードについて学ぶことが沢山あった。このツアーに行く前は、あまり発展しているイメージはなく、貧しいというイメージを持っていた。実際に行ってみるとお店がずらりとならんでいたり、車やバイクもたくさん走っていて、綺麗な公園もたくさんあって体操しているおばあちゃんおじいちゃんもたくさん見て、夜はネオンの光が綺麗だったり、すごく魅力的な街並みであった。しかし、孤児院やごみ山、農村といった場所では交通整備が整っていなかったり、家も暮らしも都市部とは明らかな差があった。映像で見たことがある世界が、いざ目の前にあり、言葉では表せない感情だった。孤児院では子供たちはみんな笑顔でいっぱいパワフルで元気をもらった。しかし本当に貧しい子どもは少ないことが現状で、「孤児院に行ける子どもたちは幸せだ」と言う農村の人の声も聴いた。ごみ山では小さな子供たちが沢山いて、新しいごみを運んでくるトラックに人が集まりゴミを拾う生活を目の当たりにした。実際に見て衝撃でしかなかった。自分がここで暮らすのは絶対に考えられないのにごみ山で暮らす人たちは自分の意志で、働きたくてごみ山にいる事が信じられなかった。ほかの場所で働いても知識の差で、働くのがしんどかったり、給料が変わらなかったりすること。ごみ山については難しい問題だと感じた。農村では自給自足の生活を見た。果物の木がたくさんあって働かなくても食べ物はたくさんある。学ばなくても今のままで幸せという暮らしだった。自分の価値観がいつきが変わった瞬間だった。日本では幸せに暮らすために学び、働いて生活することが当たり前だったけど農村では全く違う世界だった。お金がないから幸せではないなんてことは全くないただの偏見だった。すごく魅力的な生活だった。幸せとはその人たちが決めることであって私たちが決めることではなくて、自分が幸せと思えることが幸せなのだと学んだ。私はそういう生き方をしていきたいと思った。最後の日、「豊かさとは」というテーマについて話し合った。この話し合いが一番心に残っている。カンボジアに来て心が豊かな人が多かったという人が沢山いた。豊かさは周りの人たちが感じることで幸せは

自分が決める事と言うことを学んだ。カンボジアに行つての残酷で悲惨な出来事を学んだが、みんな現地の人々の笑顔や元気をたくさんもらったと思う。私はこんなに貴重な体験ができたからこそこれからの自分の行動が大事だと思う。全てが当たり前ではないことを忘れずに、まずは自分が幸せだと思う生き方をし、家族や友人、周りの人たちに笑顔を与えられるような生き方をしていきたいと思った。幸せとは愛であり、周りに広がっていくものであるから、このことを忘れずに12日間のこのツアーを通して得たことを存分に活かして行きたいと思う。



【12日間のベトナム・カンボジア二ヶ国研修を終えて】

津田塾大学 学芸学部 2年生

今回ベトナムとカンボジアを訪問し、日本で普段生活しているだけでは見ることの出来ない現状や記憶に残る光景を数多く目にした。また、言語や文化も違う人々との忘れられない出会いもあった。特に印象に残った研修先として、カンボジアのシェムリアップのゴミ山とチャイルドドリームを挙げたい。そして、二ヶ国研修に参加し、各国の人々の暮らしや多分野にわたる分野の成長に迫ったことで、研修前から興味を抱いていた発展途上国や貧困国の人々に対する教育支援の在り方について再考することにも繋がった。

私はゴミ山を訪問する以前、不衛生で過酷な環境で暮らす人々に対して、可哀そうで悲惨であるとしか思っていなかった。ところが、当たり前のように慣れた手つきでゴミ集めをしている子の中には学校に通っている子供も居り、親の仕事の手伝いが親孝行にもなるという考え方を知った時、彼らには彼らなりの価値観で成り立つ暮らしがあるのだと知った。また、観光業が盛んなシェムリアップでは生活していくことにお金がかかりすぎると知り、彼らの健康や将来の展望についての考え方に今後深く調べてみたいと思った。ゴミ山で暮らす人々の表面上の情報を鵜呑みにしないこと、己の価値観で物事を図ることは行き過ぎた解釈に繋がると強く感じた。しかし、カンボジア政府は民間のスポンサーの支援に頼りすぎるのではなく、根本的な解決策を探るべきである。ゴミ山での労働は彼らにとって生計を立てる手段にならざるを得ないことが、成長が生んだ負の代償である。訪問した際、変化をどのように起こせばよいのか分からない自分自身の無力さを思い知った。

そして、私がこの研修中に最も記憶に残っている出来事として、研修の終盤に訪問したチャイルドドリームが挙げられる。とあるカンボジア人学生が「日本で、もし親から進学を止められたり、自由に学ばせてもらえなかったりしたら、どこに相談し、どのような対応機関があるのか」ということを尋ねられた。カンボジアの農村部では、大人数の兄弟姉妹を養うために十分ではない低所得で暮らしている家庭が多く、経済的な理由から学校を早期中退にならざるを得ないという。実際に親の出稼ぎに子供たちも駆り出され、その期間学校に通えず学力の遅れにも繋がっていることを知り、そのような現状から脱却する方法やカンボジアにはそのような課題に対応する制度面が非常に脆弱であることを実感した。その中でも経済的な支援や保護者への理解を得ることは非常に難しいことであると感じた。また、そのような状況を考えたことがなかった自分自身の環境が、どれだけ恵まれているのかということにも気づいた。

また、各国のさらなる発展に対して尽力している日本人に出会い、同じ日本人として刺激をもらった反面、自国よりも他国で企業をしたり貢献を優先したりすることにはどんな意味があるのかを考えることが出来た。さらに国籍や異なるバックグラウンドをもった人々と仕事をする際、言語だけではなくお互いの文化を理解し合うことの大切さや難しさを学んだ。

帰国してから、自分自身が出来ることとして、目にした現状、出会った人々の話を周囲に積極的に発信していくことが大切であると考えた。まずは興味をもってもらい、これらの現状が身近に起こっていることをありのままに伝えることは、支援の輪を広げるにあたって有効な手段ではないかと思ったからだ。

そして、次世代を担う子供たちに質の良い教育を受けさせることは、その現状を変える一つの突破口になるのではないかと考える。日本式教育メソッドを取り入れた CIESF が建設した学校も増加しているとのことであったが、カンボジアの教育制度の基盤を整え、まずは教員の質と通学する子供たちの学ぶ意識を向上させるカリキュラム作り、都市部と地方部の教育の質を行き渡らせる工夫。全ての子供たちの教育を受けさせることが出来る持続可能な開発をすることが最優先であると考えた。教育が国の発展のために必要かどうかについては、今回の研修では十分な結論を下すに至らなかったが、学校で様々な人や発見、興味との出会いを通じ、将来の選択肢を広げ希望をもたせること意味を伝える一助にはなるのではないかと思った。

終わりに、今回初めて発展途上国と呼ばれる国々に滞在し、私は発展途上という言葉を使用することについても疑問を抱いた。一括りにすることで、その国に対する事実と異なる見方や偏見のようなものが生まれてしまうと思ったためである。それらに該当する国の人々が他国と比較して、経済面や貧困など負の課題を抱えていて、国力の面で今は未熟であっても、市場には熱気と活気が溢れ、町ゆく人々の心の温かさ、生に対する自立した価値観、物資面で満ち足りていなくとも、工夫した暮らしを送っていた点に関しては、むしろ彼らから学ばせてもらったことが多かった。また、ベトナムやカンボジアでは街中の至る所で日系企業の看板を目にしたり、JICA の持続可能な開発や PKO 活動などがもたらした支援だったり、日本が誇る高い技術力や製品が世界の広い範囲で人々の暮らしに貢献していることが分かり、大きな影響を与えていることが理解できた。この12日間で学んだ発見や視野の広がりや糧に、自分なりに将来、誰のために何を還元出来るか、どのように社会に貢献したいかを模索していきたい。

【日本とベトナムとカンボジア】

獨協大学 外国語学部 3年生

私は東南アジアにあるフィリピンで生まれ育って、14歳の時に日本に移住した。他の東南アジアの国の現状を直接見て知るために、ベトナム・カンボジアの二カ国インターンシップ型スタディツアーに参加した。子どもの頃から貧富の差を目の当たりにし、様々な社会問題に対して疑問を抱いていた。フィリピンでは私のように社会問題に関心を持つ若者は決して少なくはないが、日本に住むと社会問題どころか、社会・政治にすら興味を持っていない若者、大人までもが沢山いることに驚いた。ベトナムとカンボジアで12日間を過ごし、色々な所を訪れ、色々な人の話を聞き、考え方が成長した。抱えてきた社会に対する疑問と私が思う解決策も増えた。日本がベトナムとカンボジアから学べることも沢山あれば、その反対も言えるでしょう。

研修前に二カ国のどちらにも、自国の通貨を持ちながらもドルの方が使われることに驚いた。この小さな驚きは両国の歴史に繋がっているとツアーでの日々を過ごしながら感じた。ベトナムの戦争博物館では、私たち博物館に足を運ぶ人たちに戦争の残酷さを知らせるために、戦争の写真をそのまま展示している。クチトンネルでは、私たちをトンネルに入らせ、射撃の体験もした。これは日本ではしないだろうと思った。日本は第二次世界大戦の主要な国の一つなのに、戦争に対しての見せ方だったり、教え方はかなり弱い。日本国民に戦争をフィルターして柔らかく見せると意味がない。写真や資料をそのまま私たちに見せるべきだ。日本は戦争と原爆を経験した国として、国民への戦争の教え方をベトナムに見習う必要がある。

ベトナムとカンボジアの国境を通りカンボジアに入ると、風景がガラッと変わった。道路や街中を見てみるとインフラ整備がしっかりしておらず、カンボジアが抱えている問題を想像させた。今、カンボジアが抱えている問題の原因の多くはポルポト政権にあった。トゥールスレン収容所とキリングフィールドではポルポト政権が自国民にどのような残酷なことをしたかを詳しく学んだ。だが、妙に感じたのがカンボジア国民、特に若い世代の人たちはポルポト政権のことを知らない。アキ・ラ地雷博物館を訪れ、アキ・ラさんの話から、カンボジアの政治的現状を知った。ポルポト政権が終わり、国民が貧困で苦しみつつも、平和的には生きていると思いきや、言論の自由がまだまだ確立していない部分があり、完全なる自由と平和とはまだ言えない。政治的な面を除いてカンボジア人自身の人柄に憧れを感じた。言語能力、コミュニケーション力は日本人より優れているように感じた。そして、貧しい生活を送りながらも笑顔があふれていることは日本人が見習うべきだと強く感じた。

戦後の日本は今のカンボジアと似ているだろう。そこで血がにじむような努力をし、日本は今便利で裕福な国になった。しかし、我々日本人はいつしか大事な何かを失ってきている。それは人間的な温かさであり、それは今のカンボジアとベトナムの国民が持っている。



日本は失ったものを両国から学び、再確認することができる。反対に、カンボジアとベトナムが今経験しているゼロからの発展を、経験者である日本は、技術や発展、発展に伴う問題解決法を教える必要がある。SUI-JOH や KURATA ペッパーや JICA が行っている事が一番良い例だ。日本の水準で、カンボジアの知識と日本の知識の融合をし、お互いの発展を目指している。世界平和の実現をこの 12 日間で想像することができた。

【二か国研修ツアーを終えて】

茨城大学 人文社会科学部 2年生

私が今回のツアーに参加したきっかけは、大学の友人からの紹介である。以前から、発展途上国に興味があったためすぐに参加は決めたが、初めて海外であることと知り合いのいない中での参加ということで、当日まで不安でいっぱいだった。しかしそんな不安は一日目できれいに無くなった。引率の方の心強いサポートと、優しく面白いメンバーのおかげである。以前このツアーに参加した複数の友人から「絶対に行く価値がある」とは聞いていたが、予想以上に充実したスタディーツアーだった。今回のツアーで私が得たもの主に三つである。それは、ベトナム・カンボジア両国に関する様々な分野からの知識、両国が発展していく上で生じる諸問題の解決策を考える能力、そして、グループが団結することの素晴らしさである。

まずベトナム・カンボジアそれぞれの歴史と現状を、自分の目で実際に見ながら学べたことについてである。私はもともと戦争や内戦に関心があったため、戦争証跡博物館・クチトンネル・トゥールスレン収容所・キリングフィールドは特に興味深く、印象に残る研修先であった。枯葉剤の影響を受けて生まれてきた人々の写真とホルマリン漬けは言葉が出ないほど衝撃で、人間が作り出した武器の恐ろしさを身に染みて感じた。ブースの最後で、目がほとんど無い方が流暢にキーボードを弾いていた。しかし、その人物を見た時に思わず目を背けてしまった自分がいた。枯葉剤の影響は現在でも残っており、そのことを多くの人を知ることが絶対に必要だが、他人事だと思いながらただ同情するだけではだめだと思った。日本は義務教育で歴史を学ぶが、戦争について知った気にならずに「戦争の影響を受けた国へ我々ができる支援」や「戦争を起こさないための策」を考えていくべきだと思う。トゥールスレン収容所では、殺されてしまった人々の顔写真が並べられており、怒り・悲しみ・痛み・絶望が鮮明に映し出された彼らの表情は絶対に忘れられないものだった。人間が同じ国民をこうも残虐に拷問、殺害していたことは信じがたく、どうしてこんなことが起こったのだろうか疑問だった。しかし、その後にポルポト自身の生い立ちと思想の変化、そしてアキラさんのお話を伺い、ポルポトは悪であるという一言で片付けるのではなく、「ポルポト自身」「少年兵」「被害者」の三つの視点から考えることで分かってくることもあるのだと知った。生還者の一人である Chum Mey さんの本を読み、もう一度考えてみたい。そして、このツアーの良いところは、自分の専門外の分野の研修先にも行けることである。今まで医療や教育にはあまり興味がなかったが、特に Sunrise Japan Hospital と CIESF での話はとても興味深く、どちらの活動にも魅力を感じた。両者はポルポト時代によって激減した医者や教師の育成、医療と教育それぞれのレベルの底上げに力を入れており、カンボジアの発展に大きく貢献するものだった。特に CIESF でお話を伺った中山さんは、自分自身と歳が近いということもあり、カンボジアの教育に対する意識を変えたいというその強い意志と行動力



に感銘を受けた。大学生の頃にカンボジアでの学校建設に携わったことがきっかけとおっしゃっており、私も学生時代に経験を積み、自分が本気で向き合えることを見つけないと思っただ。

次に“両国が発展していく上で生じる諸問題の解決策を考える能力”が身に付いたことについてである。毎日のディスカッションでは、一人では思いつかないような考えが出てきたり、互いの意見を尊重しつつ反対意見を述べたりと、とても充実したものであった。特に印象に残っているディスカッションは「ゴミ山はなくすべきか」というものである。我々のグループの最終的な意見は「ゴミ山をなくすのは良いことであるが、今やるべきではない」というものである。ゴミ山にごみを投下することには限界があり、人体にも悪影響が出ているのは明らかである。また、今のスカベンジャーの仕事のように楽に稼げる状況が続くとも限らない。しかし、ゴミ山をいざ無くしたところで現在のスカベンジャーたちの生活は追いつかないだろう。スカベンジャーたちが都市に出て働くための生活費や焼却炉の建設など、ゴミ山を無くすためには膨大な費用が必要である。ごみを放置するので精一杯である政府にその資金を求めるのは非現実的であるし、スポンサーとなってくれる企業もない。そのため、まずは教育や医療に力を入れて国力を上げ、十分な資金が集まってから取り組むべきだと考えた。このように、一見ゴミ山はすぐに無くしたほうが良いと考えられがちだが、現地で実態を見てその日のうちに仲間と話し合うことで、今までとは違った見方をできるようになったと思う。特に引率の方のフォローは自分では思ってもみななかった方向からの意見が多々あり、自分の考え方に取り組んでいきたいものばかりだった。そして、今回のツアーで自分の中で目標にしていたことがある。それは研修先でできるだけ質問をすることだ。知識を深めるため、主体的に学ぶためなどの理由もあるが一番は自信をつけるためだった。普段の授業では手を挙げて質問することなどまず無く、学びに対して消極的である。そのことを変えたいという意思はあるものの、勇気が出ず何となく過ごす大学生活だった。そこで、誰も自分のことを知らない環境で、初めに“質問する人”という立ち位置を確立してしまえば質問せざるを得ないだろうと考えた。そもそもの知識がないと質問はできない。そのため、各研修先で集中して話を聞くことができたし、みんなの前で発表することで確実に今までもよりも成長することができたと思う。このことを踏まえて、自分の目標は達成したといえるだろう。

最後にグループが団結することの素晴らしさについてである。GL1は、最初から和やかな雰囲気ではあったものの、いくつかのグループに別れがちであった。しかし、ツアーも半ばの頃にバスの中でカラオケをした際、「みんなと盛り上がるのは苦手なのかなあ」と勝手に決めつけていた子たちも楽しんでいる様子が見受けられた。そこから、なるべくみんなに話しかけよう、みんなが居心地のいいグループにしようとする誰か一人か話し合いグループを作るほうに携わってきたつもりである。そのおかげで、一人一人の良さを知れたし、自分自身もより一層楽しみながら生活することができた。ツアー後半からは、沢山お世話になった引率のお二人に感謝を伝えるため、お別れ会の準備に取り組んだ。あのお別れ会はグループ全員

が一つとなり、協力し合ったからできたことである。全員が別れを惜しんで涙を流しており、それほど充実した12日間だったのだと改めて実感したし、日本各地からたまたま集まってできたグループが、自分にとってもみんなにとってもかけがえのない仲間へと変化したことがすごく嬉しかった。普段の自分の生活を見直すと、人の性格を見た目や第一印象で決めつけてしまい、交友関係が狭くなっているように感じる。これからは誰とでもたくさん話すことを心掛け、それぞれの良さを見つけて良い人間関係を築いていきたい。

以上のことが、私が今回のツアーで学べた主な三つである。学習面のみならず、人間的にも成長できた12日間であった。将来は、発展途上国の成長に関わりたいという大まかな目標がある。今回のツアーをただ「楽しかった」で終わらせてしまうのはもったいない。これを自分を変えるいい機会として、ボランティアやインターンシップなど、今までは一歩引いていたものへ積極的にチャレンジしていきたい。最後に、GL1の引率をしてくださった菜子さん・航さん、たくさんのサポートを本当にありがとうございました。

【ベトナム・カンボジア研修を終えて】

慶應義塾大学 経済学部 3年生

この度ベトナムとカンボジアの2か国スタディツアーに参加し、通常の旅行では訪問することのできない多くの場所や貴重な話を伺うことができ、想像以上のとても良い経験になった。発展途上地域の現状や未だ残る社会問題に収まらず、そこに至るまでの内戦などの歴史、その暗い側面の反対に若い国らしく活発でエネルギーに満ち溢れた人々の生活などにも直接触れることができ、単なる学問の領域を超えた気づきが随所に感じられた。

最初に訪れたベトナムのホーチミンでは主にベトナム戦争の惨状について学んだ。この戦争は隣接するカンボジアにも飛び火することとなり、一帯の発展の遅延の原因となった。また枯葉剤による現在にまで残る戦争の傷跡についても一層知ることになり、我々の世代の人間がこのような戦争を学ぶ意義について深く考えさせられた。

カンボジアでは今現在大きな問題となっている教育、医療、ゴミ処理などについて学習した。私は発展途上地域の教育問題に興味があり、今回沢山の教育現場の方々やNGOで活躍している方々の話を聴くことができとても有意義であった。CIESFという団体では教育の質を上げるためソフトウェアの部分の提供に力を入れていた。しかし人材育成の際、教育免許のような線引きはなく、その学校を一通り終えれば教職につけるという話であった。これは結局教育の質を上げるというCIESFの理念に反し、教育の質における地域格差を生むのではないかと考えた。また、カンボジアにおける教育問題の根底は児童の教育年数の短さであると考え。これは、金銭的な理由が大半であるが、親の教育の重要性に対する認知度の低さにも問題がある。このような根本的な理由が解決されない限り、教育現場での質を上げたとしても、そこに参画する母数自体が少ないままで、ますます地域的、金銭的な教育機会の格差が生じるのではないだろうか。1つのNGO団体にできることはもちろん限られているが、教育を受けた者を高みへ引き上げること以上に、平等に教育を受けさせることに関しての取り組みがないことに疑問が残った。教育年数の伸長は若者のリスク行動の減少について統計的に有意な説明変数であるから、カンボジア国内のモラルや治安の向上にもつながるものであると思うので、これからの政策など注視していくべきであると考え。

このような個人的見解はありつつも、教育や医療現場の復興は話に聞いていたよりもしっかり行われているということを知ることができたのはとてもいい経験になった。また、その多くに日本の援助があることを誇らしく感じたのと同時に、日本もかつて太平洋戦争の際に東南アジア一帯を戦場にしてしまったこと、このように日本が多くの資金援助をしているのは、東南アジアを近い将来の新しい市場として捉えた投資的なものである以前に、敗戦国としての戦後賠償の意味を含んでいることを再認識し、この地の発展の遅れに少なからず日本が関与していることは忘れてはならないことであると感じた。



今回の研修で経験した貴重な学びはこの研修のみで終わらせるべきではないと考える。この経験は明らかに将来に多くの選択肢を与えてくれたし、異なる文化、言語での交流は多角的な視野を広げるものであったと感じる。このスタディツアーは勉学での成長はもちろん、人間として成長できる機会になり、それが最もこのツアーに参加してよかったと思えるポイントであると感じた。

【自分の目でみたベトナムとカンボジア】

北九州市立大学 文学部 2 年生

私は今回ベトナム、カンボジアの 2 カ国研修に参加して印象に残ったことが 3 つある。

1 つ目は、都市部と地方における街の景観の差である。研修に行く前は、どちらの国も発展途上国であり、国全体を通してまだまだ道やライフラインが整備されておらず、建物もそんなに建っていないだろうと思っていた。しかし、実際に行ってみると、都市部に沢山の高層ビルが立ち並んでいる光景に圧倒された。また、道に関しても都市部の方はきちんと舗装されており移動も楽にできた。一方で、カンボジアの農村など地方に移動すると道も全く舗装されておらず、建物もそんなになく、訪れる前の私のイメージそのものとも言える光景がひろがっていた。

近年、東南アジアの国々が目まぐるしい発展を遂げているとよく耳にする。話を聞いていると、国全体が発展しているように聞こえる。しかし、2 つの対照的な景色を目の当たりにして、発展しているのは国内の一部にすぎず、国全体が発展しているとは限らないのだなと感じた。

2 つ目は、教育についてである。これは CIESF に行った際、教師の試験の合格ラインが設けられておらず、試験の点数に応じて、高得点であればあるほど都市部に勤務できるという話が印象的であった。教師そのもののクオリティの差は教育の差に直結すると考えられる。そのため CIESF の支援は素晴らしいと思ったが、支援体制には少し考えるべき点があるように感じた。またフリースクール、チャイルド・ドリームを訪れた際にも教育の差を感じた。フリースクールの子供達は流暢な英語を話していて、英語でコミュニケーションを取ることができた。一方でチャイルド・ドリームの学生たちは英語が話せる人もいればクメール語しかわからない学生もいた。そのため、英語もクメール語も話せる学生が通訳者として間に入ってコミュニケーションを円滑に取れるようにしてくれた。カンボジアには沢山の学校施設が増えてきており教育の場は以前よりは劇的に増えていると言えるが、そこで行われている教育内容にはまだまだ偏りが感じられた。

3 つ目は 2 カ国の平和に対する思いである。ベトナムでは戦争証跡博物館とクチトンネル、カンボジアではトゥールスレン収容所、キリングフィールド、アキラー地雷博物館を訪れた。どちらの国にも展示方法に関して日本と決定的に違う点が見られた。それはベトナムやカンボジアでは実際の写真をそのまま展示しているという点である。日本ではあまりに負傷している姿や痛々しい拷問の様子などはモザイクがかけられていたり写真ではなくイラストで表現されたりしている。さらに戦争関連の博物館で展示されていた人形が怖い、恐ろしいという理由で撤去されたという話も聞いたことがある。一方、ベトナムやカンボジアでは写真を加工することなくありのままの状態をそのまま展示していた。そのため見ていると思わず目を背けたくなったり胸が痛くなったりする場面が多々あったが、そのまま展

示しているからこそ伝わる戦争の酷さ、惨さ、また後世に伝えていこうという思い、同じ悲劇を繰り返さないようにしようという意思を強く感じた。今までは、日本が戦争で大きな被害を被った国という感覚が強かったが、今回様々な戦争関連施設を訪れて、日本だけではなく世界各国で戦争が勃発しており、その代償は戦争が終わった後も簡単には消えないということを再確認できた。

ベトナムとカンボジアで過ごした10日間は普通の旅行では体験することのできないとても濃い日々であった。旅行では楽しかった、綺麗だったという表面的な感想で終わってしまいがちだが、このツアーに参加したことで、2カ国の表面ではなく、一步踏み込んだ内面に迫る事ができたように感じている。身の回りに物が溢れるほど存在しており、何不自由なく暮らすことのできる日本に在るだけでは気づくことのできない文化や生活習慣の違い、課題点などを自分の肌で感じられた事は非常に良い経験になった。この経験をただの自己満足の思い出として風化させず、今回の経験から学んだことをこれからの生活をもっと充実させるものとして活用していきたい。

【生きる力】

北九州市立大学 外国語学部 3年生

このツアーに参加する前、私はカンボジアのような発展途上国は、支援がないと生活出来ない「貧しい国」であると思っていた。しかしツアーに参加して、私の考えは「カンボジアは決して貧しい国ではない」と一変した。そう考えた理由は、現地に住む人々の生きる力を感じたからである。

一番それを大きく感じたのは、農村に訪れた時だ。都市部から遠く離れた農村の人々は、高床式住宅に住み、生まれてからずっと農作業を営み、街へ出る機会はない。生活用水は井戸水を使っている。しかし、彼らは家の周りで育てている果物や家畜を食べて、自給自足の生活を行っている。近代的な物が無くても困ることなく、力強く生きている。農村の学校に通う子どもたちも、眩しい笑顔で溢れていた。実際に訪れるまで、農村の暮らしは物資や資金を与えて豊かな暮らしに変えていくべきだと考えていたが、農村の暮らしはただの「貧しい生活」ではなく、その土地の人々自身の「豊かな生活」があった。それまでの考えは、日本という先進国に生まれ育った自分の偏った考えであったと思った。また、TAYAMA 日本語学校の学生達からも生きる力を感じた。教室に入った時から彼らは私達を大きな歓迎の拍手で出迎えてくれた。彼らは挨拶と礼儀を何よりも大事にし、プレゼンテーションや交流のときは前のめりになって、私達の一つ一つの発言に大きな反応を見せ、学びたい、知りたいという気持ちがすごく伝わってきた。日本の学生が学ぶべき姿だった。日本で働きたい。日本語ガイドになりたい。将来の夢を叶えるため、学ぼうとする姿勢に生きる力が現れていた。

都市部で暮らす人々も例外ではない。訪問先で出会う人、ホテルやレストランで働く人、道ですれ違う人、誰もが暖かい笑顔で接してくれた。カンボジアに住む人々は都市部農村部関係なく誰もが心が豊かであり、1日1日を懸命に生きている。彼らは彼ら自身が満足していく人生を謳歌し、それは彼らの笑顔に現れていると思う。人それぞれ幸せや豊かさの定義は個人で違い、他人が押し測れるものではないと思った。

もちろん、カンボジアは教育、経済格差、医療など様々な分野において改善が求められる側面がある。国が発展していくためには人材育成に加え、インフラ整備などの支援も必要である。そのためには先進国が率先して手を差し伸べる必要があるだろう。本当にこの国の為になる支援が何なのか答えを出すことは未だ難しいが、私はこのツアーを通して物資や資金を送るような短期的な支援だけが本当の支援ではないと感じた。いずれはその国の人々が自らの力で国を発展させることができるような長期的な支援・協力体制が必要だと思う。そのためには私達のような若い世代こそがその国の歴史、文化、人を知って伝えていくことが最も重要だと考える。

このツアーを通して、私はカンボジアで出会った人々から生きる力を感じるとともに、私自身も生きる力を得ることができたと思う。また、一緒にツアーに参加した仲間達との毎晩



のディスカッションを通して、物事を多角的に捉えることの重要性を学ぶと同時に、自分の知識・考えの浅はかさを実感した。教科書やテレビで見る情報だけでは分からない、実際に訪れて自分の目で見た事実、そこで感じた自分の感情を忘れず今後の人生を送っていききたい。



【それぞれの幸福】

北九州市立大学 文学部 2年生

私はこのスタディーツアーに参加したことで、私たち日本人と現地に住む方々との幸福に対するベクトルが違っていると痛感した。その一つに、ベトナムで訪問した高齢者介護施設を挙げる。まず私は国営の介護施設があることに非常に驚いた。さらに無料だということで二倍驚きである。こちらの無料施設は、身内がないこと、自身での金面支援ができないことなどの項目に当てはまれば利用することができる。なお有料施設もあり、そちらはさらに上のサービスを受けられる。ここで最も衝撃だったのが、日本ではたびたび起こる入居者からの職員に対する暴力が、ベトナムの施設では一切ないということだ。あまりにも衝撃だったため、ならば職員の給金が高く暴力も苦ではないということかと思っただけで、職員のお給料はほぼ最低賃金でとても高いとは思えなかった。私はこれを非常に幸せなことではないかと考えた。利用者は高齢になってなお他人に暴力を振るうことなく和気あいあいと過ごし、職員は利用者とうんざりすることなくまるで家族のような関係を築きつつ対応できる。日本の今の介護体制ではではきつとこうはいかないであろう。日本では得られない幸福を感じた瞬間だった。

二つ目に、カンボジアのゴミ山を挙げる。これもまた大変な衝撃であった。左右前後どこを見渡してもゴミに埋め尽くされ、禍々しい悪臭をはなっているにも関わらずそこにいた人々はみな楽しそうに話したり笑ったりしていた。ゴミ山にいる人がなぜその生活から抜け出さないのか。それは普通に働くよりもただゴミを集めるだけで稼げる、交通費、生活費がより少なく済むという理由があるそうだ。カンボジアの学校は二部制であるため、学校に行った後ゴミ山に行くことができる。すると一日の生活がそこで完結してしまい、そのほかの生活に目を向けられないという負の循環が出来上がってしまう。私たち日本人は、ゴミ山で暮らすということに対しひどく不幸的な感情を抱いてしまいがちだ。しかし先述したように、現地で暮らす人々はとても充実しているように思えた。日本の今の若者のように、ブラック企業で働き家に帰り疲れ果てて寝る、といった生活と比べてどうであろうか。清潔さで考えれば日本のほうが私としてはましに思えるが、ゴミ山の人々は仕事や、上司や同僚との人付き合いに疲れ果てて心身ともに病むことは少ないのではないだろうか。

上記のことをふまえて考えれば何が幸せかは一概に言えないと思う。私が訪問した二国、とくにカンボジアは今経済発展が著しく、発展国に近づいているという。私はなんとなく、例えば日本のように発展したとしてもカンボジアは幸せに離れないのではないかと思う。日本人の感じる幸せとカンボジア人の感じる幸せは違っていると私はこのツアーを通して感じた。それはきつとどの国に関しても言えることだと思う。今後、ベトナムもカンボジアも、自国の発展に際し各々の感じる幸福をしっかり守りつつ成長していったらいいと強く感じた。

【教育の大切さ】

山口県立大学 国際文化学部 2年生

私はカンボジアに対する勘違いをしていた。発展途上国であるカンボジアはお金がなく、とにかく募金などをしてお金を寄付することが一番だと考えていた。しかしお金だけでは解決しないことがあると今回のベトナムとカンボジアの研修に参加して感じるようになった。たしかに、お金を稼ぐために働き、お金のために仕事を選んでいた人も今回の研修先にもいた。しかしそれ以上に、お金があっても教育を十分に受ける環境にないことがあげられる。その理由は二つある。

一つ目はポルポト政権で教育がなくなったことだ。ポルポト政権で全てを失い、教育もなくなった。教育もなくなったことから、それまでの知恵などもなくなり最初から始めることになった。それによって、教育水準が低くなってしまった。今回の研修で、教育について考える機会が多くあった。研修先であった、CIESEF で学んだことがたくさんある。教育の水準が日本より低いことから、もし学校に通っていても十分な教育を受けることができない。そこで、CIESEF は生徒に教育するのではなく教育をする先生を育てることに視点を移した。また、インターナショナルスクールもあり、日本の文化も取り入れられていた。日本の礼儀正しさも取り入れていて良い教育方法だと感じた。教育水準を上げる方法は様々あり、多方面から見ることでカンボジアの教育はよりよくなっていくと知った。

もう一つカンボジアに教育が足りないと考えたきっかけは、物乞いをする子供たちを見たことだ。私は、あの物乞いをする子供を忘れることができない。最初は、かわいそう、何か買おうかなと思った。しかし、物乞いする子供はかわいそうだけではなく、簡単にお金を稼いで簡単に生きていこうとする子供が多いということを知った。その子供たちは、学校に行くこともない。教育を受けることがない。そうするとカンボジアは今と変わらない。勉強することで国を知り、世界を知ることができる。そうしないとカンボジアはよりよくなることが難しい。そうならないために、ゴミ山にいる子供、観光地で物乞いをする子供たちには学校に行ってほしい。教育を受けること、勉強すること、マナーを守ることの楽しさを知ってほしい。

最後に、私はベトナムとカンボジアの研修に参加して本当に良かった。深く考えることや人と意見を交換し、より深めることができ有意義な時間を過ごすことができた。知識を増やすだけではなく、最高の仲間を作ることができた。ここまで最高の仲間を作れるとは思っていなかった。毎日真剣に意見を出し合い、時には自分と反対の意見で相手を理解することができるようになった。仲良くするだけではなく、共に学ぶことこそ本当の仲間になれるということを知ることができた。最高の時間を作ることができ、参加したことを幸せに思う。

【本当の支援とは】

大分大学 経済学部 2年生

私は将来、ソーシャルビジネスという形で発展途上国に関わりたいと考えていたことから、現地の人が望んでいることは何なのかを知り、将来に少しでも活かしたいと思い、この研修に参加した。私は今まで、ソーシャルビジネスは画期的な事業形態で、世界の諸問題解決のためにこれ以上の方法はないと思っていた。しかし、今回の研修を通して、自分は今まで一方的な狭い視野でしか物事をとらえていなかったことに気づくことができた。

その大きなきっかけとなったのが、ゴミ山の訪問である。ゴミ山で生活をするスカベンジャーと呼ばれる人たちは、他の仕事が選択肢として与えられているにも関わらず、自らそこでの生活を選んでいて、彼らは自分たちの好きな時間に働き、好きな時間に休みを取り、誰からも縛られない生活に満足しているようであったし、彼らの顔には時折笑顔が見えた。我々に対し、どうしてゴミ山を訪問するのが不思議でたまらないとでもいうような顔をしていたのが私の中で非常に印象的であった。ゴミ山訪問を通して思ったこと、それは、先進国の支援が、必ずしも発展途上国の望んでいるものではないということである。良かれと思ってしたことが、一方的な押し付けでしかないケースが多い現状を知った。彼らの将来を見据えて支援したとしても、彼らは毎日の生活を自由に生きることを選ぶ。ゴミ山訪問の後、私は支援とは何なのかわからなくなっていた。

そもそも支援といっている時点で自分たちの立場を上に見ており、助けてあげなくてはといった感情が根底にあると思うと、支援という考え自体間違いなのかもしれない、先進国の生活は裕福で、発展途上国の生活は貧しいといった考えも、自分たちの勝手な妄想に過ぎないのかもしれないと思った。日本のように比較対象が数多く存在する環境で育った私たちは、どうしても他人と比べ、より上の生活を望もうとしてしまう。逆にそういった環境下で、自分の生活に満足することを知らない我々日本人のほうがよほど不幸なのかもしれないと思った。孤児院や農村を訪れても、そこに住んでいる子供たちはキラキラした目で、明るく私たちを出迎えてくれた。何かしてあげようという思いで行ったにも関わらず、彼らからたくさんの元気とエネルギーをもらった。お金でははかれない幸せが確かにそこにあるのを、私は初めて肌で感じた。

今回の研修では、周りから学ぶことが本当に多くあった。全国の大学生と毎日ディスカッションする中で、自分の考えを上手く言葉にできる同年代の子たちに嫉妬をしたり、周りに遠慮してしまう自分を悔しく思ったり、普段の生活では味わえない感情を経験することができた。答えのない問題をみんなで話し合い、自分たちなりの答えが形作られていくことに感動を感じる毎日であった。研修を通し、改めて人との出会い、つながりを大切にしようと思った。そう思ったのも、みんなと出会い、互いに高めあえる関係性は素敵だなと、これからもつながってほしいなど、感じたからである。次みんな会った時に、成長し



た姿を見せられるように、これから自分をしっかり磨いていこうと思う。

【支援のかたち】

北九州市立大学 外国語学部 2年生

私は二ヶ国研修に参加した。バスでベトナムからカンボジアへと国境を越えた時、その景色に衝撃を受けた。道はガタガタで、小さな商店とぼろぼろの家が点々と続く道だった。カンボジアの発展途上具合や支援の足りなさを感じていた。

実際に研修先では日本の企業や支援機関を訪れ、カンボジアのために取り組んでおられることを学んだ。カンボジアのために何かしたいという日本人の思いは少しずつ問題を解決していた。都市部でバスの中から、日本の JICA が支援しているインフラ事業を何度も見かけた。JETRO で伺った話によると、日本はインフラというハード面での支援だけではなく、ソフト面での支援、つまりカンボジア人の雇用も生み出すと同時に彼らの教育機会を兼ねた人材育成を行う。何かを作ってあげることよりも、カンボジア人が仕事を続けていけるような、持続可能な社会を生み出すべきだと分かった。上から与える支援ではなく、続けていく支援が大切だと感じた。

また、トゥールスレン収容所やアキラ地雷博物館などの研修先では、カンボジアでの内戦の悲惨さを痛いほどに感じた。ポルポト政権による独裁は、人々の暮らしに今も爪痕を残している。特に教育制度の未発展さにつながっていると思う。知識人の虐殺により教育機会が奪われたことが、医療や法制度、生活水準などのあらゆる分野の発展が遅れている一番の原因ではないだろうか。では先進国が学校を作ればいいのかというと、それだけの支援では現状は変わらない。学校建設後の運営費が足りないところもある。教える教師の人数や知識は十分ではない。また、農村部では教育の意味を分かってもらえない。そのほか、経済や文化などいろいろな問題が複雑に絡んでいる現状に驚いた。

10日目に訪れた農村では、水や家が整備されていない状況を見た。しかし、そこに暮らす人々には良い土地であり、食べ物も手に入る十分な暮らしだという。もしかすると、貧しいから支援すべきだというのは、先進国で教育を受けてきた私たちの勝手な考えなのかもしれない、とも思った。他の多くの農村でも、教育を受けていない貧しい人達はたくさんいる。それでも豊かに不自由なく暮らしている彼らにとって、支援という名で教育や技術をいきなり押し付けられることは、なかなか納得いかないだろうと初めて気づいた。

学習機会について、医療の発展について、そしてカンボジアへの貢献の仕方について…など多くの問題に直面した。学校や病院を作ることは、いいことだと思っていた。しかし本当に大切なのは、その施設や制度が続くための支援だと感じた。参加したみんなと何度もディスカッションをする中で、自分の視点とは異なる考えや具体的な考えとも出会えた。その土地で本当に必要なものは何だろうと、いろいろな視点から考えて、少しでも良いと思われるような支援を探していきたい。



【カンボジアの豊かさ】

福岡女子大学 国際文理学部 3年生

私はこのスタディーツアーへの参加をきっかけに、本当の豊かさとは何かについて考えるようになった。豊かさとは何を基準に決められるのだろうか。私はこの研修に参加する前まで、お金があること、モノがたくさんあることなどが豊かであるという風に捉えていた。しかし、ベトナムとカンボジアを訪れ、様々な研修先を訪問するうちに、私の中の「豊かさ」の定義が崩れていった。

一番心に残ったのが、プノンペンのクロサトメイ孤児院で出会った子ども達だ。孤児院を訪問するまでの私は、「孤児院の子ども＝決して豊かとは言えない貧しい子ども達」という先入観を抱いていた。しかし、子ども達と交流するうちにその印象は180度変わった。確かに身につけている服や靴は年期が入っていたり、破れていたりとおり、金銭的に余裕のある状況ではないと感じた。実際に孤児院で働いておられる方のお話を聞いても、資金は十分ではないとのことであった。しかし、当の子ども達はみな元気で好奇心旺盛であり、私たち訪問者がパワーをもらうほど笑顔いっぱいであった。私はそこに、お金とは違う豊かさを感じた。そして豊かさとは数字では表すことのできない心の幸せの度合いを指すのではと感じた。

また、TAYAMA日本語学校の学生達の学習意欲の高さには非常に驚いた。整った制度の下、受け身姿勢で授業を受けている日本の学生とは違い、TAYAMAの学生は一言一句聞き逃さないといった姿勢で積極的に授業を受けていた。その意識の高さに刺激を受けると共に、自分の学びの姿勢を反省せずにはいられなかった。エネルギー溢れる若者と触れ合い、私はカンボジアに、発展途上国ならではの力強い成長力を感じた。

一方、研修を受ける中で日本の方が恵まれている、豊かであると感じる場面もあった。私の中で最も印象的なのはトイレである。長距離移動の際トイレ休憩に立ち寄った場所や、農村の中学校のトイレは、衛生的とはかけ離れた環境であった。私は、国が発展していくために教育や経済の面での発展はもちろんのこと、衛生面の水準の向上も必要不可欠であると感じた。また、観光地などで物乞いをする子どもの姿も非常に印象に残っている。日本では見られない異様な光景であった。貧しくて働かなければならない、そういった子ども達に教育の機会を与え、カンボジア人自らの手で自国を発展させていける力が重要だと思った。我々先進国は一時的な物資や資金の援助だけでなく、そういった成長のサポートをしていくことが求められているのではないかと思う。

今回の研修で、カンボジアのリアルな現状を見ることができた。カンボジアは伸びしろの多い国であり、その成長に国際社会が注目している。我々先進国には、先進国色にカンボジアを染めるのではなく、カンボジアが自国の「豊かさ」を活かし、それを強みに成長していけるための支援を行うことが求められているのではないだろうか。



【途上国への今の支援、これからの支援】

長崎国際大学 人間社会学部 3年生

私は、今回このツアーに参加して、研修やディスカッションを通して今まで自分が思ってきた“カンボジア”という一つの国の見方が大きく変わった。まず、わたしがこのツアーに参加した目的は、小学生のころ、“カンボジアに学校を建てよう”というテレビ番組を見て、幼いながらも衝撃を受けた。そのテレビ番組を見た時から、“大学生になったら自分の目で生のカンボジアを見る”と考えていて、何かカンボジアを見ることができない機会がないかと探していて、目に留まったのがこのツアーだったため、応募した。

私が思っていた、カンボジア、それは“住んでいる人全員が貧しくて、食べ物もない、ほかの国のサポートなしでは成立できない国”だと捉えていた。その真逆だった、とは言わないが、カンボジアは、昔の日本の高度成長期を迎える前の状態に似ていてこれから発展すると期待されている国だった。しかし、やはり都会に住んでいる住民と田舎、農村に住んでいる住民とでは貧富の差が目に見えて感じられた。正直、今回うかがうことができた、Sunrise Japan Hospital さん、CIESEF さんのお話はより都会の住民のための話としか受け取れなかった。どちらも、日本人が活動されている団体ではあったが、“もっと別の支援はないのだろうか”と考えてしまった。例えば、CIESEF さんのお話では、目に見えない町規定な応援、ハードウェアを行っていると同ったが、“まだ、日本語を勉強できるという域に達してはいないのではないか。日本に優秀な人材が欲しいのはわかるが、学校も十分でないうえに、子供の将来は親に決められて、この教育は本当にカンボジアの子供たちにとっていいものだろうか。”と考えた。また、孤児院でも、たくさんの疑問点が浮かんだ。私が行った孤児院は、3～6か月過ぎたら、ほかの施設に移らなければならないという仕組みの孤児院だった。教育を受けられない子供たちに、短期間の間だけでも更生期間を設けるにしても、その更生させる期間は短すぎるのではないかと感じた。CIESEF さんのような団体がもっと孤児院に手を貸すことはできないのだろうかと感じた。

また、観光省では、“カンボジアでは観光業に一番重点を当てていると聞いた。その時、孤児院や、ゴミ山もその観光場所の一つになり、これからのカンボジアに悪影響を及ぼしてしまうのではないだろうかと感じた。すでに、観光場所になっているかもしれないが、ゴミ山や孤児院が観光場所になるとカンボジアの政府は観光業に力を入れているから、経済発展しても、このゴミ山や孤児院を変えようとしはないのではないだろうか、感じた。カンボジアの交通面や治安の悪さに関しても、やはり政府が法律を改善、見直す必要がある。ゴミ山があることで、ゴミ山での暮らしに満足して、楽しく生きよう、子供には教育など受けさせなくていい。というカンボジア人が増えてしまうのではないかという恐怖も感じた。

今のカンボジアは、経済発展の途中で期待できる国。しかし、一歩間違えたら、同じカンボジア人であるにもかかわらず、貧富の差が激しく、価値観、捉え方、生き方が全く違って

しまうようになるのでないだろうか、また、私が望む将来こうあってほしいカンボジアを今回このツアーに参観して考えることができた。このように考えることができるのは日本が発展している国だから考えれることかもしれない。しかし、日本にも先ほど述べたように、高度成長期前のカンボジアと似たような時期があった。同じようなことを経験したことがある日本だからこそ、もっと支援の在り方を工夫できるのではないかと今の支援に欺瞞を感じた。そして、わたしも、これからの世界を担う一員としてソフトウェアの部分だけではなく、何が本当に必要な支援なのかを考える必要があると感じた。

今回このツアーに参加してディスカッション、研修など様々な目線からカンボジア、ベトナムを見ることができた。とてもとても濃い12日間を過ごせて、自分の将来と向き合えてよかったと思った。

【これからのカンボジアとの関わり方】

福岡女子大学 国際文理学部 3年生

このツアーで学び取った多くの事から、これから私たちがどのようにカンボジアと関わっていけば良いかについて改めて考えてみる。

私がまず一番に考えたいことはカンボジアの教育についてである。ポルポト政権、クメールルージュによってカンボジアの知識人が多く虐殺されたことからカンボジアは教育の面がまだ発展していない。さらに、学びたくても学べないという状況があり、それを改善していくことが求められている。私たちが教育面においてできることとしては、教育の質の向上と、教育の機会を皆に与えるということだと考える。カンボジアの知識人を育成することで、支援なしでもなり立っていく国づくりができるし、誰でも自由に学ぶことのできる場があると、自分に合わせて勉強することができる。実際に訪れた TAYAMA 日本語学校や、高校の生徒はキラキラしていて学ぶ意欲が強く、そういった人がまだたくさんいるにもかかわらず、国内の学習環境がすべて整っているわけではないというのが事実である。

次にインフラの整備である。カンボジアには、道路、水道関係、ゴミ処理など、改善していかないと大きな被害をもたらすとも言える問題がある。これらは、簡単に解決できる事でもなく、ゴミ山については今までの生活ができなくなる人が出てくるという事にも繋がるが、衛生面や安全面がきちんとされていなければ、医療や観光業など他の事に目を向けることができず、よりよい国づくりができないと思う。

最後にカンボジアが独自に行っていく産業の確立である。胡椒やクロマーなどカンボジア独自の産業をもっとアピールしていくことで、他国に頼ったり、他国と同じような産業になったりすることなく成長していくことができる。単に外国企業が入ってくるよりもクラタペッパーや SuiJoh のようなカンボジアならではの産業を確立し、カンボジア国民の雇用機会も与えるというやり方はとてもいいなと思った。

このように、今回のツアーで現在のカンボジアに必要なことをたくさん学び、考えたが、何をするにおいても最も重要なことは、カンボジアを日本のような国に発展させるという支援をするのではなく、これからの未来を一緒に作っていくためお互いに助け合うという気持ちをもって行動していくことではないかと思う。自分たちがしたいことを行っていくのではなく、相手がしてほしいことをする、これこそが私たちが他国とよりよい関係をつくり、お互いに成長できる方法であると思う。私にできることは良い多くの人に現状を知ってもらって、そういった世界中の人々と協力して生きていこうという気持ちを持つ人を増やし、自分自身も何らかの形でカンボジアの方々と関わっていくことである。小さな事でも、考えて実行していこうと思った。

【豊かさとは】

福井大学 工学部 3年生

私は今回のツアーに参加して、日本からカンボジアの距離約 4300 kmの間に大きな違いが存在することが発見できた。その違いは単に経済的に日本が発展していて、カンボジアが遅れているという言葉で片付けられないものであった。歴史を軸とし平和、医療、教育、産業、文化、社会の6分野をフォローして学んだが、最終的にすべての分野を通じて「豊かさ」について考えさせられた。

そもそもこのツアーに参加したきっかけは、大学の掲示板に掲載されていたJAPFのポスターの「さあ、はじめよう、アジアの笑顔のために」という言葉に惹かれたからである。ツアーが始まる前は生意気にも笑顔を与えるため、笑顔にさせるといった態度でいた。それは先進国である私は発展途上国であるカンボジアの人に対して、giveが当たり前といった精神がいかにも上から目線であったかに気が付かしてもらった。それはカンボジアの子供たちの表情を見た時だった。

今回のツアーでは、TAYAMA日本語学校、クロサトメイ孤児院を訪問し多くの子供と触れ合った。カンボジアの子供のイメージといえば、貧しさがゆえにどこか暗い部分を持っていると思っていた。しかし私が目にした光景はイメージとは逆で100点満点の笑顔をしていて、みないまを生きているのがすごく楽しそうであった。私はただただ不思議に思い子供に「どうしてそんなにも素敵な笑顔ができるの？」と聞いたところ、「私たちはBig familyに囲まれているから」と答えた。ここでのfamilyとは本当に血がつながった家族を指すのではなく、日本語学校や孤児院などの共同体の中の仲間である友達や先生を指していた。この答えから「豊かさ」の正体のワンピースを教えてもらった。

また彼らから勉強に対しての高い意欲と知的好奇心が感じられた。子供は勉強している時が一番楽しいと私に話してくれて、これも日本ではあまり感じられない感覚を味わった。カンボジアでは子供が教育を受ける環境が整っていないからこそ、彼らは勉強することのありがたみを感じて、多くの子供が将来になりたい職業があり、そのために勉強をすることが必要であることを自覚していた。このことが「豊か」であるということに気が付かせてもらった。

このツアーより得られた「豊かさ」の答えとしては、居場所があること、何事にも感謝すること、目標があることの3つである。学校やネット、職場などの居場所があることで、他者とつながり何かを分かち合うことができるのではないのか。何事にも感謝することでマイナスな面ではなくプラスな面を見つけることができ、ポジティブな精神になるのではないのか。目標があることでよりよい未来を想像し、今という時間に夢中になり、毎日が楽しくなるにではないのか。

私にとって、カンボジアで過ごした8日間は誕生日プレゼントのようであった。カンボ



ジアの人の優しさに感動をもらい、彼らの生き方に多くの学びをもらった。これからの人生この経験を活かし、自分も何か与えることができるそんな人間になりたい。

【カンボジア一カ国研修ツアー】

関西外国語大学 英語キャリア学部 2年生

今回の JAPF カンボジア一カ国研修ツアーを通じて、私は、日本の中では決して経験のすることができない、さまざまなことを経験することができた。それによって、私の考え方や物の見方が大きく変わった。そういった意味で、このツアーのさまざまな経験は私に大きな衝撃を与え、さまざまな発見があった。その中で特に私が印象に残った出来事を三点にわたって論述していこうと思う。

一つ目は、TAYAMA 日本語学校に行ったことである。私が特に衝撃を受けたのが、TAYAMA 日本語学校の学生の勉強に対する姿勢である。彼らは私たちのプレゼンに対してメモをとり分からないところがあれば、その都度質問をしてきてくれた。「将来は日本語を使ってガイドの仕事に就きたい」と学生の一人が言っていた。私はこれを聞いて自己反省をした、将来の目標が曖昧なまま大学の授業を受けていて彼らみたいに具体的な目標がないまま大学に通っているからだ。将来の目標が具体的にあるからこそ前述のとおり真剣に授業に向き合うことができると納得した。日本のことを教えに行つたつもりが、逆に私が授業態度や勉強に取り組む姿勢などを教えてもらった気がした。

二つ目は、トゥールスレン収容所に行ったことである。ここに行く前に引率からカンボジアのほとんどの国民はポルポト政権のことや原子共産主義について知らないと言っていた。その理由に関してはカンボジアの黒歴史ともいえる、あまりにも酷い出来事であり、今後同じ思想を持った者が現れなくするためである。私はトゥールスレン収容所に行く前は確かに伝えなくてもよいと思っていた。実際、トゥールスレン収容所は私が予想していたよりもよりリアルに生々しく当時の残酷な出来事を物語っていた。だが、逆に同じ出来事を繰り返さないためにも負の遺産として伝えていくべきだと思った。この問題は、今後のカンボジアの社会教育の大きな課題になるであろう。

三つ目は、ゴミ山を訪れた時の経験である。私は、ゴミ山を訪れる前は低い収入で子供たちが無理に働いていてそこで生活をしている無法地帯のような場所をイメージしていた。実際に行ってみると確かに収入は高くはなかったが、子供の働くのは制限があり子供が働くのは休みの間だけであり又、住宅もゴミ山から離れた場所にあるというのを聞いて少し安心した。カンボジアという国の歴史的背景から無法地帯というイメージがあったが実際に行って話を聞くこと新たな発見があるということが分かった。風評に流されない自身の考え方を持つことが大切である。

最後に、私のこれからの人生で様々なことで悩み苦労すると思う。その度に、この JAPF カンボジア一カ国研修ツアーで経験したことを糧にしたいと思う。そう思えるツアーであった。



【ツアーを通して感じたこと】

摂南大学 経営学部 3年生

私はこのツアーを通して発展途上国の抱える様々な問題について考えさせられた。今まで発展途上国と聞いてふんわりとしたイメージしか持っていなかった。この不透明なイメージを明確なイメージにするために、そして具体的に発展途上国や貧困が問題となっている国が現状どんな場所でどんな人々が住んでいてどんな問題を抱えているかを知るためにこのスタディーツアーに参加した。

私はこのスタディーツアーに参加する前までよく知らずにカンボジアにあまり良い印象が無く、道が整備されていなかったりちゃんとした建物が無かったり不衛生だったりという印象が強かった。実際のプノンペンの街並みを見ると道路があり、車もバイクも走っていて建物もきちんと並んで建てられていた。しかしその一方で、研修先として郊外を訪れるとツアー参加前に思い描いていた土の道や裸足で歩く人々、建物がほとんどない荒野がそこにあった。中心部と郊外での景色のギャップは日本にも存在しているが、カンボジアではより明確に表れていた。

私が事前学習で担当になった内容はポルポト時代だった。ポルポト時代とは、ポルポトを中心に原始共産主義を掲げそれに反対する者たちや知識層などの罪のない人々を大量虐殺し、1979年のポルポト政権の崩壊までに総人口の約3割が亡くなったとされる時代のことだ。この内容はトゥールスレン収容所、キリングフィールドなどの研修先と直接的に関わりがあり、ポルポト政権時代に使われていた建物や道具や収容されていた人々の写真を見たときにまだ数十年程しか経っていないという事実に本当に驚いた。それほどに重たい内容だった。ポルポトは大人ばかりを虐殺したため残された国民の85%の人が14歳以下だったという。街には確かにお年寄りの姿はほとんど無く若い人が多かった。研修先のみならずそこら辺の街ですらポルポト政権時の爪痕が深く残っていると感じた。

今回のツアーで様々な研修先に訪れたが、個人的に最も変えなければならないと思ったことは、医療について。Sunrise Japan Hospitalで聞いた話に、ポルポト政権時代に知識層として医師の多くが殺され20人程度しか残らなかったのもより早く多くの医師が必要であると考えられカンボジア国内での医学部の制度が変更され、日本の医学部は6年制であるのに対してカンボジアは1年制になったという内容があった。このことから国内の医療のクオリティが低下し、国民ですら医師を信用しないという現状があるという。その結果国内の富裕層は隣国のタイやベトナムにより高度な医療を求めて出て行ってしまふ。この問題は解決するには医学部の制度の見直しや国民の認知を変える必要があるため、すぐ時間がかかることであると思う。現在は若い人が多いこともあり医療の需要があまり高まっていないが、数年もしない内に高齢者層更に増え、それに伴い医療を求める人が今以上に増加すると予想される。早い対応が求められる。



最初に書いた通り、初めは発展途上国に不透明なイメージしか無かった。今回のツアーを通して街、人、文化、問題を自分の目で見る事ができて実りになったと思う。知らないことや偏見がまだまだ多い発展途上国を他人のフィルターを通さず見ることのできる良い機会だった。ツアー参加前の私と同じように発展途上国に不透明なイメージを持っている日本人は多くいると思う。そういう人に今回ツアーで感じたことを伝え、「自分の目で見てこい」と言いたいと思った。



【これから先私ができることとは】

梅花女子大学 文化表現学部 3年生

私は海外旅行が好きなので、長期休暇があると必ず海外へ行く。いつも行く場所は東南アジアの海が綺麗なリゾート地や観光地として有名な場所だ。今回研修で行ったカンボジアはアンコールワット遺跡がとて有名で、国自体が観光地だと思っていたが実際行ってみるとインフラ整備が整っておらず子供の物乞いがすごくて衝撃を受けた。今まで行っただの東南アジアの国よりもよりも貧しさを感じた。どうして同じ東南アジアでもこれほど貧富の差が激しいのか。どのようにしたら貧しい人々が救われるのか、そして自分は何ができるのかとても考えさせられた。

カンボジアに着いてまず目に留まったのはゴミが道端に散らばっていたことだ。日本ではゴミ箱が道端に設置されているのは当たり前で今まで行った東南アジアの国でもゴミ箱はあまり見かけないが道端にゴミが散乱している光景はあまり見ない。そもそもカンボジアではゴミを分別する習慣が無いと今回の研修で初めて聞いた。研修先のゴミ山ではスカベンジャーという再利用できるゴミを拾って生計を立てている方がいると聞いており実際ゴミ山を視察しにいった時に大量のゴミの中からペットボトルなどを回収していた。ゴミの分別がされていないのでスカベンジャーの方たちは大量のゴミを漁って再利用できるゴミを見つけないといけない。分別がきちんとされていると再利用できるゴミをわざわざ探す手間が省ける。そもそも日本では国でゴミを分別しないとイケないという決まりがあり、どのゴミを何曜日に出すのかも決められている。どうしてカンボジアではゴミの分別処理をしないのだろうか。そしてカンボジアにはゴミの焼却炉が無いと聞いて驚いたが、もっと驚いたのはその焼却炉を建設するのに大体500億円ほどかかるということだ。私はゴミが最終埋められていると聞き、焼却炉を建ててそこでスカベンジャーの方が働けるようにしたらどうかと思ったが、まず焼却炉1個作るのに莫大な費用がかかるので気が遠くなった。研修先の1つである観光省へお話を伺いにいった時にもっと観光客を呼び寄せたいとおっしゃっていたが、まずは町を綺麗にすることから考えるべきではないかと思った。ゴミの分別を義務付け、ゴミ箱を設置し道端にゴミを放置しないようにするべきだと思う。

私が今回の研修で思ったことは東南アジアでも貧富の差があり、そして同じカンボジアの中でも貧富の差があることを強く感じた。世界遺産があり、多くの観光客が訪れていたとしても一歩奥へ進めば貧困で苦しんでいる人や親がおらず働かなければならない子供がたくさんおり、まともに教育を受けられていないという事実を確認することができた。教育水準が上がれば国としても発展していくがその教育をする教師の数が少ないのも問題として挙げられる。そうなる自分は何ができるのか。1つは少しでも支援や寄付をして1人でも多くの子供に学ぶ大切さを知ってもらい、2つ目は今回の研修の内容を周りに伝え



てカンボジアの現状を知ってもらい、カンボジアにもっと日本から多くの支援をしてもらうことができるように働きかけるべきだと感じた。カンボジアで様々な場所に訪れて改めて自分はとても恵まれた環境で育ってきたのだと感ずることができた。これから、カンボジアのような国がもっと発展するために少しの力でしかないと思うが協力していきたいと強く感じた。



【カンボジアにみる教育】

同志社大学 文学部 2年生

実際にカンボジアに行って、いくつも日本との違いを発見し、実感することができたが、その中でも違いが最も顕著に感じられたのが教育に関してである。

特にTAYAMA日本語学校で教師体験をした時の光景は帰国した今も忘れられないほどの衝撃だった。教室に入るやいなや気持ちの良いまっすぐな挨拶を受けて正直圧倒された。だがこっちも本気になって教えてあげたいという気持ちが強くなった。なぜこれほどまでに学びに対する姿勢が高いのかについてはいくつかの理由が考えられた。

まずこの学校の生徒は勉強の目的が明確に見えているからということが考えられる。実際になぜ日本語を勉強しているのか尋ねてみても各々がはっきりとした未来への展望を持っていることが感じられた。次に生徒と先生の関係・距離感である。クロサトメイ孤児院でカンボジアの伝統芸能・演舞を子どもたちが披露してくれた際、先生方が本当にうれしそうに子どもたちを見守っていたまなざしを目にしても感じたことだが、今の日本でも教える側、教わる側において少なからず存在している目には見えない仕切りのようなものは感じられなかった。このようにお互いが心を許し合うことで教育面でも大きな相乗効果が見られるのではないかと思う。

しかし都市と農村の格差はカンボジアが抱える大きな問題の一つであり、農村の人々の収入は都市の人々の半分である。それに加え農村から学校は遠いために通学できない子どもが多いというのが実情である。ポルポト政権下の時代に父と兄弟を亡くしたチアさんは農村部にあるバイヨン中学校に従事しているが、彼は今カンボジアにとって重要なのは子どもへの教育であると考え。それは彼自身も経験したポルポト時代のような圧政を二度と繰り返させないためにも農村の人々も独裁者に対抗しうる知識を身につけるべきだと考えるためである。キリングフィールド内の施設における全ての仕事を請け負ったのも小さな子どもばかりだったということからも独裁者は知識を持たない層を自分たちの思うままに利用しようとする傾向が見て取れる。

だが近年の経済成長に伴い教育が重要になって来ると考え、子どもを塾に通わせる親も増加している。ゴミ山でゴミを拾ってそれを売り生計を立てるスカベンジャーの中には読み書きができないがためにゴミ山で働くしかない人もたくさんいるが、ゴミ山のオーナーは子どもたちには教育を受けさせるために厳しいゴミ拾いの仕事をさせない事にしていたり、教育の重要性は認められつつある。

しかし農村部の子どもは代々受け継がれてきた農村で生きる術を学んだり、孤児院の子どもはカンボジアの伝統芸能・演舞を学んだりと実用的な教育を受けている。学校で教育を受けなくても毎日を幸せに暮らしている人々はたくさんいるが、教育を受けていなければ人生の選択肢は少なくなり、なりたい自分が見つかったとしてもそこからの挑戦が困難なも



のになることもあるだろう。

今回のツアーで教育の重要性や可能性を再実感した。今後伝えていくべきことは伝えて、カンボジアで感じたことを忘れずに今後の活動に活かしていきたい。

【カンボジアの子供たちに豊かさを】

愛知大学 法学部 3年生

私は、日本と比べたら発展途上国であるカンボジアを訪問し、どのようにしたらカンボジアの人々に豊かさを提供することができるのかを考えるために、今回のカンボジアスタディーツアーに参加した。カンボジアを訪問する前は、日本は豊かな国で、カンボジアはそうではない国であるという認識があったが、スタディーツアーを通してその概念が変わった。

カンボジアでは、様々な境遇に置かれる子供たちに会った。日本語学校で日本語を学んでいる子、親も兄弟もいない、孤児院で暮らしている子、ゴミ山で家計を助けるために働いている子、教師不足、学校不足で満足に教育を受けることができない農村の子。彼らに会う前は、彼らのような境遇の人たちは豊かではないと考えていた。しかし彼らは、彼らなりに豊かさを感じて生きていた。孤児院で暮らすある子は、孤児院のみんなが家族のようだから毎日楽しく、幸せだと笑顔で言い、農村のある子は、お米を作ったり果物を採ったりしてする生活はとても充実していて楽しいと教えてくれた。私の価値観からしたら、彼らは豊かではないと考えていたが、彼らは彼らなりに豊かさを感じていたのである。

では、私たちは彼らに何もなくていいのかと聞かれたら、答えはNo.である。私の考える豊かさとは、家族がいて、家があって、勉強をする機会が与えられ、自らの将来を自ら決めることができることである。カンボジアで出会った子供たちは、私の価値観からしたら豊かであるとは言えない。しかし、私がこのように判断することができるのは、カンボジアの子供たちが言っていたような豊かさも知ることができているからである。私は豊かさの選択肢をたくさん持っているため、何が豊かで何が豊かでないか自ら判断することができる。

一方、私が出会った彼らは、どのような豊かさが世界にあるのかを十分に把握したうえで自分が豊かであると言っているとは思えない。つまり、知っている世界が狭められてしまっているのである。もし彼らが、日本人のように自由に教育を受けられるという豊かさを知ったら、彼らの豊かさの考え方も変わってくると思う。

豊かさとは何か。この問いに対する答えは人それぞれで、いろいろな考え方があっていいと思う。しかし、この問いに対する答えの選択肢は、皆が平等に与えられていなければならないと考える。それを叶えるためには、教育制度、社会保障制度、教師不足問題、学校不足問題など、考えなければならないことが山ほどあり、一人の力ではどうしてもできない部分もある。しかし私は、すべての子供たちに平等に豊かさの選択肢を与えられるように、自分には何ができるのかをはっきりさせ、同じような考えを持つ人を見つけ、行動に移していきたい。このスタディーツアーを通して、豊かさとは何かということを深く考えることができるようになった。価値観を広げることができた。この経験を無駄にせ



ず、カンボジアの子供たちが「与えられた豊かさ」ではなく「自ら見つけた豊かさ」を感じられるようにするために、私には何ができるのか考えていきたい。そして子供たちが、自らの豊かさを選択できるように手助けをしていきたい。

【今私たちができることとは】

立命館大学 スポーツ健康科学部 3年生

私は、異文化を理解し新しい学びを得ることによって、カンボジアについて深く知ることが目的としてツアーに参加した。様々な場所を訪れる中で、今まで知ることがなかった過酷な現状や国のあり方について触れることができ、私たちができることとは何か考えたいと思った。

まず私は、ポルポト時代の歴史がカンボジアの今に深く影響を及ぼしていると感じた。トゥールスレン収容所やキリングフィールドを訪れ、その時代に知識人や医療関係者をはじめ多くの犠牲者を出した現場へ行き、また生還者の方の生の体験話を直接聞くことができ、そう遠くない過去にこんなにも残酷な世界があったのかと息が詰まるほどにショックだった。また、医療や教育をはじめ国の発展を妨げた事実であると感じた。しかしもっとショックだったのは、今の子供達にこの暗い過去を伝えていない現状があることだ。しかし、全ての子供達が平等に教育を受けられない現状において、この事実だけを伝えるのは危険だと思った。暗い過去を知り、未来にどうつなげていくべきかを考えるために後世に伝えていく必要があるが、「考える力」を教育で養わなければただ衝撃と恐怖だけを与えてしまうのではないかと考えたからだ。また孤児院では「将来の夢はない」という子供達がいたことや、ゴミ山や観光地で物乞いをする子供達をみて本当に胸が痛み、全ての子供への教育の必要性を痛感した。しかし同時に、カンボジアの教育体制の改善に向け私たちができる支援は本当に少ないと感じた。しかし微力ながら、今は筆記用具を寄付したり、現地の子供たちに将来の夢や職業の話をしたりして、夢や目標をもってもらうような支援ができるのではないかと考えた。また、ポルポト時代の影響として地雷が今でも大きな問題であると感じた。丸い地雷をボールと間違えて遊ぶ子供たちがいることなど、今でも大量の地雷が人々の脅威であることを知り、現地でこの現状を周知するような支援も必要だと感じた。

また、ゴミ山や農村を訪れ、カンボジアの貧困問題や衛生面にも様々な問題があると感じた。ゴミ山で多くの人が履いていた長靴は NGO からの支援物資であることや、農村では電気が既に通っていることなど聞いて、少しずつ改善されていることがあるのだと感じた。しかし、靴を履いていない子供や服がボロボロの人たちを見ると、貧困ではないとは思えなかった。町を見るとゴミが散乱していたり、ゴミ山では大人も子供も躊躇なくゴミをあさっているところを見たりして、ゴミ山や人口の大多数が暮らす農村において不衛生な環境が広くある現状はやはり悲しく、無くなって欲しいと思う。ゴミ山で生計を立てる人がいる現状には抵抗があるし、その背景には雇用が少ないという背景があるのではないだろうか。この問題に対しても私たちができる現実的な支援は少ないが、日本でこのような現状があることを伝えることはできると思う。

ツアーを通して、本当に必要な支援とは何なのか明確にすることは難しかった。しかし、



常に改善策について考え、現地の人々の気持ちに寄り添うことは私たちにもできることだと思う。私たちは今の生活を豊かだと考えるのと同じように、カンボジアの人々も自国のことや暮らしを誇りに感じているかもしれない。日本人のやり方や考え方を押し付けることなく、私たちなりにできる支援を常に考えていきたいと思う。

【まずは自国から】

関西学院大学 国際学部 4年生

このツアーで 私は知識を得た上の行動の大切さを知りました。決して多数の場面である国の問題を知っておく大切さは否定しているわけではないが、一週間程度の短い期間で他の国の社会問題に対してどうすればいいかを口にする立場にはなっただけとはいえないと思いました。これに対して主に感じたことは「カンボジアに似た発展途上国の状況を変えるためにはどうしたらいいのか」と考えずに自国の状況を変えるためにどのような行動をできるかと言う考えを保つべきだと思いました。いくら先進国と言っても日本も私の出身国のアメリカはどちらかと言うとたくさん不備のある国であるため、発展途上国に対して我々の解決方を押し付けるのではなく見習って参考にするべきです。そう思わせた事例となるものは二つ挙げられる。

二日目のディスカッションテーマは日本の学生と TAYAMA 学校の学生を比較しました。複数のディスカッションの内この日のディスカッションがテーマとして一番いい方向性を持ってたと思いました。なぜかと言うと二つの国の教育面を比較しただけでなく、どうやったら日本の学生も教育に対して同じような態度を持てるようになるかを工夫したからです。TAYAMA 学校では学費がない分学内の規則は厳しいと聞いた上、どうやって先生が学生に厳しくしつつ学生の学ぶことに対してのモチベーションを上げているのだろうと疑問になりました。厳しい規則を実施するのは誰にでもできると気付きました。TAYAMA の教師は多分モチベーションを上げることができてない教師と比べて厳しさ以外の物足りない 何かを満たすことができているため、学生が元気よく学びに来ているという結論をつけました。TAYAMA 学校に通っていた学生は通うことによる目標がはっきり成り立っていました。ほとんどは得た知識で日本人観光に関連する職業で努めたいと言ってました。その一方に日本の学生は次の中学、高校、大学という学年にとにかく進学できるように熱心に勉強しているイメージが強いです。進学できたことが最終目的でなく、さらに自分が社会に出た時その学校がどう自分自身に役煮立ったか、どのようなスキルを身につくことできたのかを考えつつ受験しなければならないと感じました。

三日目のディスカッションも自国や内面的な問題に工夫するべきだと感じました。その日のテーマは後世にツールスレンやキイングフィールドの事を教育に含めて教えるべきかでした。結局私のグループはカンボジアの経済、教育、インフラなどが整理されて教える余裕を持てるようになってから後世に教えるべきという結論になりました。そうでないと



今教えても学校に通えない子がまだ多いためトゥールスレンとキリングフィールドについて知らない人が減らないままになってしまう理由でした。確かにこれはいい注目点だとは思いますが、かといって先進国で余裕のあるはずの日本やアメリカは各国の歴史について誠実に教育を行っているでしょうか。1日の研修だけで他の国の必須にするべき教育に対してディスカッションするのではなく他国の状況を参考にして自国の教育の物足りない課題、日本の慰安婦事件、アメリカ合衆国のハワイ帝国に対しての違法併合の歴史を教えるべきなのかを解析した方がいいと思いました。



【私たちにできること】

甲南女子大学 文学部 2年生

今回のカンボジアインターン研修を通してカンボジアの現状や歴史を学んだ。その中でも一番印象的だったのが子供たちだ。ゴミ山でゴミを拾う子ども、アンコールワットで写真を買ってくれとずっとついてくる子ども、農村の子どもをまじかに感じ日本では見たことのない光景に衝撃を受けた。世界には毎日在必死に生きている子供たちがいると知ったと同時に私たちに何ができるだろうと思った。

このインターンに参加する前は、寄付や募金をすることが私たちにできることでカンボジアのみんなのためになると思っていた。しかし実際カンボジアを訪れてみると寄付や募金はほんの一部だった。寄付や募金をしたという自己満足で何も変わらないことが分かった。そもそも私たちにできることはあるのだろうか。そのようなことを考えながらインターンを過ごした。しかし何も思いつかず自分の無力さや情けなさを感じた。

カンボジアの貧困の子供たちが最低限度の生活を送るにはまず貧困を抜け出さなくてはならないと思った。貧しい家庭に育つとまともな教育が受けられず就職するのも厳しい。もし結婚してもその家庭は貧しいと思う。このように貧困は連鎖する。貧困の連鎖を止めるのに必要なのは勉強だと思う。勉強をしていれば就職の可能性も広がる。また、TAYAMA 日本語学校で子供たちの勉強に対するやる気を感じた。子供たちは勉強したい、学びたいと思っている。では、私たちは勉強に関して何ができるだろう。しかし思いつくのはノートや鉛筆、文房具の寄付しか思いつかない。カンボジアの子供たちを貧困から救うには小規模ではなく大規模なことをしなければならない。結論、私たちにできる事は限られていることが分かった。結局私たちにできることはほんの一部に過ぎなかった。

今回のツアーを通して私たちに何ができるか明確なことは分からなかった。しかし、カンボジアを訪れたことによって私が思っていた支援は力不足で、ほんの一部に過ぎないことが分かった。また、こんなに深く支援について考えることもなかった。支援することの難しさ、支援とは現地の現状を知り今何を必要としているかを把握しなければならない。カンボジアの現状を知った今、何を最も必要としているのか少しだけだが分かった。教育という支援にピンポイントをあてもっと深く考える必要があると思う。

カンボジアで過ごした八日間。短い期間だったが内容が濃く、とても良い経験をした。このインターンに参加しなければカンボジアに行く機会はなかっただろうし、カンボジアの現状や歴史を肌で感じることもできなかったと思う。日本に帰ってきた今、改めて当たり前前に食事をし勉強を受け生活していることのありがたさを感じた。



【カンボジアにおける国際協力はどう促進していくべきか】

名古屋経営短期大学 健康福祉学科 1年生

私は今回このカンボジアスタディツアーに参加して、発展途上国及び貧困国に対して、自分にどのような支援ができるか、重要課題は何なのかを深く考えることができた。しかし、ツアーで色々な場所を視察するほど、自分がこれまで考えていた支援方法は小さなものであると感じた。毎日のように行われるディスカッションでは、自分が到底考えられないような内容もいくつか取り上げられていて、自分が貧困の人たちに出来ることよりも、出来ないことの方が多いいことを実感した。何を重視して支援していくべきかは、これからの課題である。

まず初めに、貧困とは何か。貧困とは、大きく分けると「絶対的貧困」と「相対的貧困」に分けられる。「絶対的貧困」は誰かの手でなくすことができるが、「相対的貧困」は自分が自分の価値観をもてるようにならないと、抜け出せない。このツアーでは、特に孤児院での子供たち、ストリートチルドレン、イオンモールなどに来ている子供たちの視察を個人的には重要視していた。理由は、全ての子供たちが教育を受けることができれば、少なくとも貧困問題が解決されるだろうと考えていたからだ。実際は、全ての子供たちではないが、靴も履かずに、着ている服もボロボロで、学校で教育も受けられない状態が見受けられた。

孤児院の子供たちは、必ずしも幸せな状況ではないにも関わらず、みんな笑顔で過ごしていた。視察したクロサトメイ孤児院では、将来自立できるように伝統ダンスを教えられているそうだが、それだけでは限界があると感じた。確かに素晴らしい伝統ダンスでお迎えしてくださったが、技術支援をより強化していかなければならないと思う。そのためには、実際にどのような仕事があるのかその人に会わせて、その人から話を聞く機会を得たり、専門的な職業であれば、実際に技術を教えてもらうといったことが必要になる。

ストリートチルドレンは、孤児院に比べると笑顔ではない。その理由は、住む場所や食事が適切に摂取できていない現状が考えられる。毎日が生きるか死ぬかの切羽詰まった状況であるから、目標も持てない状況だからだと考える。安心して毎日食事を摂ることができる環境を整えれば、心にも余裕が生まれ、笑顔になっていくことは確かである。また裕福な子供たちが集まっていた場所では、必ずしも笑顔=幸せではないということも実感した。それぞれの子供たちのバックグラウンドも考えながら支援しなければならない。

以上のことから、貧困問題を解決するには様々な課題が絡んでいて、どのような支援をすることが一番ベストなのかを考えることは難しい。これまでのカンボジアの歴史を踏まえ、現地の人とのインタビューを通して何を求めているのか考えることができた。これまで大まかに考えていたカンボジアへの支援だが、個々が自立して生活していくためには、相手が必要だと思うものを常に考え、支援していくことが重要であると学んだ。



【カンボジアから考える】

関西外国語大学 英語キャリア学部 2年生

今回の JAPF の 1 カ国ツアーを通して、私はいろいろ考えさせられた。発展途上国のいろいろな側面を見て、今の日本にはないものがいっぱいあった。また、日本にあってカンボジアにないものもたくさんあった。そこで今回気づいたことを通して、自分的に考えたことを2点に絞って論じていきたいと思う。

一点目は、今回のツアーでたくさん話を聞くこととなったポルポト政権についてである。私たちはポルポト政権に関してのたくさんの負の遺産を訪れた。まずは、トゥールスレン収容所とキリングフィールドについてである。私は訪れる前に少し調べてはいたのだが、被害が大きすぎてあまり想像ができなかった。実際訪れてみて感じたことは、恐ろしいの一言である。今まで私は原爆ドームなどに訪れたことはあったが、どこかこころで昔の話だしなーと他人事のように思っていたが、今回のポルポト政権の話はつい20年前の話とのことで他人事のように思えなかった。私はちょうど20歳なので自分が生まれたくらいの頃かと思うと、つい日本に生まれてよかったと思ってしまう。ポルポトは農村出身で上位身分を嫌っていた。平等にしたいという思いから原子共産主義を掲げ知識人を虐殺するという行為にいたったのであるが、これは勝手な行為である。自分の意見を押し付けるとだめになる典型的な例である。確かに平等目的で共産主義を掲げている国は中国然りあるのはあるが、ポルポトは貨幣・学校・宗教等を禁止にし、かしこい知識人は危ないと考え大量虐殺したことでカンボジアという国そのものの成長が止まった。止まったどころか衰退である。このポルポト政権後急激に成長してはいるが、やはりポルポトのダメージはぬぐえないものであるだろう。今回のポルポト政権を通して、私はポルポトのやってきた行為を断固否定する。理由はポルポトのせいで多くに人が死に、多くの人が悲しみ、教育という大きなものを奪ったポルポトは重悪人であるからである。

2点目は、貧困である。これはカンボジアを訪れるうえで大きなテーマであるし、大きな課題である。訪れる前に想像はしていたのだが、少しいメージとは違っていた。わたしが想像していたカンボジアの貧困とは、みんな貧しく食べていけないといったものであるしかし、実際にみとみると格差ということばが目立っていた。貧しくて教育もあまり受けられず日々生きるのに必死な人もいれば、親と手をつないで私たちと同じように暮らしている人もいる。日本ではありえないことであるが、これがカンボジアの現実だった。この格差を埋

めるためにはもっと経済力を上げることも大事であるが、やはりこどもの教育体制を改善することが格差をなくす第一歩であると考えている。教育を受けられないこどもは一生その生活から抜け出せず、ほかの生活を知らないまま死んでいく。それがそのひとなりの幸せであると思う人もいるだろうが、私はそうは思わない。やはり平等な教育あってこそその豊かさがあると思っている。チアさんもおんなじことを言っていた。ポルポト政権を経験した身として、無知である人々をなくすこと。これが学校を作る大きな目的であると。私自身この意見には大きく賛同である。イギリスにはベヴァリッジ報告書という5つの巨大悪について説明した報告がある。その5つは貧困、疾病、無知、不潔、怠惰である。そしてこの報告書の見解は無知であることによって職業に就けないだとか、作物を育てられないだとかなどの貧困がおき、貧困によって病気になりなどの連鎖が起きるのだが、すべての原因は無知であることから始まると考えられている。私もこの考え方なのでチアさんには大きく賛同した。

以上のことにより私はカンボジアを教育という観点で見たのだが、それによって考えることもたくさんあった。TAYAMA 日本語学校に訪れた時などは、日本にはなくなっている、学ぼうという意識の高い姿勢も見られた。このカンボジア研修を通して自分の教育観を高められたとともに、発展途上国の教育の課題、今の日本の教育の課題を考えることができた。その感じたことをこれからの教育人生に生かしていきたいと思う。



【カンボジア研修での学び】

流通科学大学 人間社会学部 2年生

今回私がカンボジア研修に参加した理由は、発展途上国であるカンボジアという国の現女王を自分の目で確かめ、カンボジアという国がどのような国なのかを知りたかったので参加した。ツアーでの内容は、毎日が濃い内容で考えることが難しいことなどたくさんあり、混乱してしまうことがたくさんあった。このたくさんある中でも、3つ印象に残っていることがある。

1つ目はTAYAMA日本語学校の学生と日本の学生の違いを考えたことである。TAYAMA日本語学校を訪れての第一印象は、みんなが素直で元気がありすぎるとというのが、印象的だった。あれほど学生全員の息のそろった元気ある返事は見たことがなく、圧倒された。それに比べて日本の学校の生徒はどうだろう。すべての学校ではないだろうがダラダラ感が目立つ学校が多く感じる。つまり、カンボジアの学生は積極的で主体性があることに対して日本の学生は、周りを伺いながら行動し、消極的で自動的なことが分かる。日本は栄えている国ではあるが、基礎が全然なっていないと感じさせられた。

2つ目はポルポトの歴史を伝えるか伝えないかに考えたことである。グループで話し合った結果、伝えるべきという結論に至った。そこで悩んだことは、今伝えるべきか、次世代に伝えるべきなのかであった。今伝えるべきメリットとして挙げられたことが、生きている人がいるからリアルに伝えることができるということで、デメリットは拷問派と拷問された側が同じ場所に住んでいるということである。それに今発展中なのに、伝えるということは、状況を変えるということなのである意味リスクということ。何よりポルポトの歴史を育てる側が育っていないので、伝えるタイミングを見計らうというよりは、必然的にまだまだ先になりそうである。それに教える方に伝える側の主観が入ってしまうから、偏った思想を作り、国の方向性を変えることになる可能性も出てくる。つまり、結論としては、教育そのものが改善してから、伝えられるようになってから伝えるべきという考えに至った。このポルポトのような残酷なことは、今後二度と起こってはいけないと思った。

3つ目は、ゴミ山を視察したことである。実際に足を踏み入れてみるとマスクを二重にしても臭うほど強烈なおいがした。ハエもたくさん飛んでいて、話を聞くことに集中できなかった。そのような場所で毎日働いている人たちに違う仕事を紹介したいと思った。ゴミ山は今後なくすべきか、残しておくべきか考えてみた。一つの仕事として成り立っていることや観光の場所になっているという面では残しておくべきなのかもしれないが、衛生面やカンボジアの国のイメージなどのことを考えるとなくすべきなのかもしれない。とてもすぐには判断できない。

今回のツアーでは、未解決のことがたくさん見つかった。この未解決であること1つ1つを解決していくことによってカンボジアという国は、どんどん成長を遂げていくのではな



いかと思った。私たち学生にも支援できることはたくさんある。今後は、現地の人々がどのような支援が欲しいのかなどを考えて、カンボジアの救いになることができればと思う。

【カンボジアの貧困問題について】

摂南大学 経営学部 3年生

カンボジアは、貧困やごみ問題といった様々な問題を抱えている。国が豊かになればこのような問題は解決するが、解決しなければならぬ問題が多い。そこでこのすべての問題を解決するには、観光産業を盛んにさせインバウンド観光を進めるべきである。なぜならインバウンド観光によってもたらされる経済効果に大きな期待ができるからだ。

観光名所は人々が多く集まるだけでなく、何億円といった経済効果が生まれる。さらに世界的にも有名になることにより、外国人観光客が来ることも期待できる。外国人観光客が来るということは、外貨が輸入されるため経済的に良い。このように観光名所と言われる場所には高い経済効果が期待できる。

そういった観光名所が日本には数々ある。たとえばわかりやすいもので言えば世界遺産だ。日本は、世界遺産の数が世界で12番目に多く、22か所ある。世界遺産のような世界的に有名な観光名所では、高い経済効果が期待できる。「屋久島」の場合2011年には244億円の、「富士山」の場合2014年には194億円の、「富岡製紙工場」の場合2014年には34億円といった経済効果が出ている。世界遺産が数多く存在する日本でも、最低でも1か所何十億という経済効果を発揮している。

世界遺産登録すれば観光客が増えるというわけではないが、このように観光名所が多いほど比例して観光客も増えるため高い経済効果を見込める。事実、近隣の商業施設が多くある東南アジア諸国と比べるとカンボジアの外国人旅行者数は少ない。

同じ東南アジアのタイと比べると、2016年度の調査結果ではタイの外国人旅行者数は3,200万人と日本よりも多い。一方でカンボジアは500万人とタイの約の5分の1である。外国人全体の旅行消費量は、タイは2兆3,000億バーツ（61億2,000万ドル）でカンボジアは32億ドルである。

なぜ同じ東南アジアでこんなにも観光産業の利益に差があるのか。タイもカンボジアも、アユタヤ遺跡やアンコールワット遺跡、豪華壮麗な王宮や寺院がたくさんあり文化的観光名所は互いに同じくらいある。観光名所を作る以外にも、カンボジアが観光産業で他国に後れを取っている理由がいくつかあると考えられる。

その一つはビザだ。タイはパスポートさえあれば入国できるが、カンボジアはビザを申請しなければ入国できない。そのカンボジアビザの申請は、4000円ほどかかる。その申請方法も、ネットで申請するものや領事館や現地の空港で申請できるものがある。どの方法を取るにしても、ビザが必要ないタイと比べて少し面倒である。

二つ目は交通機関だ。先進国は当たり前前に電車やバスが普及している。タイにもBTSという高架鉄道があり、渋滞緩和のために作られ多くの観光客が利用している。だが、カンボジアは電車が整備されたばかりでありあまり普及しておらず、バスも路線が限られている。

なので、観光客が交通機関を利用するとなるとトゥクトゥクが主流となっている。トゥクトゥクだとドライバーとコミュニケーションを取らなければならない、外国人旅行客は気後れするだろう。となると、電車は自身で切符を買い乗るだけなので便利である。

今ある観光名所をさらに有名にさせるのも良いが、新しいものを作り観光客を集めることも必要である。そのためには観光名所を作り、見出すだけでは足りない。交通機関を普及させ、ビザ申請をより手軽にする。そうすればより外国人観光客がカンボジアへ旅行しやすい状況になると考えられる。

【JAPF2018 夏期 1 カ国研修】

名古屋市立大学 経済学部 3 年生

1. はじめに

私は、大学でアンコールワットについて研究しており、その中で

- ①アンコールワットの修復の現状
- ②他国がアンコールワットを直すことに対してどう考えているのか
- ③アンコールワットはやがてクメール人のみでの修復を予定しているのか
- ④観光について

の四点について疑問を持った。

この疑問について、今回の japf 一カ国研修で訪れた、観光省での説明、アンコールワットの見学、遺跡関係の仕事に従事する人が多く住む農村での見学を通して、現地での考えを知り、解決する。

2. 考察と結果

①アンコールワットの修復の現状

アンコールワット遺跡群では、最新の技術を使って修復を行なった部分がある。現在そのような場所の劣化が問題となっている。そのような場所について、カンボジアはどのような対応を取っているのかに興味を持った。

私は、最新の技術でなおしたところは放置していると考えていたが、そのような場所も地道に修復されていることがわかった。

しかし、アンコールワットの南門など、手が回らずにそのままになっているところも多い。

②他国がアンコールワット遺跡群を直すことに対して、現地の人たちはどのように考えているのか。

アンコールワットは宗教施設でもあり、また国のシンボリックな建物でもある。そのような施設を他国が直すことに対して、否定的な人も多いのではないかと考えた。予想した通り、アンコールワット遺跡群を他国が直すことに疑問を持っている人は多くいる。

また、遺跡群の修復を支援している諸外国について、国ごとに修復方法に対する考えが違う。例えば、ヨーロッパ周辺の国では、伝統的な技法ではなく最新の技術で、完全な復元を目指そうとする。日本は伝統的な技法で治せるところまでの修復を行う。カンボジアの人々が考えている修復方法は、日本政府や日本の団体が考えている修復方法と同じであることがわかった。

③観光について

アンコールワット遺跡群に観光客が来ることによる弊害として大きなものに、地盤沈下

がある。

実際現地に行くことによって、観光客が捨てるゴミの多さにより、ゴミ山などの環境問題が発生していることがわかった。また、教育面の問題として、遺跡群の近くに住む人は、学ばなくても遺跡群関係の仕事に従事できることが多い。そのため教育に関心がないということもわかった。

3. まとめ

カンボジアへ実際に赴くことによって、現地の人々のアンコールワット遺跡群の修復に対する意識を知ることができた。

今回は主にシェムリアップに住んでいる方からの意見を多く聞いた。遺跡群周辺に住んでいる人だけではなく、プノンペンなど都市部に住む人々や、貧困層などからも意見を聞くことを今後の課題としたい。

【人々の意識の違いについて】

京都産業大学 外国語学部 3年生

私は今回の1カ国カンボジア研修で、国や地域、自分の置かれている立場によって、例えそれが同じ物事であったとしても、人々の意識は変化するのだということを改めて認識した。例えば、戦争や内戦について、カンボジアではポルポト政権によって残虐な出来事が行われ、罪のない多くの人々が命を落とした。日本においては第二次世界大戦最中や第二次世界大戦後にアメリカによって原爆が投下され、これもまた多くの罪のない一般市民の命を奪ってしまった。同じ戦争、同じ罪のない一般市民の尊い命が失われてしまったというのに、その後の後世への伝え方、認知度などは到底同じとは言えない状況に今日置かれてしまっていると言えるのではないか。日本においては、現在でも平和授業として多くの学校で過去の歴史について改めて考えるような取り組みがなされているがそれに対し、カンボジアにおいては、学校でその歴史すら取り上げられていないという現状であった。たしかに、日本は国内の民族同士での争いではなく、外部によって影響がもたらされてしまっているため、非難することも難しくはなく、たとえ少し偏ったような教育をしたとしても国内において争いを繰り返すような悪循環にはなりにくい。カンボジアにおいては、自国内での争いごとであったが故に、現在偏ったような教育や思想をしてしまえば、また負のサイクルとして内戦を繰り返してしまうかもしれないということが踏まえられているように思う。更に、現在の教育普及率について考えていくと、日本では小学校からの義務教育に通えないという子供は殆どいないが、カンボジアにおいてはまだまだ教育格差というものが見える。もし、カンボジアにおいてこれほどまでもある教育格差の社会において、このようにデリケートな歴史問題を普及してしまうと、知識を持った一部の人がまた「復讐」という形で歪みあってしまう可能性も十分にあるため、現状的に学校など「教育」という場において伝えるのは適切ではないと判断されているようだ。そのため、現世でのそれぞれの歴史の認知度にはかなりの違いが出てきている。日本では歴史を後世に残し、同じ過ちを繰り返さないようにとしているが、カンボジアでは、今は隠すという動向の方が大きいように思えてならない。更に教育という関連で考えると、「学ぶ」意欲にも大きな違いがあるように感じた。今回の研修ではカンボジアにある日本語学校を訪れたが、日本では到底見ることのできないような、活気溢れる学校であり、生徒全員が目がこれほどまでに輝いているということに驚きを感じました。日本では小学校から高校まで進学し、大学まで卒業する人の割合はほとんどであるが、カンボジアでは小学校教育からまともに受ける機会がないという人も少なくはない。日本の恵まれた教育環境の中で育っている私たちと、そんな教育環境が当たり前に入らないカンボジアの子供達とではやはりモチベーションなど比べ物にならないようなものであった。同じ「学ぶ」問うこと1つをとってみても、自分を取り巻く環境や立場などによって大きな違いが生じるのである。カンボジアでのインターン研修後、帰国し改めて自分の



住んでいる「日本」、また自分を取り巻く「環境」全てが当たり前にあるものではなく、日々それらが手に入ることに感謝しながら生きていくべきだと強く思った。



【カンボジアに行って感じたこと】

京都学園大学 バイオ環境学部 2年生

私は今回カンボジアに初めて行ったことによりたくさんの驚きや刺激を受けた。

まずびっくりしたのはカンボジアの子供たちががポルポト政権による大虐殺のことをまったく知らないという点である。国の中にはトゥールスレン収容所やキリングフィールドなど虐殺を行ったとされる場所がたくさん残されており、証言者もいる中でこの事実は大変残念に思った。確かに今現在経済発展が著しいとされている中で過去の暗い歴史から目を背けたい気持ちもわかる。私も実際トゥールスレン収容所で見た生々しい血痕と写真を見て、いやな気持ちにしかならなかった。しかし、過去に目を向けないとまたポルポトのような過激な独裁者が現れる可能性だってあるし平和教育は人の心を育てるものであるから急いでやれとまでは言わないが徐々にでもいいから国民に広く周知するべきである。さらに驚いたことに観光省の中で一度もポルポト時代遺構のことが触れられなかった。国を代表するものが過去の黒歴史を隠し通すなどあってはならないことだと思った。私の予想だが国が動かない限り永遠にこの問題は解決しないだろう。

次に、カンボジア人の幸せや豊かさについてである。カンボジア国内ではプノンペンやシェムリアップなどの都市部とそれ以外では貧富の格差があることはよく知っている話だが、それが直接豊かさや幸せとは直結しないということを今回の研修で一番学べたと思うし、答えをまとめ切れないテーマではないかと思った。一般的解答からすると貧困＝不幸となる。しかし現地に行ってみればむしろ学びに対して意欲的であったり、観光客に物を買わせるほどの巧妙なテクニックが身につけているなどいやいや勉強している日本人よりも心や頭は豊かではないのかと思った。特に日本語学校の生徒さんを見ていると、日本人よりも日本人のように見えてきて自分たちは授業を聞くことさえできないのかと思うのがっかりしてしまった。逆によかれと思ってしている募金とか物渡しは逆に現地に不幸をもたらしているのではないかとも思った。やはり本当に現地のためを思って支援するなら自国の考えを押し付けるのではなく、現地に足を運んで実際に目で見てよく考えてから国に寄り添った支援をするべきだとかんがえた。極論をいうと募金箱なんて何に使われているかよくわからないしいらないと思うし、そのために24時間テレビなんてするのは時間と浪費の無駄遣いだと思った。

最後にカンボジア＝アンコールワットしかないだとか危険な国と言われている問題についてである。確かに実際行ってみてバイクが平気で歩道走るし、信号無視たまに起こるし、夜外出ると修羅場とかいう危険な場面があったのでいわれても仕方がないと思ってしまったのも事実である。しかし、それは法整備をしっかりとすれば解決できる話であり、また警察などの緊急車両をすばやく通せるような工夫さえすれば少しは安全になると思った。観光については今観光省が全力で国を挙げて頑張っているのを知っている。現実お隣



のベトナムはここ最近ハノイ、ホーチミンシティ、ダナンを中心として爆発的な旅行客増加傾向にある。ということはやり方によってはカンボジアも増加するのではないかと期待される。今カンボジアの強みは物価の安さにある。それを前面に押し出して観光地のPRを上手くし、ビザなし協定さえ結べば絶対に観光客増えると今回の研修ですごく感じた。

今回は、一週間という短い期間ではあったが19年間生きてきてここまで考えさせられる研修は初めてであった。これからは今回学んだことを生かして日々の生活を過ごしていきたい。

【現地に行くことの大切さ】

～TAYAMA 日本語学校を訪問して学んだこと～

学習院女子大学 国際文化交流学部 2年生

私は、今回このカンボジアスタディーツアーに参加して、現地に行くことでしか感じるこのできないカンボジアの現状を知ることができた。

私が印象に残る研修先は、TAYAMA 日本語学校を訪れたことである。私たちは、日本について事前に調べて模造紙にまとめたものを発表し、現地の学生と国際交流をした。日本語学校に通う学生たちは、みんなとても勉強熱心で挨拶もしっかりしてくれた。私たち日本人は、日頃の英語の授業でもここまでの態度で受けている学生は限りなく少ないだろう。常に先生の話の聞き、自分の意見を言わないという受け身な日本人の学生に比べ、TAYAMA の生徒は積極的であるため、自然と先生との距離も近くなり、言葉のキャッチボールが成り立つのだ。TAYAMA の学生たちは私たちとは比べ物にならないほどの意欲を持っていた。その理由としては、貧しいため教育を受けることのできる環境を大切にしていることも言えるが、一番は学生一人一人が明確な夢や目標をしっかり持っていることにあるのではないかと思う。私は実際にグループ交流の際七人の生徒に、なぜ日本語を勉強しているのか聞いてみた。五人が通訳と留学のため、二人が日本人と働きたい、結婚したいと答えてくれた。カンボジアは、日本ほど教育や就職制度が整っていない。しかし、だからこそ自分自身で将来像を明確に持ち、まっすぐにそれを追いかけていこうとする意欲も生まれるのではないだろうか。現地の学生と交流することで、教育の在り方やその国の現状や課題からみえる、子供や教育を受ける人々の考え方などについて、自国との比較ができ、現地の学校で学んだ教育のメリットを自国でも活かすべきだということにつながる。私たちは今回、語学学校にのみ足を運んだ。つまり、カンボジアの通常の学校の様子を見ることができていない。もしかしたら他の学校の子供たちは日本人とさほど授業態度が変わらないかもしれない。分からないのはなぜか、現地を訪問してそこで生活する生徒の姿を見ていないからである。このことから、現地に行くことがどれほど大切なことかが分かる。

最後のディスカッションの日、私たちは「豊かさとは何か。」について話し合った。私たちのグループでは、最初に教育を受けられることが豊かさであるという話になった。私の考えでは、豊かさと幸せは違う意味をもつ。幸せは、一人一人によって感じる重さや質が様々で、当事者ではない私たちが、勝手に幸せかどうかを決められるものではない。一方で豊かさは、みんなが共通して生きていくために必要な、一般的な人生の基盤となるであろうものを指すのではないか。それをふまえると、教育は世界中誰もが受ける権利をもっており、教育を受けられることが豊かであると断言できる。

では、教育を受けられない子供たちは本当に貧しいのか。それは一口には言えない難しい問題だと思う。しかし少なくとも、私たちが訪れた TAYAMA 日本語学校の生徒はみんな日本語



を勉強することの楽しさを知っていて、私たちにたくさん活力を与えてくれた。彼らが豊かであることに違いはないと思う。

現地に行くことは、私たちにリアルな現状をそのまま教えてくれる。また機会があれば、現地を訪れ、そこでしか見ることのできないもの、感じることのできないものを深く学びたい。

【教育の在り方】

宇都宮大学 国際学部 2年生

このツアーに参加する以前、私は世界中全ての子どもたちが高等学校レベルの教育は最低でも受けるべきと考えていた。しかし、プノンペンで日本語学校やイオンモールを訪れたこと、農村で子供たちと関わり、ゴミ山で走り回っている子供たちを目の当たりにしたことで、必ずしもすべての子どもたちが同じ内容の教育を受ける必要があるということではなく、環境に応じて教育の在り方は変わるべきであると思った。もちろん、文字の読み書きができること、計算ができることなど、必要最低限のことは学ぶ必要があると思う。しかし教育の果たす役割として、その子の未来の選択肢を広げることにあるのではないだろうか。そして、教育のバリエーションが増えることで、豊かさの選択肢も増えると考えられる。このように考えるきっかけになった研修先について、以下で述べる。

プノンペンではTAYAMA日本語学校を訪れた。彼らは無償で日本語を学んでいるからか、とても礼儀が良く、日本人でも驚くほどであった。そしてそれぞれ日本人と働きたい、留学したい、通訳者になりたいなど、目標をもって学んでいるため彼らはとてもキラキラしていた。日本語を学んでいることと、この学校はビジネススクールという側面も持っているため、彼らは国外に目を向ける必要がある。よって、彼らは多くの教養を身に付けていくと考えられる。イオンモールに来ていた子どもたちは、道端で見るストリートチルドレンとは全く違った。彼らの家庭は比較的裕福であると考えられることから、日本と近いような教育を受けさせてもらえると考えられる。つまりこのような人々は、自分の将来にとって多くの教養を身に付けていく必要があり、またそのような機会があるということである。

シェムリアップでは農村を訪れたが、子どもたちは皆元気に走り回って楽しそうに遊んでいた。そして、イオンモールにいた子供たちと服装などは大きく違ったものの、彼らが豊かではないとは感じなかった。また、彼らの保護者の中には教育は必要ないと考えている人もいるようだが、生きていくために必要最低限の教育は受けさせるべきである。しかし、農村で農業に励む生活をその子が望むのであれば、それも豊かさの選択肢の一つではないかと思う。ゴミ山で出会った小さな男の子たちの夢は警察官と兵隊だというのが、彼らはそのような職業しか知らないということを知った。これでは人生の選択肢が狭すぎるため、教育を受けることで様々なことを知り、世界を広げてほしいと思った。

このような経験から状況に応じて教育の在り方は変わるのではないかと思った。また、「豊かさとは何か」がテーマの最終ディスカッションで、先進国と発展途上国、都市と農村で求めるものが違うという話になり、そこから私たち目線での教育の大切さを語るの単なる押しつけではないか考えるようになった。しかし、上で述べたような必要最低限の教育を受けることで情報を得られるようになり、人生の選択肢を増やすことができるた



め、教育は必要である。それによって子供たちが自分たちの思う豊かさを手に入れることができれば、発展途上国と言われているカンボジアであっても、豊かであると言えるのではないだろうか。

【子供たちと豊かさ】

東京農業大学 応用生物科学部 2年生

今回のカンボジア研修ツアーを通して、カンボジアにいる様々なバックグラウンドを持った子供たちに会うことができた。ゴミ山で働く子供、孤児院にいた子供、日本語学校にいた子供、イオンモールにいた子供、農村にいた子供、物売りをする子供、本当に様々だった。

特に印象に残ったのは、物売りをする子供だった。アンコールワットなどの観光地にはストリートチルドレンと言われる子供たちが多くいた。ストリートチルドレンには、カンボジアのお土産を売っている子供、赤ちゃんを抱えている子供、服を売っている子供などがいた。アンコールワットでストリートチルドレンに囲まれ、「1個で1ドル、1ドル。お姉さん可愛いね。買ってよ。買ってよ。1個で1ドル、安いよ。」このセルフを繰り返して言う。1個で1ドルだったものが3個で1ドルと段々と値段が下がっていく。3歳くらいの子供さえ物売っている。こんなにも小さな子供が働かなくてはいけないのか、母国語が話せるかも怪しいのに売るためにわざわざ日本語を話してくれる、何とも言い難い複雑な気持ちになった。声をかけてくれるが買う気にはなれない気持ち、買わないことによる罪悪感、寂しさ、何もしてあげられない無力さを感じた。

子供たちに出会うたびに、その子供たちにとっての豊かさとはなんなのか、またどうしたら今よりも豊かになれるのだろうか、を考えるようになった。「豊かさとは何なのか？」というテーマで最終日のディスカッションが行われた。私たちの班は、豊かさには主観的なものと客観的なものがあると考えた。主観的な豊かさとは、満足感や自己実現、帰属意識などが挙げられる。客観的な豊かさとは、収入やインフラ整備、医療面、犯罪率などが挙げられる。また話し合う中で「知識」というものは、豊かさの要素として主観的な方にも客観的な方にも属するのではないかという意見が出た。主観的な豊かさとは客観的な豊かさ両方とも、形成していく過程で知識、教育というものが必須になると考える。

カンボジアでは1975～1979年のポル・ポト政権による大量虐殺が起きたため、知識人と言われる政治家や医者、教師などの数が明らかに少なく、現在の平均年齢が約25歳と非常に若い人が多い国である。この国を豊かにしていくためには子供たちをはじめ若い人々への教育が重要だと考える。また、若い人々への教育が今後のこの国の発展に大いに寄与すると考える。しかし、どのようにしたら全員に教育を届けることができるのか、これは非常に難しい問題である。教育を提供するためには、まず教育者の育成、学校の設立などある程度の資金が必要となる。カンボジアにはその資金がないためどこから集めてくるのかまた、誰が行うのか問題になる。ストリートチルドレンをはじめ貧しい子供たちが教育を受ける機会を作ることはできないのだろうか、豊かになるにはどうしたら良いのか、まだ自分なりの答えは出ていない。今後も考えていきたいと思う。

今回の研修を通じて日本にいるだけではわからないことを学び、また体験することがで



きた。百聞は一見に如かずという言葉があるが、本当にその通りだと思う。いくら日本で論文や資料を見てもゴミ山の匂いはわからないし、孤児院の子供達と話したり遊んだりすることはできない。貴重な経験ができたことを喜ばしく思う。

【カンボジアの現状と今後の展望】

獨協大学 国際教養学部 3 年生

私は以前から東南アジアの地域に興味があり、今回 JAPF インターンシップ型スタディツアーに参加することを決めた。このスタディツアーではカンボジアの平和や教育、産業など幅広い分野を多角的な視点で学ぶことができ、その上、自分の目で確認し、色々なことに関して引率の方やツアー参加者と話をすることによって、より理解を深めることができた。その理由は主に二つ挙げられる。

まず一つ目の理由は、カンボジアの社会分野にある。カンボジアの都市部と農村部の格差について、本やインターネット等で事前に調べ学習をしていたが、実際に現地に訪れて、目の当たりにし、ここまで格差がはっきりしているのか、と驚いた。都市部から離れ、農村に近づくにつれ、見える景色も変わっていった。私が特に印象に残っていることは、シェムリアップで視察したゴミ山だ。あたり一面に広がる大量のゴミの光景、分別されず捨てられているゴミの山は視覚と嗅覚に訴えられた。私はマスクをしていったが、ものすごく強烈な悪臭で非常に劣悪な環境だった。ゴミ山では、大人に混ざって多くの子どもたちも働いており、裸足のまま歩いている人もいた。至る所に金属やプラスチックなどの有価物があるため非常に危険だ。同じスタディツアーの参加者とゴミ山について話し合い、衛生面や環境面、健康面や教育面など様々な分野に関連しており、ゴミ問題について深く考えるきっかけになった。また、ゴミ山を封鎖すべきか、残すべきか、というテーマについて、彼らゴミ山で生きるスカベンジャーの人々やカンボジアに住んでいる人にとっての幸せや豊かさとは何かを考えた。

二つ目の理由は、カンボジアの平和分野にある。300 万人が虐殺されたポルポト政治やその後の内戦について、トゥールスレン収容所やキリングフィールド、地雷博物館を訪れて理解を深めることができた。特にトゥールスレン収容所では、亡くなった方の写真や拷問の様子を表した絵が展示されているのを見て回ったり、ツアーガイドさんの説明を聞いたりして、非常に衝撃を受けた。また、ポルポト政権のことについて今を生きるカンボジアの人にはあまり知られていないことが分かった。二度と同じ過ちを繰り返さないためにも、ポルポト政権のことを後世にしっかりと伝えていくべきだと考える。日本は世界で唯一の被爆国として毎年 8 月に平和祈念式典が行われている。カンボジアも日本のように実際に起こったことに対してしっかりと向き合うべきだと感じた。現在、人類の負の遺産を訪ねる観光が「ダークツーリズム」と呼ばれ、脚光を浴びている。平和な世界の実現に向けて私たちにできることは何かを考えた。

私は今回のスタディツアーを通して、多分野にわたり多くのことを学ぶことができた。「百聞は一見に如かず」実際に現地に訪れて、その国のことについて理解を深めることは非常に重要だ。この貴重な経験を生かし、今後しっかりと考えて行動していきたい。



【幸せなのは果たして】

大分大学 医学部 1年生

我々は生まれてくる場所と時期を選べない、たまたま日本に生まれて、そこで育った。今まで殆ど不自由をしておらず、今日と明日のご飯のことを心配したことはない、ましてや大学生、自力で学費や生活費を支払っている者はごく少数でほぼゼロといってもよい。恵まれているからこそ今回のチャンスを貰ったといっても良く、その意味では自分がいかに苦勞をしていないかを思い知る一週間となった。

私事だが、私はこのツアーの目的として、「異なる分野の人の考え方を理解する」「海外を見て日本との比較をする」ということを掲げていた。その一つ目、私は学部特性上、この先医療従事者との関わりが増え、自分の思考の偏りを危惧していたからだ。その中でも海外志向がある、他分野の同世代との関わりはとても刺激があり、有意義であった。具体的には、毎日のディスカッションの時にそれぞれの意見を発言するが、私は医療分野や市民の衛生分野についての改善点などを述べたが、言語の分野から、教育の分野、など多方面からの意見が出された。大きく分けると文系と理系で考えか方が異なっていることも実際に体験し、非常に貴重な経験となった。二つ目の日本との比較という点においては、研修先々で思い知らされることとなった。基本的なGDPや経済状況などは数字として知っていたが、実際にプノンペンに降り立って街の雰囲気、インフラ設備、マーケットなどを見学したとき、数字では知りえなかったカンボジア国民の生活を見ることができた。

私がカンボジアで思い知ったことは、我々は本当に幸せだろうか？ということである。確かに、私には両親がおり、学費（浪人時代も含め）も払ってもらっている。傍から見たら恵まれているだろう。一方、カンボジアでは、学校にいけない人、両親がいない人、そもそもお金がない農村の人などを見たが、彼らの目は我々よりも輝いていた。全力で挨拶をする日本語学校の生徒、素足で走り回ってサッカーをする孤児院の子供、彼らは自分たちが不幸だとは思っていなかった。我々はどうか？バイトがいや、試験がいや、人間関係がいや、世間では不幸中の幸いという言葉があるけれど、今の例でも分かるように、幸せの上の不幸ではなからうか。収入はあるけれどお金はストレスも持ってきた。恵まれていることが大前提になりすぎて、いつしかそのことを忘れてしまったのだろうか？カンボジアの子供はお金が、両親が、学校が消えても、懸命に生きていた。我々はおそらく飢え死にするだろう。それでは、本当に幸せとは言えないと思う。ただ運がよかっただけだ。今まで誰かが自分のことを今のステージまで引き上げてくれていたのだ、例えるなら、作り方は知らなくてもパンは食べられる。そこにどんな苦勞があるのかということには目を背ける。しかし、目を背けられないことがカンボジアにはあった。孤児院の子供は、ここにいることが楽しいと言った。私が同じ境遇なら絶対に言えないだろう。その人にとっての幸せは数字では測れない、データでは出せない、現地に赴かねば、触れなければ分からないまま、私はカンボジアを後発発展



途上国と平然と言っていたら。彼らは、私よりもずっと幸せ者だった。

【カンボジア研修を通して学んだこと】

広島女学院大学 国際教養学部 2年生

私は、今回のこの JAPF 夏期インターンシップカンボジア研修が初めての海外になった。そこで学んだことは多くあった。

1つ目は、カンボジアの歴史である。現在、発展途上であるカンボジアは課題がいくつかある中で貧富の格差が挙げられる。それには歴史的背景が関係あることがこの研修を通して一番学んだことである。ポルポト政権によって、何の罪もない知識層の人々が残虐に殺され、原始産業主義を重要視された結果、カンボジアは技術の発展がおくれ、経済的にも世界から置いていかれるようになったことを知った。今まで、カンボジアは貧困であることに対して、特に理由を知ろうとしなかったが、これがきっかけでこれからのカンボジアの経済成長により興味を持つようになった。

2つ目は、日本がいかにかンボジアへの支援をしているかを知ることができた。私は、日本がカンボジアに支援をしていることを全く知らなかった分驚きが大きかった。地雷撤去作業の支援はもちろん、日本人が設立したクラタペッパーによってカンボジアの食品の安全性を底上げしていたり、Sunrise Japan Hospital では、カンボジアへの医療の輸出、人材育成によって、ビジネスも兼ねてカンボジアをうまく支援していると思った。

3つ目は、「幸せ」についてである。これは、この1週間を通して、そして毎回のディスカッションを行なっていく過程で、考えさせられることが多かった。私は、カンボジアに行く前は危険な国で、カンボジアに住んでいる人は可愛そうと勝手に思っていた部分が大きかった。しかし、TAYAMA 日本語学校に行くと、みんな楽しそうに勉強していたり、農村の子供にも今幸せかを尋ねると、笑顔で幸せだと教えてくれた。たしかに、経済的に苦しい部分はあるかと思うが、私が出会った人みんな笑顔で楽しそうで、話している私まで笑顔になるくらいだった。貧困=不幸せであるという発想が間違っていたことを実感させられた。

これらとは逆に、貧富の格差、ゴミ山などはこれからの課題になっていく確実にあると思う。特に、ゴミ山は衝撃が多く言葉が出てこなかった。農業の仕事をしているが、それだけでは生活できずにゴミ山でも働いている人、両親がタイに仕事で出て仕方なくゴミ山で働いている子供もいた。ゴミ山は衛生的に悪く無くすことが最善であるとは思いますが、ゴミ山で働いて生計を立てている人が多いため、それを考えると現実的に難しいこともよく分かった。

今回この研修に参加して出会えた仲間も多く、この1週間で出会えたカンボジアの人々も含め、まさに「一期一会」だと思えた。私はあまり勉強ができる方ではないので、みんなから学んだことも多くあったし、このメンバーだからこの研修を最初から最後まで楽しく終えることができたのだと思う。

ここで学んだこと全てが私にとって新鮮で、たくさんの刺激を受け、確実にこれからの私



の人生に良い意味で影響を与えて行くだらうと思う。なにより、カンボジアの良さをもっとみんなに知ってもらいたいと思えるようになった。私が発信することによって、少しでもカンボジアが正しい方向に向かっていけることを願っている。

【生命の美しさ】

熊本大学 文学部 3年生

私がカンボジアで感じたのは、生き物の美しさだ。確かに、カンボジアは日本に比べて資源的に豊かでないし、貧困国と言われてもおかしくない状況だった。実際に物乞いの子どもがいたり、ゴミの上で生活している人がいたりして、ショックだった。たくさん問題が混在していて、どれも複雑に絡まり合っているのを見て、なんとなく絶望的な気持ちになった。特に、ポル・ポト時代の遺構や地雷を見た時は、人間が人間を苦しめ、命がなくなっていくのを感じて、言葉にならず涙が出た。自分がいくら泣いても変わらない事実が悲しかった。アンコールワットのような、あんなに美しいものをつくる人間が、殺し合いをしたことがわからなかった。しかし、カンボジアの緑は鮮やかだったし、人間も含めて動物は自由に見えた。

日本で暮らしていれば、なんとなく社会的に保障されている感じがある。生きているのが当たり前という感覚だ。ふつうにルールに沿って歩けば、贅沢はできなくても生活することはできる。だから、みんな安定した収入を求め、安定の上に自らの生活を築こうとする。カンボジアで見たのは、不安定の上で生き残ろうとしている人たちだ。私たちに比べたら、物質的には決して豊かとは言えない生活をしているのに、生きていくための感覚が研ぎ澄まされているような気がして、同じ生き物としてなんとなくうらやましかった。目を見れば、物質的に貧しくても心は貧しくないことがすぐにあった。これこそが、豊かさの本質なのではないか、とふと思った。豊かさは、経済的なものの上に成り立っているのではない。もちろん、そのすべてがつながっていることは間違いないのだが、本当の豊かさは、豊かさという概念からかけ離れたところにあるのではないだろうか。豊かさという構築された概念に思考を冒されてしまった私たちは、本来の豊かさを見失ってしまっているようにも思える。

今回私が目にしたものや経験したことは、一見かなり多くの分野とシステムを網羅しているようにも見えるが、実はそうではない。何か一つのことを知ると、衝動的にほかの重要なものごとを考えられなくなってしまう。つまり、私自身は限定的な視点しか持っておらず、全体のシステムを把握することはできない。このことを、今回の研修で実感した。一つのこと、ほかのことと網目状に繋がっている。カンボジアで見たゴミ山は、私の明日の食事に影響を及ぼしているかもしれない。この、「かもしれない」や「なのではないか」という考えを失わないようにしたい。目に見えないところまで想像し、繋がりをつくり出すことこそが、私がしなければならぬことだという確信が持てた。

このようなこと、またはその他のことを考えられたのは、ものごとを素直に感じることでできたからだ。それは、カンボジアの人間を含めた生き物が素直に生命体として輝いていたからである。人間として、生き物としての愛にあふれていた。この感動を持ったまま



で、これから一生懸命考えて、生きていきたい。

【2018 夏一カ国研修 レポート】

北九州市立大学 国際関係学部 2年生

このツアーを通じて、カンボジアの現状を実際に見て、知ることができた。私のカンボジアに対するぼんやりとしたイメージは、他のASEAN諸国と同様、近年急成長を遂げている新興国というものだった。たしかに、首都のプノンペンでは、そのイメージがぴったりと重なり、それどころか、私のイメージをはるかに超える程の急成長ぶりであった。新しい綺麗な建物や建設中の高層ビルは、私にカンボジアの高度経済成長を感じさせた。しかしこのような輝かしい急成長の一方で、少しプノンペンの中心部から外れると、物を売りつけてくる子供達や、川の下掘立小屋はあまりにも対照的で、衝撃的であった。初めこの現状を見た時は、何がこの格差を生み出したのか理解できなかった。私は、カンボジアについてあまり詳しく知らなかったのだが、今回のツアーを通じて得た知識を基に、この格差の原因、またカンボジアの課題について述べていきたい。

まず、私は、今のカンボジアを理解するために必要な大前提として知るべきことは、カンボジアはまだ内戦、大量虐殺が終わって間もないという事実だ。カンボジアで長く続いた内戦は、地雷や不発弾を残し、今もまだカンボジアの発展を妨げている。地雷による被害が被害者の生活を苦しめ、この貧困がさらなる貧困を呼ぶ、負の連鎖が続いている。また、私が初めて知ったことなのだが、カンボジアもベトナムでまかれた枯葉剤の影響を受け、奇形児が生まれている。東南アジアで起きた悲惨な戦争による被害は、一カ国、一世代に留まらないことを痛感した。このような、兵器による被害もカンボジアの成長を妨げる重要な要因だが、それ以上に大きな後遺症となっているのが、知識人を対象にしたポル・ポト政権による大量虐殺だと考える。私がカンボジアに行って驚いたことが、国をつくり、人々の生活を豊かにするために必要な要素ある病院や、学校、衛生面が整っている生活環境などが圧倒的に不足しているということである。以上の要素はいずれも知識を要する人間が求められる。ポル・ポト政権が行ったことを知ると、なぜこのようなカンボジア現状が生まれた原因の一つが理解できた。

農村や、病院、学校、ごみ山に行くと、上記のように内戦の爪痕が、貧困を呼び、人々の生活を苦しめていることを切に感じた。しかし、離れたプノンペンでは、中国の援助の下、経済的豊かさを象徴する高層ビルが、多く建設されている。あの高層ビルと貧困に苦しむカンボジア国民を思い浮かべると、経済成長が重要視され、カンボジア国民の生活が置き去りになっているように感じずにはいられなかった。また、現地の人々の話によると、カンボジアで採れる鉱物の採掘権の多くは、中国が握っているという。私は、このような中国の支援と参入の仕方に危機感を覚える。長い目で、生活水準と経済が共に成長していくことが好ましく、そのことがカンボジアの課題だと、今回のツアーを通じて思った。

【支援のあり方について】

九州大学 農学部 1年生

私は小学校高学年の時から、将来は貧困で苦しんでいる人たちを支援したいという夢を持っている。しかしそれと同時に、本当に自分が支援すべき「貧困で苦しんでいる人たち」とはいったい誰なのかという疑問も持ち続けてきた。よって今回この研修に参加した1番の目的は、産業、教育、医療、歴史など、多角的な視点から途上国を見つめ、考え、自分なりにその疑問の答えを導き出す（あるいはそのヒントを得る）ことであった。そして実際この研修を終えて帰宅し、じっくり考えてみると、いくらかの発見があり、今後また変化していく可能性は十分あるものの現時点での答えを導き出すことができた。今回この論文では、答えに行き着くにあたってキーとなったこの一週間での出来事、その答え、それにもとづいて自分が今後すべきこと、の3つについて図を用いつつ述べようと思う。

この一週間で、「異様」な光景を幾度となく見た。ゴミ山はその典型である。100人近い人たちが、ものすごい悪臭を放つまさにゴミの山の上でお金になりそうなものを探してゴミをあさっていた。遺跡めぐりの時もそうである。バスを降りてすぐや、バスに乗る直前、必ずと言っていいほど毎回子どもたちがものを売りに来た。彼らはノーと言ってもずつついてきた。走って逃げても負けじと追いかけてくる子や、バスの中に身をのりだしてまで買ってくれとせがむ子もいた。私たち日本人からしたら、これらゴミ山や遺跡での光景は間違いなく「異様」である。日本で生活していたらまず見ることはないだろう。しかしそうだとしても、そんな彼らに同情し、「支援すべきだ」と考えるのは、必ずしも正しいとはいえない。これは今回強く感じたことである。ゴミ山の責任者の方によると、そこで働くほとんどの人にとっては、ゴミ山での仕事は副職らしい。彼らはふだん農業を営んでいて、来たいときにここにきて、バイト感覚で作業をして、帰りたいときに帰るらしい。また、遺跡で会った子どもたちをよく見てみると、頬のふっくらした感じや手足の太さからして、それなりに健康そうであった。笑顔を見せている子さえけっこういた。ガイドの方に彼らについて聞いてみると、彼らは学校から家に帰って、家の人にここに売りに来るように言われて来ているらしい。私たちと比べて、ゴミ山で仕事をしている人たちも、遺跡の子どもたちも、もちろん裕福とはいえない。着ている服も、住んでいる家も、私たちとはまるで違うだろう。図1のように、物質的な豊かさ（お金も含め、どれだけ自分の周りに物があふれているか）でいったら確かに私たちのほうが豊かであり、比較をすると彼らは劣っている。しかし、その物質的な豊かさで心理的な豊かさ（どれだけ日々を幸せに感じるか）をはかることはできない。私たちから見ていわゆる「貧しい」生活をしている人の中にも、幸せな暮らしをしている人たち（第2象限②）はたくさんいるのである。なので私には、彼らを支援する必要性はあまり感じられない。途上国を支援する際、1番注目すべきは第3象限③に属する人たちなのである。③に属する人たちの原因はいろ

いろいろあるはずである。中でも私が1番大きな原因だと考えるのは、食べ物の不足である。

(図2) 教育や医療がなくても幸せな人はたくさんいるが、毎日お腹をすかせていて幸せな人はいない。というのも、そもそも食べるという行為は生き物が生きていくうえで必要不可欠であり、ヒトにしぼって考えたとしても、教育や医療が存在し始めるずっと前から、ヒトを幸せにしてきたのである。このことは、研修中にNGOの方とお話しする中でこれまで以上に強く思うようになった。

では、今後私がすべきこと(したいことでもある)は何なのか。極端な言い方をすると、途上国において幸せでない人を幸せにしていくことである。図1でいう、③に属する人たちが②に引き上げることである。(もっというと、③に属する人を①や④に動かすのは、優先順位として低いと考える。) 私は今、途上国の教育支援をするサークルに入っている。しかし図2にあるように、私は教育を受けなくても幸せな人たちは多くいると思っている。なので、教育を受けたいと願っているにもかかわらず受けられない人たちを見つけ出し、その人達に対して支援を行うよう努めていく。(そのために、支援先調査チームというチームに入ることをきめた。) また、私は大学で農学を専攻している。将来は農業の専門家になり、飢餓に苦しむ人たちがお腹いっぱいご飯を食べられるよう支援をしていきたいと考えている。

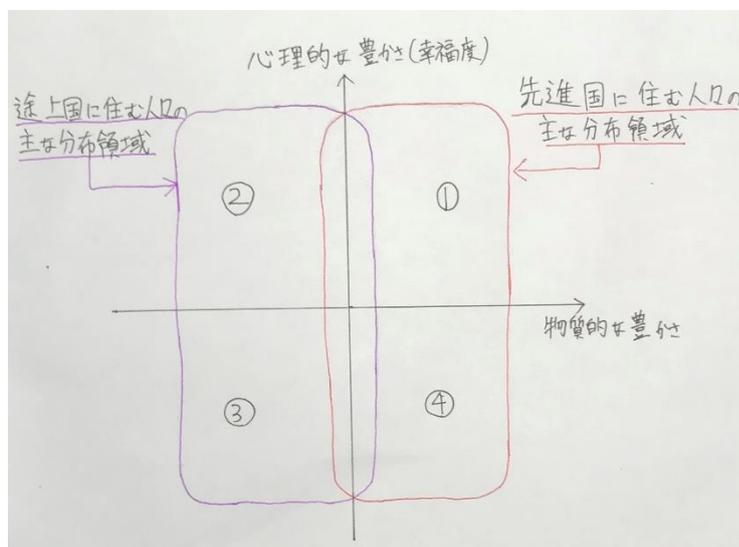


図1：豊かさについて

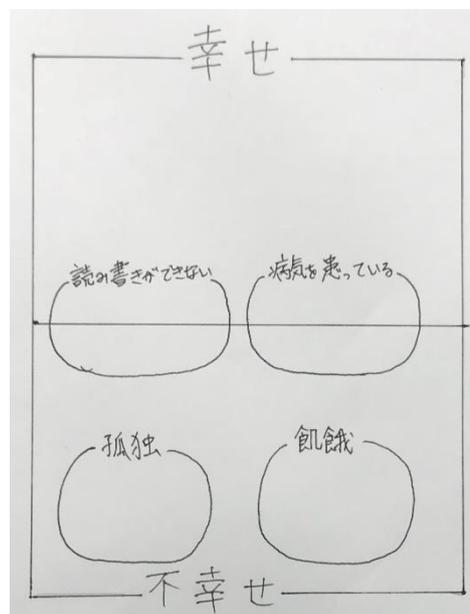


図2：幸せについて

【「比較」から得たこと】

北九州市立大学 文学部 2年生

私は、今回このスタディーツアーに参加して、様々な分野において日本とカンボジアの「比較」をすることができた。特に、教育と観光の分野を中心にこの2か国を比較して学んだことを述べたい。

まず、教育の分野では「TAYAMA 日本語学校」と「バイヨン中学校」を訪問した。カンボジアの学校は午前と午後の授業に分かれており、学校に行かない時間帯は仕事や家の手伝いをしている。日本とは違い、学校を出ると「学生」として見られることがほとんどない、と感じた。そして予算や校舎、先生の不足からも「学校に通い続ける」ということができない事例が多く、給食などは無いため、学校に来ている子供でさえも栄養失調の場合があるということを知った。日本では、学校によって学生は働いてはいけないなどの規則があり、栄養のある給食で生活面でのサポートをするなど、勉強の妨げにならない生活環境が整っている。このように、カンボジアの教育には「持続性」と「教育の環境」に問題があると言える。確かに生活の苦しい家庭にとっては、「勉強よりもその日の生活」という考えが強くなるだろう。だが、「バイヨン中学校」で先生のお話を聞き、私自身、今後カンボジアを担って行く子供達が様々な分野で活躍できるように夢を制限しない事が重要だと強く考えるようになった。その為にも、農村の閉じた環境で過ごしている子供達などに外の世界や農業以外の様々な職業に触れて知る事ができる、基礎的な学習は必要だと感じた。この事を子供の親に理解してもらい、勉強のしやすい環境を作り、継続した学習ができるようにする事が今のカンボジアでは必要だと思う。

次に、観光の分野では「観光省」を訪問した。カンボジアの観光には多くの課題があるが特に、観光が一点集中型になっている点を改善することが必要なのではないかと考える。挙げられる観光スポットがアンコール遺跡群だけになっている、というのは観光省でも課題になっているようだ。他にも、「エコツーリズム」と言うカンボジアの自然を楽しむ観光や水祭りなどがあるものの、あまり浸透していないと感じる。一方日本では、食べ物や自然、建物、買い物など様々な部分で観光の要素があり、あまり偏りは無い。この違いは、観光客がもつイメージの違いにあるのではないかと考える。現在のカンボジアはポル＝ポト政権で崩壊した後の復興期であり、「娯楽」としてではなく「学習」としての観光になっているのではないかと考える。確かに、「アンコール遺跡群」の歴史的な背景と自然に飲み込まれつつある現状の問題や、「ブラックツーリズム」として歴史的な負の側面を知る観光も必要だとは思いますが、気楽に観光に来られる国と言うイメージ作りが観光客を増やす上では重要だと思う。SNSを使った積極的な呼び込みと、リピーター確保、そして、安全面をアピールした「行きやすいカンボジア」を目指して行くべきだと思う。

このように、私は実際にカンボジアに行き、問題点や魅力的な部分を肌で感じる事がで



きた。また、日本と比較してみて、カンボジアから見習いたいと思う点も多くある。教育の面では、日本語学校で、具体的な目標と自主性、そして学校を「学習したい人が学習できる環境」にすることで圧倒的な「やる気」に繋がる事が分かった。また観光の面では、市場などで観光客の言語を使い、コミュニケーションや客引きを図る「積極性」も日本の観光産業に取り入れるべきだと思った。今回のスタディーツアーで「比較」から学んだことを今後の生活や大学での講義などに役立てたい。

【「豊かさとは」を考える】

下関市立大学 経済学部 2年生

彼らの目を見ると嬉しくなった。自分の紹介するものに日本語学校の生徒はすぐに興味を示した。彼らから感じたものは彼ら自身の積極性というより、何でも知りたいという好奇心であった。彼らから自分の夢を聞かれた。明確な夢を持っていない私はすぐに答えることができず咄嗟に「故郷で活躍できるような人になりたい」と曖昧な夢を語った。恐らく彼らには明確な夢があるのだろう、少し不思議な顔をして笑ってくれた。恥ずかしくてたまらなかった。

彼らの目を見ると楽しくなった。孤児院では言語はほとんど通じなかった。お互いが相手に伝えるために片言の英語と大袈裟なジェスチャーを用いた。肌の色も文化も住んでいる場所も、そしておそらく思想も違う。ただ、笑顔は世界共通のコミュニケーションのツールだと思った。

あの建物を見ると苦しくなった。日本では考えられない現実が現に起こっていた。訪れたキリングフィールド収容所には拷問に使われた道具や建物内部の構造、血痕までもが当時のまま残されており、その生々しい爪痕は当時の映像を私の脳裏に濃く浮かばせた。

ガイドの方を見ていると悲しくなった。我々に本当に優しく接していただき、我々が楽しめるよう本気でガイドをしてくださった。ただ、話したくない自国の、そして自分の過去を話しているときのガイドの方の目はあまりにも悲しそうであった。身内に実際に起こった残酷な事実を誰かに伝えるその辛さは、自分には想像できない。

彼らの目を見ると寂しくなった。彼らの目もどこか寂しそうであった。彼らは時折笑っていた。その笑顔は輝いていなかった。彼らは走ってもいた。しかし、無邪気ではなかった。生きるためにゴミ山で働く彼らは、見物に來た我々に慣れていた。その状況が何とも言えなかった。見に來ただけで帰っていく我々を見てどのように思ったのだろうか。以前ここに來た人がいるんなものをくれたから今回も何かもらえと思った、と我々に物を乞うあの少年の寂しそうな顔が忘れられない。

今回のツアーでは、班に分かれて「豊かさとは」何かを考えた。どの班も明確な答えは出ていなかったように記憶している。私の考えは、“人それぞれでしょ”である。今もこの考えは変わらない。教育を受けていない人たちも、本人たちが教育を望まないのであればそれでいいと思う。日本よりも経済的に豊かでなくても楽しそうにしている。ただ、ツアーに参加して、“人それぞれだけど限度はある”と身をもって感じた。ゴミの山で生活している人たちにとっての「豊かさ」とは、“普通の生活”であるだろう。それをその人なりの「豊かさ」と呼んで終わってしまってはならない。生きていれば誰もが流す血や汗や涙は、流し方によっては残酷である。私にできることは少ない。だからこそ今回感じたことを忘れないようにしなければならない。現地の人がいづらいいことは少しでもいいから我々が伝えれば



いいし、何か機会があれば微力でも協力する。まずは我々ができることの積み重ねからして
いきたいと思う。

【現実を知った私に出来ること】

山口県立大学 国際文化学部 1年生

私はこのカンボジアスタディーツアーに参加するまでは、約30年前のカンボジアのポルポト時代に大量虐殺が起きたことなど知らなかった。今回のツアーでたまたまキリングフィールドについて調べてくることとなり、そのときに初めてポルポト政権について知りとても衝撃を受けた。

実際にカンボジアに行くときにさらに現地に行ったからこそ知ることが出来たことがあった。それは現地の学校では歴史の授業は科目としてなく、触れたとしても深く掘り下げて勉強することはないということだ。私はてっきりカンボジアではその過去の事実をより多くの人に知ってもらいたいという思いを持っているとばかり思っていたがそうではなかった。私達の8日間のツアーのガイドを担当して下さった方も私達に必死にポルポト政権について事実を話してはくれたが何か後ろめたさがあるように感じた。

キリングフィールドやトゥールスレン収容所に訪問した日の夜には、「ポルポト時代を後世に伝えていくべきか」というテーマでディスカッションをした。私は最初、もちろん伝えるべきであり、なぜなら過去の事実を隠さずに伝えることこそが今後のカンボジアの発展に繋がると考えていたからだ。しかし皆で議論していく内に、カンボジアのポルポト時代は日本の広島で起きた他国からの影響による原爆とは違いカンボジア国内で起きたと言う些細なことではあるが大きな違いに気づいた。これに気づいた私達は後世に伝えることでまたこのような悲惨なことが起きてしまう可能性を考えた。そこで最終的な私の意見として今は伝えるべきではなく、より教育が平等に受けられるようになってから教えるべきだと考えた。現在カンボジアでは教育格差も問題の1つであり、皆が学校に行けているわけではない。そんな中で教えてしまうとあらかじめ教育を学んでいる知識人が有利となりその知識を悪いことに使おうと考える者も少なからず出るかも知れないと考えたからである。

またカンボジアの孤児院に行く道中のバスで引率の方が実は子供を使った孤児院ツーリズムの存在があることについて話をした。私はその話を聞くまでは子供達と遊ぶことだけをとても楽しみにしていたが、孤児院に到着後も疑いの目を無くすことは出来なかった。なぜならその話を聞き、この子供達も大人からの命令により私達に優しく笑顔で接してくれているのか、何か虐待などを受けているのではないかなど多くの不安がよぎったからだ。しかしその日は子供達と目一杯遊び、楽しむことが出来た。

帰国後私はカンボジアに行く前に立てた目標である、私に出来ることを見つけることが出来たのかを振り返った。正直これと言って出来ることを見つけたわけではないがいくつか小さなことではあるが見つけることが出来た。1つ、それは今通っている大学でしっかりと勉学に励むこと。2つ、私がカンボジアで体験したことを多くの人に伝えること。そし



て最後に、学生中にどこか発展途上の国に行きそこで1つの課題を見つけ1年をかけてその課題を解決に導くということに挑戦してみたいと強く思った。

【私が見たカンボジア】

広島女学院大学 国際教養学部 2年

私は今回のカンボジアスタディーツアーに参加して、カンボジアの歴史はもちろん、カンボジアの現状や課題、明るい面も暗い面もみることができ、自分の考え方や視野を広げることが出来た。また自分を見つめ直すこともできた。毎晩参加者のみんなとディスカッションをすることで自分にはない考え方を知ることができ、自分の考え方の幅を広げることが出来た。そしてカンボジアについて深く考えることが出来た。

まず、カンボジアの歴史について。

カンボジアは1975年から4年間原子共産主義を掲げるポルポト政権に支配されていた。ポルポトは反ポルポトや知識人など子供も女性も関係なく殺し、100万人以上の犠牲者を出した。そんな残酷な過去を今回の研修先、トゥールスレン収容所やキリングフィールド、地雷博物館でどれほど残酷なものだったのか身に染みて感じる事が出来た。実際にその場所を訪れることは勇気のあることだけではないと感じられないものがたくさんあるということに気付かされた。あまりにも残酷なこの過去に私は胸が苦しくなった。それぞれの研修先でみたこと、感じたことはずっと大切にしていきたいと感じた。そしてこのような残酷な過ちが二度と繰り返されぬよう私はもっとたくさんの人にこの出来事を知って欲しいと感じた。今も尚、世界中で繰り返される内戦やテロ、核兵器問題。世界中の人々が平和に暮らせるよう自分に何が出来るのか改めて考えさせられた。

次にカンボジアの貧富の差について。

私がカンボジアに着いて最初に驚いたのは自分が想像していたカンボジアの景色より遥かに都会だったことだ。首都のプノンペンビルも多く建ち並び、バイクや車に乗っている人も多く想像以上に発展していた。しかし、少し都市部から外れるとそこには都市部とは真逆の貧しい生活を送っている人がたくさんいた。私たちが訪れた農村では、学校にも通えていない子供たち、服を着てない幼い子。ゴミ山で、ゴミを拾って生活している人。また幼い物乞いたち。両親がいなくて孤児院で暮らしている子供たち。都市部でみた人々との暮らしとは全く違う景色だった。私が一番印象に残っているのは孤児院と農村で一緒に遊んだ子供たちのこと。それぞれに抱えているものは私たちでは到底、想像できないほどのことだと思うけど、みんなキラキラした目で素直で真っ直ぐで逆に私がパワーをもらった。私はこんな子供たちの笑顔がもっともっと増えてほしいと強く感じた。そしてそのために私たちになにができるのか。私たち個人が行動してもカンボジアのいまの現状が変えられるわけでもない。しかし、私たちが現地に訪れることや募金活動をするには多くの人にカンボジアの現状を知ってもらえる材料になるのではないかと考えた。私にできることは少ないけど行動を起こすことはこれからも続けていきたい。

カンボジアで感じたことは一生忘れないだろう。そしてまたいつか成長してカンボジアを訪れたい。私は今回のカンボジアスタディーツアーに参加して、カンボジアの歴史はもちろん、カンボジアの現状や課題、明るい面も暗い面もみることができ、自分の考え方や視野を広げることが出来た。また自分を見つめ直すこともできた。毎晩参加者のみんなとディスカッションをすることで自分にはない考え方を知ることができ、自分の考え方の幅を広げることが出来た。そしてカンボジアについて深く考えることが出来た。

まず、カンボジアの歴史について。

カンボジアは1975年から4年間原子共産主義を掲げるポルポト政権に支配されていた。ポルポトは反ポルポトや知識人など子供も女性も関係なく殺し、100万人以上の犠牲者を出した。そんな残酷な過去を今回の研修先、トゥールスレン収容所やキリングフィールド、地雷博物館でどれほど残酷なものだったのか身に染みて感じる事が出来た。実際にその場所を訪れることは勇気のいることだけではないと感じられないものがたくさんあるということに気付かされた。あまりにも残酷なこの過去に私は胸が苦しくなった。それぞれの研修先でみたこと、感じたことはずっと大切にしていきたいと感じた。そしてこのような残酷な過ちが二度と繰り返されぬよう私はもっとたくさんの人にこの出来事を知って欲しいと感じた。今も尚、世界中で繰り返される内戦やテロ、核兵器問題。世界中の人々が平和に暮らせるよう自分に何が出来るのか改めて考えさせられた。

次にカンボジアの貧富の差について。

私がカンボジアに着いて最初に驚いたのは自分が想像していたカンボジアの景色より遥かに都会だったことだ。首都のプノンペンビルも多く建ち並び、バイクや車に乗っている人も多く想像以上に発展していた。しかし、少し都市部から外れるとそこには都市部とは真逆の貧しい生活を送っている人がたくさんいた。私たちが訪れた農村では、学校にも通えていない子供たち、服を着てない幼い子。ゴミ山で、ゴミを拾って生活をしている人。

また幼い物乞いたち。両親がいなくて孤児院で暮らしている子供たち。都市部でみた景色とは全く違う景色だった。私が一番印象に残っているのは孤児院と農村で一緒に遊んだ子供たちのこと。それぞれに抱えているものは私たちでは到底、想像できないほどのことだと思うけど、みんなキラキラした目で素直で真っ直ぐで日本の子供となんの違いもない目をしているように感じた。

【本当の豊かさを考える】

大分大学 福祉健康科学部 2年生

今回のカンボジアスタディーツアーへの参加をきっかけに、「豊かさ」や支援の在り方について考えた。

最初は、カンボジアなどの発展途上国は、「豊かな国ではない」というイメージがあった。貧しい国、無法地帯が多い国だから先進国が支援していかなければならない、この考えが間違いではないむしろその通りではあるが、私にはまだ見えていないことがあった。TAYAMA 日本語学校での学生達との交流、孤児院や農村での子ども達との交流は一概にも「貧困な国」と決めつけることはできないと感じた。彼らの勉学に対する熱意や興味には頭が下がる思いだったし、無邪気な笑顔で明いっぱい遊ぶ姿は日本の子ども達となんら変わらない。そこに「豊かさ」の優劣はつけられないと思った。私だけではなく他のメンバーもそう感じているようだった。しかし私は、それで終わってしまっただのきれいな事であるようにも思う。だれもが高度な医療サービスを受けることができていないこと、内戦で負った傷跡がまだ残っていること、栄えている都市部がある一方でゴミ山で生計を立てている人々がいること、田舎では学校が少なく学習時間が確保されないこと、様々な現状を見た。トゥールスレン収容所・キリングフィールドでの悲惨な大虐殺の真実には言葉を失った。TAYAMA 日本語学校の18歳の学生は、トゥールスレン収容所と聞いてもそれが何かわかっていなかった。カンボジアの多くの若者達は過去に何があったのか知らない。見渡す限りのゴミとそれが放つ異臭に囲まれ、黙々と作業をする人々と私たち観光客が何かいい物をくれるのではないかと期待し、脱ぎ捨てた靴に必死で群がる子ども達の姿。地雷の処理に当たる子ども達と地雷によって命の危険が及ぶ地帯の存在。私がこのツアーで感じたことは、カンボジアの若者は日本の若者に比べて将来の選択肢が少ないのではないかということだ。自己決定によって歩む道に充実と幸福を感じることができているのならばそれは豊かであると言えるが、自己決定できずに他の道を選ぶことができなかつたり、そもそも他の選択肢があることを知らなかつたりすることは本当に豊かであると言えるのか。私は、「豊かさ」を決して心の豊かさだけに限定して終わらせてはいけなく考える。経済的、数字でみる豊かさは彼らの選択肢の幅を広げることにも繋がり、心の豊かさ同様に大切なものだと思う。そうであるからこそ、他国からの、熱意や向上心を絶やさせない・依存させない援助が必要なのだ。学校建設や医療スタッフの育成など様々な教育や地雷処理の支援など安心して暮らせる環境作りこそ支援していくべきことなのではないかと考える。教育と環境作りの重要性はあらゆる問題に直面している日本でも同じだ。

本当の意味での豊かさを手にするには日本でもカンボジアでも、私たち若者は多くのことを知り、自国について他国について考え、自分自身について考えていく機会が必要なのかもしれない。



【教育の重要性】

福岡女子大学 国際文理学部 2年生

大学の講義でポル・ポト政権について学んだことがきっかけで、今回のスタディーツアーに参加することを決めた。カンボジアは東南アジアの中でも特に発展が遅れている印象があったが、都市の方は繁栄していてとても驚いた。

今回の研修では子供たちに考えさせられることがとても多かった。無邪気な笑顔で遊んでいた孤児院の子供たちは、両親からの愛情を受け取ることはないし、18歳になったら一人で生きていかななくてはならない。ゴミ山にいた子供たちは、私たちからお土産をせがみ、脱いでいった靴に群がっていた。その一方で、ショッピングモールにいた子供たちは家族で楽しそうに買い物をしていた。どちらが「豊か」であるかはわからないが、この極端な格差はあってはならないと感じた。そして、その格差をなくすには何よりも平等な教育が重要であると考えた。

1975年から1979年までカンボジアを恐怖に追い込んだクメール・ルージュは大量の知識人を虐殺した。それによって、医師・教師不足に陥った。その結果、カンボジアが衛生面や教育面で大きく遅れていることは間違いない。また、クメール・ルージュは学校教育を禁止したため、学校の校舎は破壊、もしくは軍の基地や刑務所などとして使用された。教員は知識人とみなされ、小学校の教員も8割が命を落としている。教師不足が招くのは、子どもたちの勉強時間の減少、そして学校施設の機能不全である。小学校については、国内に約7000校あるが、その中には教師がいないために学校として機能していないところがたくさんあるのが現実である。

人材育成は国の経済発展に欠かせない要素である。カンボジアがこれからさらなる発展を遂げるためには人材育成に力を入れていかなければならない。したがって、今のカンボジアに必要なのは、教育者の人材育成・公平な教育であると考えます。都市と農村では受けられる教育の質に大きな差がある。その差をなくすことは、私が感じた格差をなくすための第一歩であると思う。

私は今回の研修で子どもたちの教育支援をしたいという夢を見つけた。物質的な支援だけでなく、将来につながる支援がしたい。子供たちの笑顔につながる支援を。自分の好きなことや得意なことが将来の生活に生かせるように。例えば、都市の子供たちを農村に連れて行ったり、海外からきた旅行者から文化や言語を学んだり、職業体験ができる機会を作りたい。勉強はもちろんだが、様々なことを経験して価値観を広げられるような支援が必要だと考える。もちろん、金銭的に難しいかもしれないが、21世紀の文明の発達により、クラウドファンディングなど、支援する方法はたくさんある。このスタディーツアーは、自分の将来につながることを多く発見できた8日間だった。カンボジアで見つけた夢を追いかけて、未来のために努力を続け、行動に移していこうと思う。



【生きるとは】

宮崎大学 地域資源創成学部 2年生

私は今回のカンボジアスタディツアーを通して、生きるとは何かについてとても考えさせられた。カンボジアでは毎日生きるため、食べ物を得るため、生活するために老若男女問わずたくさんの方が食欲に働いていた。また、将来のために必死に学校の授業に参加する姿に私は胸を打たれた。しかし、それはまだ良い方であろう。ゴミ山などの衛生など何も通用しないような劣悪すぎる環境で生活する人々。家庭の事情などにより小学校すらまともに通うことのできない子供達。そうした日本のような、望めば比較的何でも手に入るような豊かな国とはまるで別世界のようなカンボジアの現状を目にし、これが生きるということって何だろうと思った。私たちは、毎日当たり前のように学校へ行き、食べたいものを食べ、したいことをしている。それにより、それがどれだけ恵まれているかということも知らず、平気でそれらの数多い恵みを無駄遣いしている。実際、私もその中の一人であった。私たち日本人は将来に夢を抱いても、何かしらに理由をつけ、そうした恵まれた環境の中でもその夢から逃げて生きる人がほとんどだろう。しかし、カンボジアでは、劣悪すぎる環境ゆえに毎日を生きたのが精一杯で、将来に夢を抱くことすらできない人が多いはずだ。夢を持ったとしてもカンボジアという決してそれほどチャンスが多くない国では、夢を叶えられないまま終わってしまう人が多いだろう。日本人は将来に夢を持つことの豊かさを知らなければならない。また自分の夢を現実にできる豊か過ぎる環境があるということも知らなければならない。今回の研修で訪れた TAYAMA 日本語学校の、決して裕福ではないにしても、学校に通うことができている生徒たちの圧倒的な授業に対する意欲態度やエネルギーに私はとても驚いた。自分はよく大学で台湾や韓国からの留学生とともに授業を受ける機会があるが、これほどまで必死に授業に取り組む外国の学生は初めて見た。それは、彼らの周りに、また彼らの家庭に貧しく、学びたくても学ぶことのできない人々が数多くいるという背景があるからだろう。だからその人たちの分まで必死に学びを得ようとしているのではないか。日本人もそういう現状があるということを知り、決して他人事として捉えず、その学びに対しての食欲を見習っていかなければならない。それが今後の日本の教育の大きな課題となるはずだ。

何度も言うが、日本などの豊かな国は、生きることの本質を忘れてはいないだろうか。明日があり、夢がある。それが当たり前になってはいないだろうか。しかし、明日も夢もなく、今を生きることさえぎりぎりですら当たり前でない人々がこの世界には数多くいる。その事を決して忘れてはいけない。明日や夢を得るために必死に働くことが生きるとはの答えではないかと私は考える。

【カンボジアのためにできることとは】

北九州市立大学 文学部 2年生

私はカンボジアがどのような国なのか自分の目で見てみたいと思い、ツアーに参加した。実際訪れてみて、カンボジアのために自分ができることはあるのかと考える場面が多くあった。

まず、孤児院で実際に子どもたちと触れ合っ、子どもたちが本当に望んでいることは何なのかと疑問に思った。クロサトメイ孤児院では、将来子どもたちが自立できるように伝統ダンスや影絵などの技術指導を行っており、5歳から18歳の高校を卒業するまでの子どもたちを支援している。そこで出会った子どもたちは、私の想像に反してとても明るく元気に接してくれた。私は折り紙や文房具と一緒に遊び、寄付をしたが、それは支援と言うことが出来るものなのか分からないくらいとても小さなものである。わずかな時間ではあったが、一緒に遊んだ中で笑顔も見られた。子どもたちにとってどのようなものが幸せであるのか一方的に考えることはできないが、笑顔である状態がずっと続いていてほしいと感じた。また、農村の子どもたちと触れ合っ、教育について考えた。農村部では親が読み書きできない状態にある。しかし生活できているため、親が自分の子どもに教育が必要であるとは考えていない。日本では教育を受けることが当たり前になっており、教育を受けている側から考えると、受けるべきであると考え。教育を受けることが将来的に豊かさに繋がるのではないかと感じた。都市部と農村部では景色も生活も異なっており、教育を受けない状態が続くと格差が広がる。格差をなくすためには教育が必要であるが、農村での生活をしてきた人々にとって、考え方を考えることは容易ではないと感じた。そしてそのための支援も必要であると考え。

次に、支援に関して、Sunrise Japan Hospitalで、カンボジア人に合うような体制を作っているという話を聞いた。日本のやり方をそのまま当てはめるだけでは上手くいかない。病院や学校の建設や、経済的な支援をするだけではなく、その後どのようにカンボジアの人々のために役立つよう改善するかが必要である。カンボジア人の国民性や文化を考慮した上で体制を整えることが支援になるのではないかと考えた。

このツアーを通して、私が今までカンボジアの人々のためになるのではないかと考えていたことが、一方的で、そこで暮らす人々のことを考えることが出来ていなかったのだと気づいた。本当の支援を考えたときに最も重要なことは、カンボジアの文化をよく考えることだと思った。カンボジアの現在の状況は、ポル・ポト政権時代の影響を受け続けているといえる。医師や教師不足、経済的格差など問題も多い。そのような状況で、外側からの一方的な考え方を押し付けるのではなく、カンボジアの人々や文化を十分に考慮し、私たちにできることを考えていかなければならないと感じた。私たちがカンボジアの人々のためにできることはとても少ないが、実際にカンボジアで見たことや感じたことを多くの人に伝えて



いきたいと思った。